

**IBM WebSphere Partner Gateway Enterprise
and Advanced Editions**



インストール・ガイド

バージョン 6.0

**IBM WebSphere Partner Gateway Enterprise
and Advanced Editions**



インストール・ガイド

バージョン 6.0

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、95 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM[™] WebSphere[™] Partner Gateway Advanced Edition (5724-L68) および Enterprise Edition (5724-L69) バージョン 6、リリース 0、モディフィケーション 0、および新しいバージョンで明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。
<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは
<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： IBM WebSphere Partner Gateway Enterprise
and Advanced Editions
Installation Guide
Version 6.0

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2005.6

この文書では、平成明朝体[™]W3、平成明朝体[™]W7、平成明朝体[™]W9、平成角ゴシック体[™]W3、平成角ゴシック体[™]W5、および平成角ゴシック体[™]W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体[™]W3、平成明朝体[™]W7、平成明朝体[™]W9、平成角ゴシック体[™]W3、
平成角ゴシック体[™]W5、平成角ゴシック体[™]W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2003, 2005. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2005

目次

まえがき	v
本書について	v
対象読者	v
表記上の規則	vi
関連資料	vii
本リリースの新機能	ix
リリース 6.0 の新機能	ix
リリース 4.2.2 の新機能	ix
第 1 章 始める前に	1
プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件	1
環境の計画	4
可用性	4
スケーラビリティ	5
データ・ストレージ	6
セキュリティ	6
ポートの計画	7
接続形態	8
統合接続形態	9
分割接続形態	9
分散接続形態	9
最良実例の設計	10
WebSphere Application Server の考慮事項	11
第 2 章 Linux、Solaris、または AIX での WebSphere Partner Gateway のインストール	13
インストールの概要	13
インストール前提条件の検査および構成	13
ユーザー・アカウントの追加	14
WebSphere MQ の構成	15
DB2 のインストールおよび構成	16
Oracle のインストールおよび構成	17
プリインストール・チェックリスト表	17
WebSphere Partner Gateway のインストール	19
DISPLAY 環境変数	19
LaunchPad	19
データベースの作成	20
インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール	27
コマンド行によるコンポーネントのインストール	39
サイレント・インストールの実行	40
WebSphere Partner Gateway の開始	40
ヘルプ・システムの開始	42
インストール・システムのテスト	42
WebSphere Partner Gateway のアンインストール	43
トラブルシューティング	44
Database Loader のエラーの特定	44
誤ったバージョンの検出問題からの回復	45
第 3 章 Windows での WebSphere Partner Gateway のインストール	49
インストールの概要	49

インストール済み前提条件の検証および構成	49
ユーザー・アカウントの追加	50
WebSphere MQ の構成	51
DB2 のインストールおよび構成	52
Oracle のインストールおよび構成	53
プリインストールのチェックリスト	53
WebSphere Partner Gateway のインストール	55
LaunchPad	55
データベースの作成	55
インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール	61
コマンド行によるコンポーネントのインストール	75
サイレント・インストールの実行	76
WebSphere Partner Gateway の開始	76
ヘルプ・システムの開始	78
インストール・システムのテスト	78
WebSphere Partner Gateway のアンインストール	78
トラブルシューティング	80
Database Loader のエラーの特定	80
誤ったバージョンの検出問題からの回復	81
第 4 章 WebSphere Partner Gateway のアップグレード	83
WebSphere Partner Gateway のシャットダウン	83
以前のバージョンのバックアップ	84
オペレーティング・システムのアップグレード	85
データベースのアップグレード	85
照合シーケンスの更新	88
MQSeries と JMS のキュー構成の更新	88
以前のバージョンのアンインストール	89
WebSphere Partner Gateway のインストール	89
カスタム構成の復元	90
WebSphere Partner Gateway の開始	90
Oracle JDBC ドライバーの更新	90
索引	93
特記事項	95
プログラミング・インターフェース情報	97
商標	97

まえがき

本書について

本書では、IBM WebSphere Partner Gateway Advanced Edition バージョン 6.0 および IBM WebSphere Partner Gateway Enterprise Edition バージョン 6.0 について説明し、以下の情報を提供します。

- WebSphere Partner Gateway をインストールする前に必要なインストール前提条件について説明します。
- インストール計画に役立つ情報を提供します。
- 使用できる幾つかのデプロイメント構成について説明します。
- WebSphere Partner Gateway のインストール・ウィザードの実行方法について説明します。
- WebSphere Partner Gateway を始動してログインする方法について説明します。
- WebSphere Partner Gateway のアンインストール方法について説明します。

WebSphere Partner Gateway のインストールが完了したら、コミュニティーのセットアップ手順について、「ハブ構成ガイド」を参照してください。

対象読者

本書は WebSphere Partner Gateway をインストールする責任を持つ IT の専門家を対象としており、読者が以下の点に精通していることを前提にしています。

- 少なくとも以下のいずれかのオペレーティング・システムについての知識が必要です。
 - Linux
 - Solaris
 - AIX^(R)
 - Windows 2000
- DB2^(R) または Oracle 9i および 10g
- WebSphere MQ
- B2B の概念
- ビジネス・プロセス
- セキュリティー
- 環境の計画

WebSphere Partner Gateway 環境には、ハブ管理者とオペレーター管理者 (コミュニティー・オペレーターの管理ユーザー)、マネージャー管理者 (コミュニティー・マネージャーの管理ユーザー)、および参加者管理者 (参加者の管理ユーザー) の 4 つの管理ユーザー・タイプがあります。管理ユーザーは、以下の方法で製品のインストールと構成に参加します。

- ハブ管理者

ハブ管理者の役割は、以下のとおりです。

- 環境の計画を行って、スケーラビリティとロード・バランシングを最適化します。
- 前提条件が満たされていることを確認します。
- WebSphere Partner Gateway をインストールします。
- システム・パラメーターを構成します。

ハブを構成し、JMS を使用してイベントを外部キューに配信するよう計画する場合は、詳細について「ハブ構成ガイド」を参照してください。

- マネージャー管理者

コミュニティにおけるコミュニティ・マネージャー部分の正常性およびメンテナンスの責任を持ちます。

- オペレーター管理者

オペレーター管理者の役割は、以下のとおりです。

- ハブ・コミュニティで使用可能な接続を構成します。
- コミュニティ・オペレーターの従業員によってコンソールへのアクセスを管理します。

- 参加者管理者

システム・パラメーターを構成します。

これらのユーザーの役割について詳しくは、「管理者ガイド」を参照してください。

表記上の規則

本書では、以下のような表記上の規則を使用しています。

規則	説明
モノスペース・フォント	このフォントのテキストは、入力するテキスト、引数またはコマンド・オプションの値、例やコード例、システムにより画面に表示される情報 (メッセージ・テキストまたはプロンプト) のいずれかを表します。
太字	太字体のテキストは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースのコントロール (例えば、オンラインのボタン名、メニュー名、またはメニュー・オプション)、表の列見出しおよびテキストを表します。
イタリック	イタリック体のテキストは、強調、資料名、新規用語と本文で定義されている用語、変数名、または文字として使用されている英字を表します。
イタリック・モノスペース・フォント	イタリック・モノスペース・フォントのテキストは、モノスペース・フォントのテキスト内に記載された変数名を表します。
色付きの下線表示テキスト	色付きの下線表示テキストは、相互参照を表します。このテキストをクリックすると、参照先のオブジェクトに移動します。

青の枠線内のテキスト	(PDF ファイル専用) テキストを囲む青の枠線は、相互参照を表します。枠線で囲まれたテキストをクリックすると、参照先のオブジェクトに移動します。この規則は、この表に記載されている「色付きの下線表示テキスト」の規則の PDF ファイルの場合に相当します。
{INSTALL DIR} UNIX:/Windows:	製品のインストール先ディレクトリーを表します。 このいずれかの文字で始まるパラグラフは、オペレーティング・システムによる差をリストしたメモであることを示します。
『 』 (かぎ括弧)	(PDF ファイル専用) 資料の他のセクションへの相互参照を囲むかぎ括弧。
{ }	構文の記述行の場合、複数のオプションが中括弧で囲まれている場合、その中の 1 つのオプションのみを選択することが必要です。
[]	構文の記述行の場合、大括弧 [] で囲まれた部分は、オプション・パラメーターです。
...	構文の記述行の場合、省略符号 ... は直前のパラメーターが繰り返されることを示します。例えば、option[,...] は、複数のオプションをコンマで区切って指定できることを意味します。
< >	名前の変数部分を互いに区別するために変数部分を囲む不等号括弧。例えば、<server_name><connector_name>tmp.log など。
¥、/	円記号 (¥) は、Windows 環境でのディレクトリー・パスの構成要素の区切り文字として使用されます。UNIX をインストールしている場合は、スラッシュ (/) をバックスラッシュで置換します。

関連資料

この製品に付属する使用可能な資料の完全セットには、WebSphere Partner Gateway Enterprise and Advanced Editions のインストール、構成、管理および使用に関する包括的な情報が記載されています。

以下のサイトから、資料をダウンロードするか、オンラインで直接読むことができます。

<http://www.ibm.com/software/integration/wspartnergateway/library/infocenter>

注: 本書の発行後に公開されたテクニカル・サポートの技術情報や速報に、本書の対象製品に関する重要な情報が記載されている場合があります。これらのページは、WebSphere Business Integration サポート Web サイトにあります。

<http://www.ibm.com/software/integration/wspartnergateway/support/>

関心のあるコンポーネント・エリアを選択し、「Technotes」セクションと「Flashes」セクションを参照してください。

本リリースの新機能

リリース 6.0 の新機能

このセクションでは、バージョン 6.0 の WebSphere Partner Gateway に加えられた変更点を中心に説明します。

- プロダクト名が WebSphere Business Integration Connect から WebSphere Partner Gateway に変更されました。
- ファイル名とディレクトリーが更新され、新しい命名規則が反映されました。
- IBM WebSphere Application Server Express の組み込みバージョンをインストールするか、既存の WebSphere Application Server V6.0 を使用するかのオプションが WebSphere Partner Gateway Installer に追加されました。
- アップグレード情報が更新され、別の章に移動しました。83 ページの『第 4 章 WebSphere Partner Gateway のアップグレード』を参照してください。

リリース 4.2.2 の新機能

前回のリリース (4.2.1) 以降の本書での変更内容は、次のとおりです。

- 製品には、製品資料、DBLoader、および Installer にアクセスするためのランチパッドが用意されています。詳しくは、19 ページの『LaunchPad』 (UNIX[®]) または 55 ページの『LaunchPad』 (Windows[®]) を参照してください。
- アップグレード情報は更新されています。83 ページの『第 4 章 WebSphere Partner Gateway のアップグレード』を参照してください。
- 新規のデータベース接続の確認用のウィンドウが、WebSphere Partner Gateway Installer の一部として用意されています。

第 1 章 始める前に

この章では、WebSphere Partner Gateway の Enterprise Edition および Advanced Edition のインストールと稼働に必要なプラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアについて説明します。

『環境の計画』のセクションでは、最適なインストール・システムを作成できるように、インストール前に考慮すべき項目を示します。

最後に、この章では、WebSphere Partner Gateway のインストールに使用できるいくつかの配置構成について説明します。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』
- 4 ページの『環境の計画』
- 7 ページの『ポートの計画』
- 8 ページの『接続形態』
- 11 ページの『WebSphere Application Server の考慮事項』

プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件

次の表は、WebSphere Partner Gateway が現在サポートしているオペレーティング・システムのハードウェア要件とソフトウェア要件をリストするとともに、WebSphere Partner Gateway のインストール前にインストールしておく必要のある製品も示しています。

注: システムの実際の要件は、ユーザー特定の環境の複雑さ、スループット、およびデータ・オブジェクトのサイズによって大きくなる場合があります。

表 1. ハードウェア要件

サーバー	バージョン	推奨するハードウェアは以下のとおりです
Red Hat Enterprise Linux Advanced Server (Intel TM)	アップデート 3 が適用された 3	<ul style="list-style-type: none">• 2 GHz Intel Xeon プロセッサ• 2 GB 以上の RAM• アプリケーション用の、最小 300 MB の使用可能ディスク・スペース• 文書保管用の追加ディスク・スペース (30 GB を推奨)• 容量および冗長度を追加するための追加サーバー• マルチサーバーのインストール・システムでは、ネットワーク接続共用ストレージが必要

表 1. ハードウェア要件 (続き)

サーバー	バージョン	推奨するハードウェアは以下のとおりです
Microsoft ^(R) Windows Server または Microsoft Windows Advanced または Microsoft 2003 Standard および Enterprise	Service Pack 3 および 4 が適用された 2000	<ul style="list-style-type: none"> • 2 GHz Intel Xeon プロセッサ • 2 GB 以上の RAM • 300 MB 以上の使用可能ハード・ディスク・スペース • 文書保管用の追加ディスク・スペース (30 GB を推奨) • 容量および冗長度を追加するための追加サーバー • マルチサーバーのインストール・システムでは、ネットワーク接続共用ストレージが必要
AIX	メンテナンス・レベル 3 が適用された 5.2 または 5.3	<ul style="list-style-type: none"> • 600 MHz プロセッサ • 2 GB 以上の RAM • 300 MB 以上の使用可能ハード・ディスク・スペース • 文書保管用の追加ディスク・スペース (30 GB を推奨) • 容量および冗長度を追加するための追加サーバー • マルチサーバーのインストール・システムでは、ネットワーク接続共用ストレージが必要
Solaris	2004 年 6 月の推奨パッチ・クラスタが適用された 9	<ul style="list-style-type: none"> • 750 MHz 以上の UltraSparc • 2 GB 以上の RAM • 300 MB 以上の使用可能ハード・ディスク・スペース • 文書保管用の追加ディスク・スペース (30 GB を推奨) • 容量および冗長度を追加するための追加サーバー • マルチサーバーのインストール・システムでは、ネットワーク接続共用ストレージが必要

表1. ハードウェア要件 (続き)

サーバー	バージョン	推奨するハードウェアは以下のとおりです
SuSE Linux Enterprise Server	SuSE SP3 が適用された 8.0 9.0	<ul style="list-style-type: none"> • 2 GHz Intel Xeon プロセッサー • 2 GB 以上の RAM • アプリケーション用の、最小 300 MB の使用可能ディスク・スペース • 文書保管用の追加ディスク・スペース (30 GB を推奨) • 容量および冗長度を追加するための追加サーバー • マルチサーバーのインストール・システムでは、ネットワーク接続共用ストレージが必要

表2 には、WebSphere Partner Gateway のソフトウェア要件を示します。これらのアプリケーションは、ネットワーク上のどこに置いてかまいません。ただし、RDBMS と WebSphere MQ については、専用サーバー上に置くことをお勧めします。

表2. ソフトウェア要件

項目	バージョン	注記
データベース・サーバー: IBM DB2 Universal Database ^(TM) Enterprise Server Edition または Oracle 9i または 10g	8.2 DB2 ユニバーサル JDBC ドライバー Oracle JDBC シン・ドライバー 装備の 9.2.0.4 または 10.1.0.3	<p>WebSphere Partner Gateway データを保持するために必要です。DB2 は専用サーバーにインストールする必要があります。DB2 は、WebSphere Partner Gateway メディア・パックにバンドルされています。</p> <p>WebSphere Partner Gateway は、一組のデータベース・ストアード・プロシージャをインストールして使用します。 注: 構成設定や必要な製品バージョンなど、特定のオペレーティング・システムの要件については、DB2 の資料を参照してください。</p> <p>JDBC ドライバーは、OTN Web サイトからダウンロードできます。それを Oracle 9i または 10g にインストールすることもできます。</p>

表2. ソフトウェア要件 (続き)

項目	バージョン	注記
Java™ Message Service (JMS) を装備した WebSphere MQ	CSD08 が適用された 5.3、またはそれ以降のもの	WebSphere Partner Gateway コンポーネント間のメッセージングの処理に必要です。 WebSphere MQ は専用サーバーにインストールする必要があります。WebSphere MQ は、WebSphere Partner Gateway メディア・パックにバンドルされています。 CSD08 を入手するには、 http://www.ibm.com/software/integration/support/SupportPac/ にアクセスしてください。
Simple Mail Transport Protocol (SMTP) に基づいた E メール中継サーバー		E メール・アラート、SMTP メッセージ配信、およびアウトバウンド・トランスポートに必要です。
ProFTPD、またはその他の FTP サーバー		FTP を使用する場合にのみ必要です。 ProFTPD は www.proftpd.org から入手できます。
Network Attached Storage (NAS) などの共用ネットワーク・ストレージ		マルチサーバー環境用にのみ必要です。

表3 には、Community Console にアクセスするためのブラウザ要件を示します。

表3. ブラウザー要件

項目	バージョン	注記
Mozilla または Microsoft Internet Explorer (Windows のみ)	1.7 以降のもの 6.0 FP1	Community Console を使用するために必要です。
画面解像度の設定		1024 x 768 を推奨

環境の計画

このセクションでは、WebSphere Partner Gateway のインストール前に考慮すべきいくつかの事項について説明します。適切な計画を立てることで、要件に適合した配置接続形態を決定できます。

可用性

システム・ダウン時間は、ビジネスの生産性および収益性に深刻な影響を与えます。高可用性システムを構築すれば、システムが常に稼働しており、文書を受け取る準備のできている状態の、ハブ・コミュニティを実現できます。標準的な高可用性環境では、システムは 99.9 パーセントの稼働時間を実現しています。システムによっては、99.999 パーセントを実現しているものもあります。可用性レベルは、システム障害、システムの過負荷、ネットワーク輻輳、およびネットワーク・アタックなどによって低下する場合があります。可用性を最大化するには、システムに

冗長性をもたせる必要があります。このためには、アーキテクチャー内の別個のサーバー上に、各論理機能 (Community Console、Receiver、および Document Manager) を 2 つ以上実装する必要があります。したがって、1 つのサーバー上に 3 つのコンポーネントをすべて置く場合は、冗長性を提供する別のサーバーが必要になります。各コンポーネントをユーザー自身のサーバー上に別々に配置する場合は、冗長性を提供する合計 6 つのサーバーが必要になります。さらに、災害時回復ロケーションに別のサーバー・セットを構築して、そのロケーションからシステムを稼働できるようにすることも考慮する必要があります。

高い可用性をもった WebSphere Partner Gateway を構築するには、それをサポートするインフラストラクチャー (ネットワーク、インターネット接続、および装置に入ってくる電力) も、高い可用性をもつ必要があります。高可用性は、MQ および RDBMS についてもあてはまります。これらのサポート・アプリケーションのいずれかに障害が発生すると、実稼働環境にも障害が発生します。

スケーラビリティ

WebSphere Partner Gateway は水平に拡張します。これは、コンポーネントのインスタンスを追加すると、処理能力が高くなることを意味します。必要な実際の、サーバー数、特定コンポーネントのインスタンス、またはネットワーク機能は、次の要因によって異なります。

- **コミュニティ・サイズ** 多くのパートナーがハブに接続している状態は、より多くのユーザーがハブにアクセスすることを意味します。場合によっては、Community Console インスタンスの数を増やしてデータベースの機能を高め、より多くのユーザーをサポートする必要があります。
- **文書のボリューム** コミュニティー参加者およびコミュニティ・マネージャーが大量の文書を送信する場合は、Document Manager インスタンスの数を増やし、WebSphere MQ の機能を高める必要があります。
- **フローの複合度** プロセス・フローが複雑になると、それら进行处理する Document Manager インスタンスがより多く必要になります。例えば、大きなボリュームに関連して、追加の受信肯定応答、大量の文書、または複雑な変換を必要とするフローがあります。
- **ファイル・サイズ** 大きなファイルは、小さなファイルよりも、広いネットワーク帯域幅を必要とし、共用ファイル・サービスに大きな影響を与えます。
- **文書フロー** コミュニティー参加者がバッチ処理によってメッセージを送信する場合などによく発生しますが、受信中に文書数が急上昇すると、その急上昇中にメッセージの最大数を処理するのに十分な Receiver インスタンスが必要になります。Receiver は、通常、Document Manager より 4 倍から 5 倍速いことに注意してください。
- **待ち時間** 文書のある場所から別の場所へ送るのにかかる時間。待ち時間を長くする原因には、伝送手段、文書サイズ、Document Manager の処理などが含まれます。Document Manager の数を増やせば、待ち時間を短くできます。しかし、業務時間の最後に行われるバッチ処理などでは、長い待ち時間を受け入れる選択をすることもできます。例えば、午後 3:00 から午後 5:00 の間にバッチ処理を受け取る事がわかっている場合、より多くの Document Manager を実装することによって、そのデータのすべてをすばやく処理するようにもできるし、Document Manager が待機メッセージの処理中には、その時間に待ち時間が長くなるようにすることもできます。

これらの要因が変化する場合は、コンポーネントの複数のインスタンスを追加することによって、WebSphere Partner Gateway を拡張できます。Receiver、Community Console、および Document Manager の各インスタンスは、独立して動作することができます。ただし、WebSphere Partner Gateway コンポーネントを冗長構成にする場合は、いくつかのことを考慮する必要があります。

- 複数の Document Manager を構築する場合、すべてのインスタンスは、同一の WebSphere MQ キュー・マネージャーと通信し、同一のデータベース・インスタンスを指し示す必要があります。
- 複数の Community Console および Receiver を構築する場合、これらのコンポーネントはインターネットからの接続を受け入れるため、このネットワークには、ロード・バランサーが必要になります。
- コンポーネントは共通のファイル・システムを共有します。

WebSphere Partner Gateway を拡張する場合は、WebSphere MQ および RDBMS などの、サポート・インフラストラクチャーも拡張する必要があることに注意してください。

サーバーの構成が完了したら、システム・パフォーマンスをモニターして、要求に応じるために、いつ追加サーバーが必要なのか、また追加サーバーが必要かどうかを識別することが重要です。

データ・ストレージ

データ・ストレージは、WebSphere Partner Gateway の前提条件であり、ユーザーの接続形態におけるキー・コンポーネントです。共用ストレージの要件をどのように扱うかは、使用するストレージの要件および次の質問に対する答えによって異なります。

- どのぐらいの期間データを保管する必要があるか。ユーザーの業界に特定のデータ保存要件が存在するか。
- 高可用性をもったデータ・ストレージが必要か。
- 主幹業務の冗長性が必要か。

これらの領域でユーザーの要件が低い場合は、1 つ以上の WebSphere Partner Gateway コンポーネントが置かれているのと同じサーバーに、共用ストレージを実装することができます。そうでない場合は、WebSphere Partner Gateway とは別のサーバーに置く必要があります。高可用性が必要な場合は、冗長性をもった NAS 製品の使用を考慮してください。この製品は、サーバーから独立して拡張することができます。RDBMS および WebSphere MQ を、NAS 上に置く必要はないことに注意してください。

セキュリティ

WebSphere Partner Gateway は、標準的な機密保護機能のある環境内で動作します。ただし、以下のことに注意する必要があります。

- WebSphere Partner Gateway は、プロキシ・サーバーを明示的にサポートしませんが、独立のリバース・プロキシ・サーバーを、インバウンド・インターネット接続に使用することができます。WebSphere Partner Gateway がインターネットへのプロキシ・サーバーを使用できるのは、それらのサーバーが SSL 接続を

妨害しない場合に限られます。その理由は、WebSphere Partner Gateway は、初期 SSL 接続を使用して、接続の確立に不可欠な情報を取得するからです。

注: WPG は、アウトバウンド文書のフォワード・プロキシをサポートしていません。

- WebSphere Partner Gateway は、システムに入ってくる文書を検査する、アンチウイルスまたはファイアウォール・ソフトウェアによって悪い影響を受けます。パフォーマンスを最適化するには、WebSphere Partner Gateway サーバー上で、このタイプの検査を使用不可にすることを考えてください。

Community Console では、ロード・バランサーを使用する場合は、スティッキー・セッション (サーバー・アフィニティーとも呼ばれる) を使用可能にしておく必要があります。スティッキー・セッションを使用してロード・バランサーに指示を出し、構成された時間内に同じ IP アドレスからクライアント要求が送られてきた場合には、新規サーバーを選択せず、最後に指定されたのと同じサーバーにその要求が送信されるようにします。

Console は、1 つのセッションに対してブラウザーを介して送られてくるすべての要求が確実に同じサーバーに送られるようにするため、Cookie を使用します。スティッキー・セッションがオンになっていないと、Console からの各要求は、ロード・バランサーによって別のサーバーに送信される可能性があります。これは、問題の原因となります。例えば、Console はそのユーザーがログインしているとは見なしません。IP アドレス・レベルでスティッキー・セッションを使用可能にすると、Receiver も影響を受けるので、スケーリングに影響を与える可能性があります。ロード・バランサーは文書要求のたびに同じクライアント IP アドレスが使用されていることを認識するので、大量の文書を扱う参加者は文書を毎回同じ Receiver インスタンスに送信させることができます。別のオプションでは、Cookie の場合にのみスティッキー機能を使用可能にして、Receiver が影響を受けないようにすることができます。

ポートの計画

このセクションでは、インストールの計画に役立つデフォルトのポート情報を提供します。この情報により、WebSphere Partner Gateway をインストールする前に、ポートの可用性を確認できます。

表 4. インストーラーのデフォルトのポート - ユーザーから可視

ユーザーから可視	Console	Receiver	ルーター
HTTP	58080	57080	56080
HTTPS	58443	57443	56443

表 5. インストーラーのデフォルトのポート - ユーザーから不可視

ユーザーから不可視	Console	Receiver	ルーター
HTTP2	58090	57090	56090
HTTPS2	58043	57043	56043
SOAP_CONNECTOR	58880	57880	56880
BOOTSTRAP	58809	57809	56809

また、計画の際には、以下のポートについても考慮してください。

表6. サード・パーティー接続用のデフォルトのポート

要件	デフォルトのポート
WebSphere MQ キュー・マネージャーの接続用ポート	9999
DB2 の接続用ポート	50000
Oracle の接続用ポート	1521
ヘルプ・システムの接続用ポート	58888
ルーターから E メール・サーバーへの SMTP 接続用ポート	25

ファイアウォールの考慮事項

ファイアウォールを越えてインストールされている WebSphere Partner Gateway のすべてのコンポーネントへのポート・アクセスを構成する必要があります。ポート・アクセスの要件については、表7 を参照してください。

表7. ファイアウォール越しのコンポーネントの接続

コンポーネント	アクセスを必要とするコンポーネント
WebSphere MQ キュー・マネージャー	Console、Receiver、および Document Manager は、WebSphere MQ キュー・マネージャーにアクセスする必要があります。
DB2 または Oracle	Console、Receiver、および Document Manager は、DB2 または Oracle にアクセスする必要があります。
共通の共用ファイル	Console、Receiver、および Document Manager は、共通の共用ファイルにアクセスする必要があります。
Receiver	Document Manager は、同期応答するために Receiver の HTTP ポートにアクセスする必要があります。例えば、AS2 の同期 MDN などです。

接続形態

このセクションでは、WebSphere Partner Gateway とその前提条件ソフトウェアをインストールする前に考慮する必要のある、いくつかの接続形態 (配置構成) について説明します。選択する接続形態は、『環境の計画』セクションで説明した要因に基づいて選択する必要があります。このセクションで説明する接続形態は、統合接続形態、分割接続形態、および分散接続形態です。

分割接続形態と分散接続形態では、すべてのマシンの共用 common フォルダで、必ず同じマウント・ポイントとディレクトリー構造を使用する必要があります。例えば、DBLoader、Receiver、Console がマシン A にインストールされ、Document Manager がマシン B にインストールされているシナリオを想定してみます。このシナリオでは、マップされたドライブ (例えば Y:) をマシン A で作成する必要があります。ユーザーは、共用の common フォルダの場所を尋ねるプロンプトが出されたときに、このマップされたドライブを入力する必要があります。マシン B (お

よび、Document Manager のインスタンスがインストールされることになる以降のすべてのマシン) では、同じマップ (Y:) を作成し、共用の common フォルダに誘導する必要があります。

統合接続形態

この接続形態は最も単純なものです。この接続形態は、WebSphere Partner Gateway コンポーネントの 3 つ (Receiver、Community Console、Document Manager) のすべてが稼働する単一サーバーで構成されます。このサーバー上に WebSphere MQ および RDBMS を置くこともできます。ただし、これらの製品は、別個の専用サーバーに置く必要があります。

分割接続形態

分割接続形態は、Receiver と Community Console の各コンポーネントを含むフロントエンド・サーバー、および Document Manager コンポーネントを含むバックエンド・サーバーで構成されます。この接続形態は、小規模実稼働環境用の基本レベルの接続形態であり、これを使用すると、ソフトウェア投資の効果を最大化できます。WebSphere MQ および RDBMS は、これらのサーバーを含め、どこにでも置くことができることに注意してください。専用サーバーへの実装が最善の方法です。

分割接続形態では、3 つの WebSphere Partner Gateway コンポーネントのすべてのインスタンスは、同一のファイル共有システムによって通信を行う必要があります。大きなボリュームや高可用性を考慮する必要がない場合は、ストレージをバックエンドにホスティングすると安価なソリューションになります。パフォーマンスやセキュリティを考慮すると、フロントエンド・ストレージよりもバックエンド・ソリューションの方が好ましい選択です。このソリューションを使用する場合、フロントエンド・サーバーは、NFS 接続または同等のファイル共有ソリューションを使用して、バックエンド・サーバーとファイルを共有できます。

注: 分割接続形態配置のすべてのマシンのシステム時刻は、できるだけ頻繁に同期してください。メッセージを受信するときに Receiver ホスト・マシンで発生するイベントは、受信側マシンからのタイム・スタンプを付けてログに記録されます。同じメッセージの処理に関するその他のイベントが Document Manager マシンでも発生する可能性があり、これらのイベントは、Document Manager マシンからのタイム・スタンプを付けてログに記録されます。完全な時刻同期は不可能なので、コンソールのログ・レコードを表示する場合に順序付けに明らかな矛盾があっても、このことを認識しておけば理解に苦しまずに済みます。

分散接続形態

大規模インストール・システムに高い拡張性と冗長性をもった環境が必要な場合は、分散接続形態を構築します。この接続形態は、それぞれの WebSphere Partner Gateway コンポーネント (Receiver、Community Console、Document Manager) の、1 つ以上の専用サーバーで構成されます。例えば、冗長性のための 2 つの Receiver サーバー、多数の Community Console ユーザーをサポートする 4 つの Community Console サーバー、および文書処理用の 6 つの Document Manager を必要とする環境を構成できます。より高度な文書処理 (Document Manager)、より多くのユーザー (Community Consoles)、より多くの接続 (Receivers) を処理しなければならないコンポーネントでは、必要に応じてサーバーを追加することによってこの接続形態を拡張できます。

分散接続形態では、共用ストレージとして外部 NAS 装置を使用すると、いいソリューションになります。これによって、環境は、他のすべてのサーバーから独立した、ハイパフォーマンスの、冗長性のあるストレージ・デバイスをもつことができます。すべてのサーバーは、外部装置に対して、NFS 接続または同等のファイル共有ソリューションを確立できます。RDBMS および WebSphere MQ は専用サーバーに置く必要があります。また、それらのデータ・ストレージは NAS 装置に置く必要はありません。

最良実例の設計

接続形態を決定したら、次に、冗長性および災害時回復機能を提供する接続形態をどのように実装するかについて考慮する必要があります。ポッドに基づいて設計することをお勧めします。この設計には、1 次実動ポッドがあります。このポッドには、実動ロードを処理するのに必要な、すべての WebSphere Partner Gateway コンポーネントが含まれます。また、2 次実動ポッドがあり、これも実動ロードを処理できます。さらに、これら 2 つを切り替えるロード・バランサーがあります。2 次実動ポッドは冗長性を提供します。11 ページの図 1 は、この 2 つのポッドを実装する方法を示しています。

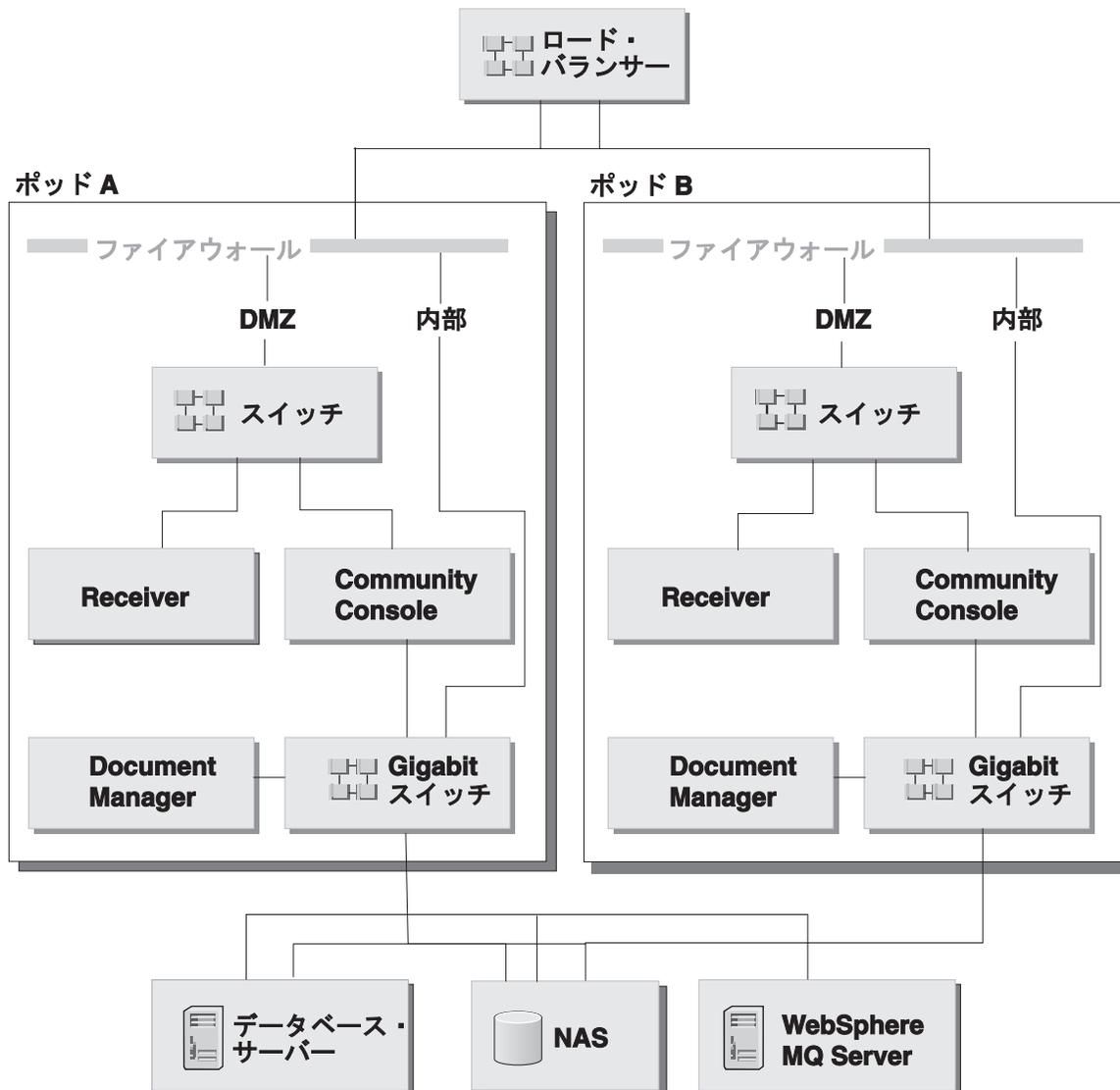


図 1. ポッドに基づいた接続形態

実動ロードを処理できる別のポッドを災害時回復サイトに置くことができます。3 つすべてのポッドのフロントエンド・コンポーネントは、同一でなければなりません。ただし、災害時回復ポッド用のバックエンド・コンポーネントは、実動コンポーネントから分離する必要があります。したがって、別個のデータベース・サーバー、WebSphere MQ サーバー、およびファイル共有システムが必要です。実動コンポーネントと災害時回復バックエンド・コンポーネント間には、ある形式のデータ同期処理を実装する必要があります。WebSphere Partner Gateway は、常に、アクティブな実稼働環境を 1 つしかサポートしません。また、統合接続形態などの最小インプリメンテーションの、テスト・ポッドを追加することもできます。

WebSphere Application Server の考慮事項

WebSphere Partner Gateway バージョン 6.0 をはじめとするアプリケーションを、既存の WebSphere Application Server V6.0 の先頭にインストールするオプションがあります。このオプションを選択する場合は、以下の点に注意してください。

- WebSphere Partner Gateway は、WebSphere Application Server V6.0 の Network Deployment エディションと Extended Deployment エディションをサポートしていません。
- インストール時、WebSphere Partner Gateway は、それぞれのコンポーネント (Receiver、Console、および Document Manager) ごとに別々の WebSphere Application Server プロファイルを作成します。これらのプロファイルは、WebSphere Partner Gateway で使用されるだけです。WebSphere Application Server アプリケーションをこれらのプロファイルに配置しないでください。必要であれば、デフォルト・プロファイルを使用するか、別のプロファイルを作成してください。

第 2 章 Linux、Solaris、または AIX での WebSphere Partner Gateway のインストール

以下の手順では、Linux、Solaris、または AIX のいずれかのシステム上で、WebSphere Partner Gateway のインストールとアンインストール、始動、テスト、およびトラブルシューティングを行う方法を説明します。

この章の手順は Linux に特有のもので、AIX および Solaris の環境では、パスが少し異なる場合があります。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『インストールの概要』
- 『インストール前提条件の検査および構成』
- 19 ページの『WebSphere Partner Gateway のインストール』
- 39 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』
- 40 ページの『サイレント・インストールの実行』
- 40 ページの『WebSphere Partner Gateway の開始』
- 42 ページの『インストール・システムのテスト』
- 43 ページの『WebSphere Partner Gateway のアンインストール』
- 44 ページの『トラブルシューティング』

インストールの概要

このセクションでは、WebSphere Partner Gateway のインストール・プロセスのハイレベルな概要について説明します。

この章では、以下の作業を詳細に説明します。

1. システムが、最低限のハードウェアおよびソフトウェアのインストール前提条件を満たしていることを確認します。
2. WebSphere Partner Gateway のデータベース表を作成して構成します。
3. WebSphere Partner Gateway ソフトウェアをインストールします。

インストール前提条件の検査および構成

WebSphere Partner Gateway をインストールする前に、必要な前提条件がすべて整っていることを確認してください。このセクションのトピックでは、システムのハードウェアおよびソフトウェア要件、サポートされるデータベース、WebSphere Partner Gateway の実行に必要なユーザー・アカウントの概要を説明します。

インストールの準備に活用できるように、このセクションの最後にプリインストール・チェックリストが用意されています。プリインストール・チェックリストは、WebSphere Partner Gateway のインストール前に実行しておく必要のある作業をリストしています。

- 表 1 は、Database Loader インストール・ウィザードを実行するときに入力する必要がある値をリストしています。インストールを計画している場合は、必要なインストール情報をこの表に記録できます (例えば、データベースのインスタンス名や表スペース情報など)。
- 表 2 は、WebSphere Partner Gateway インストール・ウィザードを実行するときに入力する必要がある値をリストしています。インストールの計画を立てるときに、WebSphere MQ サーバーのホスト名や、Community Console、Receiver、および Document Manager 用のポート番号などの必要なインストール情報を記録できます。

このセクションでは、以下のトピックについて説明します。

- 『ユーザー・アカウントの追加』
- 15 ページの『WebSphere MQ の構成』
- 16 ページの『DB2 のインストールおよび構成』
- 17 ページの『Oracle のインストールおよび構成』
- 17 ページの『プリインストール・チェックリスト表』

ユーザー・アカウントの追加

WebSphere Partner Gateway を安全に操作するには、1 組のオペレーティング・システム・ユーザーが必要です。次の手順を実行し、オペレーティング・システムのユーザーをセットアップします。この手順ではデフォルト名を使用していますが、実際に使用するユーザー名やグループ名に置き換えることができます。お客様自身のグループ名およびユーザー名を使用する場合は、8 文字を超えることができないことに注意してください。

複数のマシン上に WebSphere Partner Gateway をインストールする場合は、各マシン上のグループ ID (GID) およびユーザー ID (UID) が、他のすべてのマシン上のグループ GID およびユーザー UID に一致する必要があります。

次の手順では、WebSphere Partner Gateway のすべての機能とコンポーネントが、1 つのマシン上にインストールされていることを前提にしています。

ユーザー・アカウントを作成するには、以下のようになります。

1. WebSphere Partner Gateway ユーザーを含むグループを作成します。例えば、bcgroup を作成します。

Business Integration は、このグループのユーザーを使用して WebSphere Partner Gateway のコンポーネントを管理します。

2. ユーザーを作成します。

WebSphere Partner Gateway は、このユーザーを使用して WebSphere Partner Gateway のコンポーネントを管理します。インストール・ウィザードは、このユーザーとしてソフトウェアをインストールし、実行します。このユーザーは標準ユーザーであり、スーパーユーザーではありません。例えば、bcguser を作成します。

3. DB2 を使用する場合は、インストールするコンポーネントごとに、適切なユーザーを追加します。これらのユーザー ID は、DB2 サーバーでアクセス・データを制御するために必要です。以下は、コンポーネントごとに作成されたユーザー名の例です。
 - Community Console - bcgcon
 - Document Manager - bcgdoc
 - Receiver - bcgrece
4. すべてのユーザーを bcggroup グループに追加します。
5. ユーザー名とパスワードを 17 ページの『プリインストール・チェックリスト表』の表に記録します。

WebSphere MQ の構成

以下の手順では、インストール後に WebSphere MQ を構成する方法について説明します。適用する必要がある SupportPac およびアップデートのリストについては、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』を参照してください。この手順で使用する特定のコマンドについては、WebSphere MQ の資料を参照してください。

注: デフォルトのキュー・マネージャー名は `bcg.queue.manager`、デフォルトのリッスナー・ポートは 9999 です。これらのデフォルト値を変更する場合は、それらの値が使用されているすべての場所で確実に変更する必要があります。

WebSphere MQ を構成するには、以下のようにします。

1. 次のコマンドを入力して、ユーザーを `mqm` に変更します。

```
su - mqm
```

2. 次のように入力して、キュー・マネージャーを作成します。

```
crtmqm -q bcg.queue.manager
```

IBM では、`<MQInstallDir>/qmgrs/<qmgr>/qm.ini` に配置されている以下のデフォルト・ログ・パラメーターを変更して、プロセス・トランザクションのロールバック・エラーが発生する可能性をなくすようお勧めします。これらの属性について詳しくは、WebSphere MQ の資料を参照してください。

- `LogPrimaryFiles=62`
- `LogSecondaryFiles=2`
- `LogFilePages=2048`
- `LogBufferPages=128`

3. キュー・マネージャー構成ファイル (`MQHomeInstallDir/mqm/qmgrs/bcg/qm.ini`) の下部に次の行を追加して、チャンネル・パラメーターをアップデートします。

```
Channels:  
  MaxChannels=1000  
  MaxActiveChannels=1000
```

`MaxActiveChannels=1000` の下に空の行を入力して、構成ファイルの変更内容を保管します。

4. コンピューターに複数の CPU が存在する場合は、次のコマンドを入力します。

- ```
setmqcap <number of CPUs>
```
5. 次のコマンドでキュー・マネージャーを開始します。
 

```
strmqm bcg.queue.manager
```
  6. 次のコマンドでリスナーを開始します。
 

```
runmqtsr -t tcp -p 9999 -m bcg.queue.manager &
```
  7. 約 10 秒間待ってから Enter を押して、コマンド・プロンプトに戻ります。
  8. 次のように入力して、JMS Broker (パブリッシュおよびサブスクライブ・ブローカー) を開始します。
 

```
strmqbrk -m bcg.queue.manager
```
  9. 次のコマンドで MQ コマンド・サービスを開始します。
 

```
strmqcsv bcg.queue.manager
```
  10. Tools/MQSeries/BCGCreate\_Queues.mqsc ファイルを使用して、キュー・マネージャーのキューおよびチャネルを定義します。
 

```
runmqsc bcg.queue.manager <
<CD image>/Tools/MQSeries/BCGCreate_Queues.mqsc
```

<CD image> は、WebSphere Partner Gateway インストール CD のマウント・ロケーション、またはアンインストールされた WebSphere Partner Gateway インストール・ファイルのロケーションです。
  11. <MQHomeInstallDir>/mqm/Java/bin/MQJMS\_PSQ.mqsc ファイルを使用して、JMS パブリッシュおよびサブスクライブ・キューを構成します。
 

```
runmqsc bcg.queue.manager <
<MQHomeInstallDir>/mqm/Java/bin/MQJMS_PSQ.mqsc
```
  12. MQ ホスト名、キュー・マネージャー名、およびリスナー・ポートを 17 ページの『プリインストール・チェックリスト表』に記録します。

## DB2 のインストールおよび構成

実稼働環境で最高のパフォーマンスを引き出すには、WebSphere Partner Gateway データベースを専用サーバー上に置いてください。

データベースは、DB2 UDB がマルチプロセッサ・マシン上で稼働していることを前提にして構成されます。特に、DFT\_DEGREE パラメーターは 4 に設定されます。これは、SQL 照会が並列動作の 4 個のサブプロセスとして実行されることを示します。DB2 UDB がシングル・プロセッサ・マシンで稼働している場合はこれが最適の構成ではなく、システム・メモリーと CPU の間で競合が発生する可能性があります。お客様のデータベース管理担当者と共にデータベースの構成を検討し、必要であれば変更を加えて個別のデータベース環境に適合させる必要があります。

**注:** WebSphere Partner Gateway では分離ユーザー・オプションを使用しません。WebSphere Partner Gateway のインストールのときに、分離ユーザー ID を使用しないでください。

以下の手順に従って DB2 のインストールと構成を行います。

1. DB2 のインストール指示に従うか、DB2 Setup ウィザードを使用して、DB2 をインストールしてください。DB2 の特定のインストール指示については、DB2 の資料を参照してください。

注: 既存のインストールを使用することもできます。

2. DB2 が稼働していない場合は、次のコマンドを入力して始動させます。

```
db2start
```

すばやく参照するために、17 ページの『プリインストール・チェックリスト表』の表にある名前およびパスワードを記録しておきます。特に、デフォルト値を変更した場合は、デフォルト値も記録しておきます。

## Oracle のインストールおよび構成

本書には Oracle のインストール手順の説明はありません。Oracle のインストール手順については、該当する Oracle の資料を参照してください。

IBM では、Oracle のインストール中に、このセクションのガイドラインに従うことをお勧めします。

1. Oracle インストール資料の説明に従って、Oracle システム環境変数 (ORACLE\_HOME、ORACLE\_SID、ORACLE\_BASE など) をエクスポートします。Database Loader が、WebSphere Partner Gateway のインストール・プロセス中に自動的に SQL を実行する場合、root/管理者ユーザーにとってこの作業が必要になります。
2. ハブ・コンポーネントを実行するそれぞれのマシンで、Oracle JDBC ドライバーを使用可能にする必要があります。JDBC ドライバーは、インストール済みの Oracle バージョンと同じレベルでなければなりません。

ユーザー名とパスワードを 17 ページの『プリインストール・チェックリスト表』の表に記録します。特に、デフォルト値を変更した場合は、デフォルト値も記録しておきます。

## プリインストール・チェックリスト表

以下のチェックリスト項目は、WebSphere Partner Gateway のインストール前に実行しておく必要があります。

注: 以下のチェックリスト項目は、1 台のマシンへのインストールを前提にしています。

1. ユーザー・グループ `bcggroup` をオペレーティング・システムに作成します。オペレーティング・システムのユーザー `bcguser` を作成し、`bcggroup` のメンバーにします。DB2 を使用する場合は、オペレーティング・システム・ユーザー `bcgcon`、`bcgdoc`、および `bcgrecl` をすべて作成し、`bcggroup` のメンバーにします。Oracle を使用する場合は、オペレーティング・システム・ユーザー `bcgcon`、`bcgdoc`、および `bcgrecl` は不要です。
2. DB2 または Oracle をサーバーにインストールし、構成します。
3. WebSphere MQ をサーバーにインストールし、構成します。
4. SMTP サーバーが存在します。(オプション)
5. 複数のコンピューター接続形態を使用する場合は、共用ネットワーク・ストレージ (NAS、NFS など) を各コンピューターにインストールし、構成します。

表 8 に、Database Loader および WebSphere Partner Gateway インストール・ウィザードを開始する前に用意しておく必要のある情報を示します。インストール・ウィザードを実行するときに、この表を参照してください。

表 8. 必須情報

| 必須情報                                           | 値                                                     |
|------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|
| WebSphere Partner Gateway のユーザー名               | (デフォルトは bcguser)                                      |
| WebSphere Partner Gateway のユーザー・パスワード          |                                                       |
| WebSphere Partner Gateway のグループ名               | (デフォルトは bcgroup)                                      |
| Community Console のユーザー名                       | (デフォルトは bcgcon)                                       |
| Community Console のユーザー・パスワード                  |                                                       |
| Community Console のポート番号                       | (HTTP - デフォルトは 58080)<br>(HTTPS - デフォルトは 58443)       |
| ヘルプ・システム                                       | (デフォルトは 58888)                                        |
| Document Manager のユーザー名                        | (デフォルトは bcgdoc)                                       |
| Document Manager のユーザー・パスワード                   |                                                       |
| Document Manager のポート番号                        | (HTTP - デフォルトは 56080)<br>(HTTPS - デフォルトは 56443)       |
| Receiver のユーザー名                                | (デフォルトは bcgrecev)                                     |
| Receiver のユーザー・パスワード                           |                                                       |
| Receiver のポート番号                                | (HTTP - デフォルトは 57080)<br>(HTTPS - デフォルトは 57443)       |
| WebSphere MQ ホスト名                              |                                                       |
| WebSphere MQ キュー・マネージャーリスナー用の WebSphere MQ ポート | (デフォルトは bcg.queue.manager)<br>9999                    |
| 共用ロケーションのマウント・ポイント                             |                                                       |
| データベース・ホスト名                                    |                                                       |
| データベース・ポート                                     | (デフォルト・インスタンスを使用している場合のデフォルトは DB2=50000)(Oracle=1521) |
| データベース所有者 (DB2)                                |                                                       |
| 所有者のパスワード (DB2)                                |                                                       |
| データベース名 (DB2)                                  |                                                       |
| インスタンス名 (DB2)                                  |                                                       |
| 管理者ログイン ID (Oracle)                            |                                                       |
| 管理者パスワード (Oracle)                              |                                                       |
| Oracle SID (Oracle)                            |                                                       |
| スキーマ所有者ログイン (Oracle)                           |                                                       |

表 8. 必須情報 (続き)

| 必須情報                  | 値           |
|-----------------------|-------------|
| スキーマ所有者パスワード (Oracle) |             |
| SMTP ホスト名             |             |
| SMTP ポート番号            | (デフォルトは 25) |

## WebSphere Partner Gateway のインストール

前のセクションで記述された前提条件をすべて満たしていると、Database Loader および WebSphere Partner Gateway の各インストール・ウィザードを実行することができます。これらのウィザードは、直接または LaunchPad を介して実行できます。詳しくは、『LaunchPad』を参照してください。

**注:** AIX 電子製品イメージの tar ファイルは、イメージのパス長さが 100 文字を超えるので、AIX に用意されているデフォルトの tar プログラムを使用して正常に解凍することができません。ただし IBM では、AIX 電子製品イメージの tar ファイルを正常に解凍する tar プログラムを配布しています。この tar プログラムは、以下の場所にある Linux アプリケーション向け AIX ツールボックスから入手できます。

<http://www-1.ibm.com/servers/aix/products/aixos/linux/download.html>

## DISPLAY 環境変数

Database Loader とハブのインストール・ウィザードでは、UNIX の X Windows システムを使用してグラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示します。X Windows システムでは、DISPLAY 環境変数をシステム環境にエクスポートする必要があります。以下のコマンド行により、DISPLAY 環境変数を Bourne シェルからの IP\_Address に設定します。

```
DISPLAY=IP_Address:0.0
export DISPLAY
```

シェルに適切な構文を使用して DISPLAY 環境変数を設定します。

**注:** xclock などの X クライアント・プログラムをコマンド行から実行して、DISPLAY システム環境変数と X Windows システムが正常に構成されていることを検査してください。xclock クライアントが X Server ウィンドウ (ローカルまたはリモート) に表示されれば、ウィザードも正常に表示されます。

## LaunchPad

WebSphere Partner Gateway には、製品概要、README ファイル、製品資料、Database Loader、および WebSphere Partner Gateway Installer にワンストップでアクセスできる LaunchPad プログラムが用意されています。別の方法として、提供されている setup\*.\* プログラムを使用して、データベース・ローダーおよびインストール・プログラムを始動することもできます。20 ページの『データベースの作成』および 27 ページの『インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール』を参照してください。

注: LaunchPad のオプションの中には、ブラウザをインストールしてシステム・パス内で使用可能にする必要があるものもあります。

LaunchPad の実行可能ファイルは、次のディレクトリーに置かれています。

```
{CD_ROM/MEDIA DIR}/LaunchPad.sh
```

## データベースの作成

WebSphere Partner Gateway には、データベース表をセットアップするインストール・ウィザードが含まれています。Database Loader ウィザードは、情報を収集して、表を作成し、表にデータを取り込んでくれます。また、表を作成するために使用する SQL ファイルを保存することもできます。その後、SQL ファイルを使用して表を作成し、データを取り込むことも可能です。SQL ファイルを手動で実行することにより、データを取り込む前にデータベース表を検討できます。

始める前に、ご使用のデータベース・サーバーがインストールされ、正しく構成され、稼働しているかどうかを検証します。

DBLoader は、実際のデータベースが構築されていないマシンで実行することができます。そのマシンには Oracle/DB2 をインストールしますが、実際のデータベースは別のマシンに配置することが可能です。DBA は、それに合わせて構成に変更を加える必要がありますが、これについて説明することは本書の目的ではありません。まず、リモート・マシンにデータベースを作成します。次に、DBLoader をインストールするマシンの Oracle/DB2 を使用してリモート・データベースを構成し、データベースを稼働させるマシンや使用するポートなどを指定します。この構成作業が完了すれば、データベースがローカルで実行されているかのような感覚で DBLoader を実行できます。残りの操作は Oracle/DB2 によって自動的に実行されます。このデータベースに対するすべての SQL コマンドは、正しいマシンに送信されて処理されます。SQL は自動的に実行できます。

以下の手順では、Database Loader GUI を使用してデータベースを構成する方法について説明します。GUI を使用せずに Database Loader をインストールすることもできます。詳しくは、39 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』を参照してください。

注: 構成設定や必要な製品バージョンなど、特定のオペレーティング・システムの要件については、DB2 の資料を参照してください。

データベース表をセットアップするには、以下のようにします。

1. root ユーザーとしてログインします。

Database Loader では、SQL を自動的に実行して表スペース・ディレクトリーの所有権を作成/変更するために、管理者特権が必要です。

2. Database Loader ディレクトリーから、ユーザーのプラットフォームに特定の 21 ページの表 9 にリストされているセットアップ実行可能ファイルを実行します。

cd DBLoader

表9. インストーラー用のプラットフォーム固有の実行可能ファイル

| プラットフォーム | 実行可能ファイル   |
|----------|------------|
| Linux    | setupLinux |
| AIX      | setupAIX   |
| Solaris  | setupSunOS |

Database Loader ウィザードが始動し、「ようこそ」ウィンドウが表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

- 「ソフトウェア・ライセンス契約 (Software License Agreement)」ウィンドウで、ソフトウェア・ライセンス契約を読みます。契約条件に同意する場合は、「**ライセンス契約の条件に同意します。(I accept the terms of the license agreement)**」を選択します。「次へ」をクリックして先へ進みます。
- 「ディレクトリー名」ウィンドウで、データベースをセットアップするときに Database Loader が使用するディレクトリーのパスおよびディレクトリー名を入力します。IBM では、新規のディレクトリー・ロケーションを作成するか、または空のディレクトリーを選択することをお勧めします。埋め込みスペースや特殊文字は、ディレクトリー名に使用しないでください。

データベースおよびデータベースに格納されるすべてのアプリケーション・データのために十分なスペースがあるロケーションを選択します。「次へ」をクリックして先へ進みます。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「**ファイル名を入力 (Enter file name)**」フィールドに「**.**」を1つ入力してください。「**.**」を入力しないと、「**ディレクトリーを選択 (Select a directory)**」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

- データベース・タイプの選択ウィンドウで、WebSphere Partner Gateway に使用するデータベース・サーバーを選択します。DB2 8.2 または Oracle 9i 9.2.0.4 以降を選択できます。「次へ」をクリックして先へ進みます。
- データベース情報ウィンドウで、次のデータベース情報を入力し、入力を終えたら「次へ」をクリックします。

#### **DB2:**

DB2 を選択した場合は、DB2 データベース情報ウィンドウが表示されます。以下の DB2 データベース情報を入力します。

- データベース名
- インスタンス名
- グループ名
- 所有者名
- 所有者のパスワード

#### **Oracle:**

- a. Oracle を選択すると、Oracle データベース情報ウィンドウが表示されます。以下の Oracle データベース情報を入力します。
  - 管理者ログイン ID
  - 管理者パスワード
  - Oracle SID
  - スキーマ所有者ログイン
  - スキーマ所有者パスワード
- b. Oracle ホーム・ロケーション・ウィンドウが表示されます。Oracle ホーム・ディレクトリー・ロケーションを入力するか、「参照」をクリックして入力します。図 2 を参照してください。

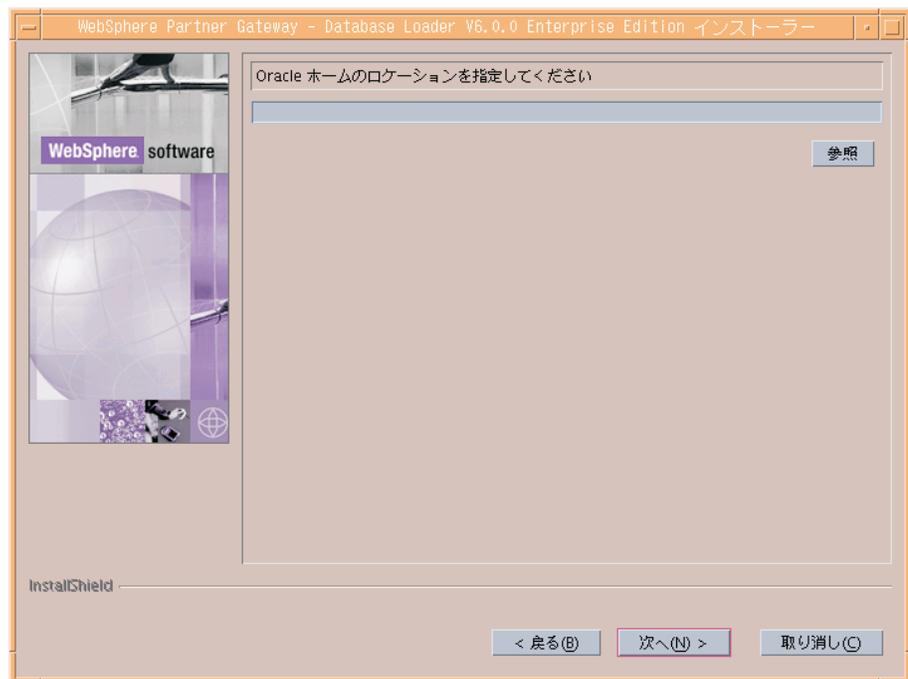


図 2. Oracle ホーム・ディレクトリー・ロケーション・ウィンドウ

7. データベース・ロケーション・ウィンドウ (DB2 の場合は 23 ページの図 3、Oracle の場合は 24 ページの図 4) で、データベース・サーバー上のデータベースおよびデータベースの各表スペースのロケーションの絶対パスを入力します。例えば、DB2 データベースのディレクトリー・パスは、*DB2Home/IBM/bcgdbloader/tables* のようになります。

注: ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

これらの値のいずれかを変更した場合、SQL ファイルを実行する前に、それらの値がなければなりません。それらの値がない場合は、それらを手動で作成する必要があります。

必須情報を入力したら、「次へ」をクリックします。

注: データベースとすべてのアプリケーション・データを保持するのに十分なスペースのあるファイル・システム・ロケーションを選択します。データベースのサイズは、WebSphere Partner Gateway の稼働中に大きくなります。

## DB2



図3. DB2 のデータベース・ロケーション・ウィンドウ

## Oracle



図4. Oracle のデータベース・ロケーション・ウィンドウ

8. コンポーネントの構成ウィンドウ (25 ページの図 5) で、WebSphere Partner Gateway コンポーネントのログイン情報、および共通の共用ファイルのロケーションを入力します。完了したら「次へ」をクリックします。

Community Console、Document Manager、および Receiver の「ユーザー名」と「パスワード」の各フィールドで、各コンポーネントについて、ユーザーの名前とパスワードを入力します。DB2 を使用している場合、これらのユーザーは、サーバーを構成したときに作成されました。

「グループ名」フィールドには、WebSphere Partner Gateway ユーザーを含むグループの名前を入力します。

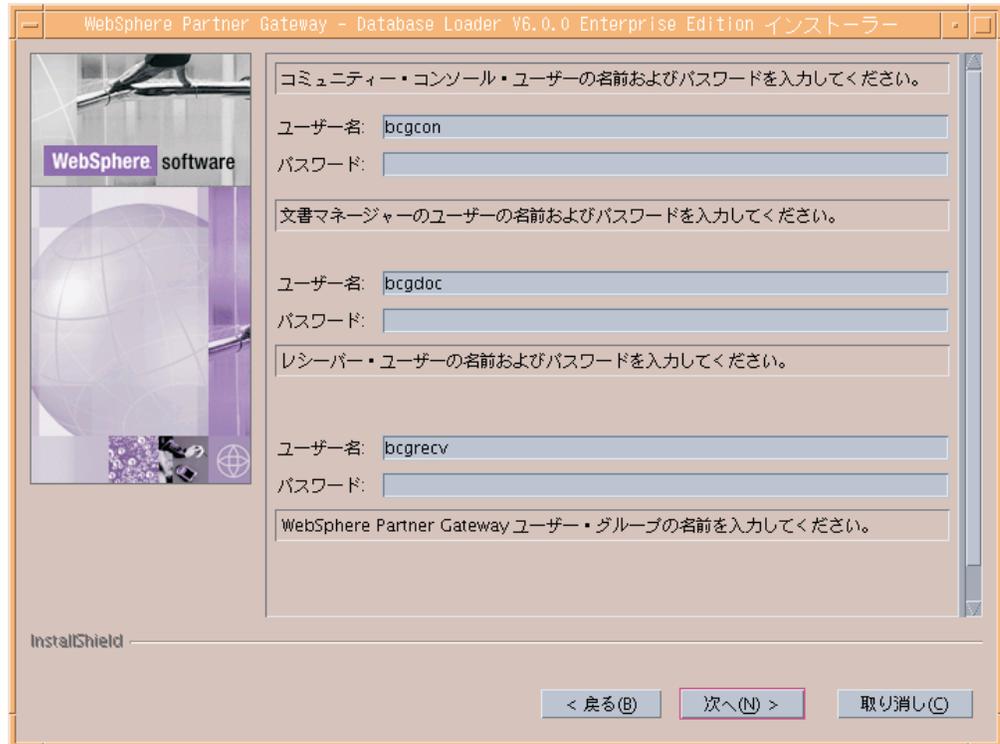


図5. コンポーネントの構成ウィンドウ

9. 「共有情報のマウント・ポイント」ウィンドウで、WebSphere Partner Gateway の主要コンポーネントが使用する共通の共有ファイルのロケーションを入力します。

注:

- a. 複数のマシンに WebSphere Partner Gateway をインストールする場合は、すべてのマシンの共有 common フォルダで、同じマウント・ポイントとディレクトリー構造を使用する必要があります。
  - b. ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。
10. ウィザードには、Database Loader が SQL ファイルの作成のみを行うようにするか、SQL ファイルを作成してから実行するようにするかを選択できるウィンドウが表示されます。26 ページの図6 を参照してください。

Database Loader が SQL ファイルを実行する場合は、次の作業を行います。

- 表スペースの作成
- スキーマの作成
- 表、ビュー、シーケンス、プロシージャ、および関数を作成し、それらにメタデータを取り込む
- 表への許可の割り当て
- ストアード・プロシージャの作成

Database Loader はルーチンの一部として DB2 インスタンスを再始動します。このため、WebSphere Partner Gateway データベースをセットアップする DB2 インスタンスを使用しているすべてのアプリケーションを切断する必要があります。

ユーザーに代わって Database Loader にファイルを実行させる場合は、「SQL ファイルの実行」チェック・ボックスを選択します。「次へ」をクリックして先へ進みます。



図 6. SQL ファイルの実行ウィンドウ

11. Database Loader のインストール・ロケーションを確認します。「次へ」をクリックして先へ進みます。
12. 「完了」ボタンが使用可能になったら、このボタンをクリックします。
13. SQL を手動で実行する場合の詳細については、bcgdbloader/scripts サブディレクトリー (Database Loader インストール・ウィザードによってインストールされる) にある Instructions.txt ファイルを参照してください。

WebSphere Partner Gateway データベースのセットアップが完了すると、WebSphere Partner Gateway のコンポーネントをインストールすることができます。

以下のセクションでは、InstallShield ウィザード GUI を使用してコンポーネントをインストールする方法について説明します。コンポーネントは、GUI を使用しなくてもインストールできます。詳しくは、39 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』を参照してください。

## インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール

WebSphere Partner Gateway には、Community Console、Receiver、および Document Manager の 3 つの主要なコンポーネントがあります。3 つのコンポーネントはすべて、共通のコンテンツを共有します。単一サーバーにコンポーネントと共通コンテンツをインストールすることも、別々のサーバーに各コンポーネントをインストールすることも、これらの 2 つのオプションを組み合わせることもできます。最低でも 1 つのサーバーに、各コンポーネントの 1 つのインスタンスをインストールする必要があります。さまざまなコンポーネントを別々のサーバーに配置する計画の立て方については、4 ページの『環境の計画』および 8 ページの『接続形態』を参照してください。

**注:** 複数のマシンに WebSphere Partner Gateway をインストールする場合は、すべてのマシンの共有 common フォルダーで、同じマウント・ポイントとディレクトリ構造を使用する必要があります。

開始する前に、前提条件ソフトウェアのインストールと構成が正しく行われていることを確認してください。ソフトウェアの前提条件については、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』の、すべての WebSphere Partner Gateway サーバーの要件についての表を参照してください。また、ソフトウェアの構成方法については、13 ページの『インストールの概要』を参照してください。また、WebSphere Partner Gateway データベースのセットアップも完了している必要があります。詳しくは、20 ページの『データベースの作成』を参照してください。最後に、キュー・マネージャーとリスナーを含め、ご使用のデータベース・サーバーと WebSphere MQ が稼働している必要があります。

統合接続形態を使用する場合以外は、共通コンポーネントは 1 度しかインストールする必要はありません。

WebSphere Partner Gateway をインストールするには、以下のようになります。

1. root 管理者としてログインします。

ハブ・インストーラーでは、ネイティブ・ソフトウェア・レジストリーと統合するために、root/管理者特権が必要です。

2. ハブ・ディレクトリーで、ユーザーのプラットフォームに固有の表 10 にリストされているセットアップ実行可能ファイルを実行します。

表 10. インストーラー用のプラットフォーム固有の実行可能ファイル

| プラットフォーム | 実行可能ファイル     |
|----------|--------------|
| Linux    | setupLinux   |
| AIX      | setupAIX     |
| Solaris  | setupSolaris |

ウィザードが始動し、「ようこそ」ウィンドウが表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

3. 「ソフトウェア・ライセンス契約 (Software License Agreement)」ウィンドウで、ライセンス契約を読みます。契約条件に同意する場合は、「**ライセンス契約の条件に同意します。(I accept the terms of the license agreement)**」をクリックします。「次へ」をクリックして先へ進みます。

4. 「ディレクトリー名」ウィンドウで、WebSphere Partner Gateway をインストールするときにウィザードが使用するディレクトリーのパスと名前を入力します。IBM では、新規のディレクトリー・ロケーションを作成するか、または空のディレクトリーを選択することをお勧めします。埋め込みスペースや特殊文字は、ディレクトリー名に使用しないでください。「次へ」をクリックして先へ進みます。

注: ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

5. コンポーネント選択ウィンドウ (図 7) で、サーバーにインストールするコンポーネントを選択します。複数のコンポーネントを選択できます。「次へ」をクリックして先へ進みます。



図 7. コンポーネント選択ウィンドウ

残りの手順では、すべてのコンポーネントをインストールすることを前提に説明します。すべてのコンポーネントをインストールしない場合、残りの手順で説明する一部のウィンドウは表示されません。

6. インストール先のマシンの完全修飾ホスト名を指定します。「次へ」をクリックして先へ進みます。
7. WebSphere Partner Gateway をホストするときに使用される以下の WebSphere Application Server のうちいずれかを選択します。29 ページの図 8 を参照してください。「次へ」をクリックして先へ進みます。

- IBM WebSphere Application Server Express の組み込み版を自動的にインストールします。
- このコンピューターにすでにインストールされている WebSphere Application Server V6.0 を使用します。

このオプションを選択すると別のウィンドウが表示されるため、WebSphere Application Server がインストールされているディレクトリーを入力する必要があります。

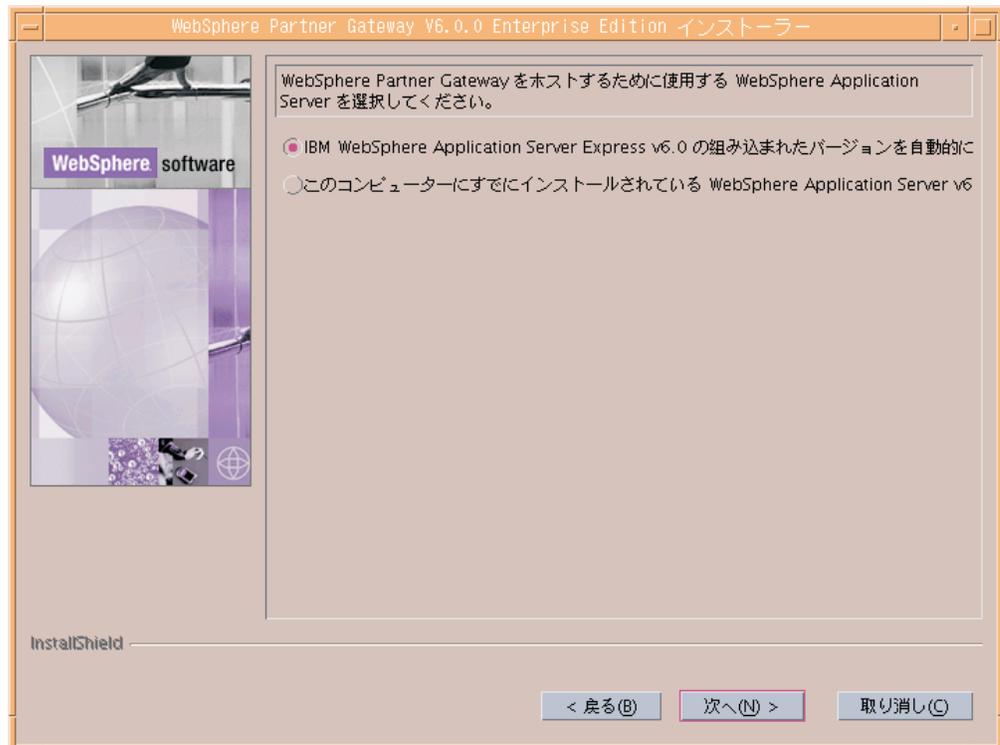


図8. サーバー選択ウィンドウ

8. データベース・サーバーの選択ウィンドウ (30 ページの図9) で、使用するデータベース・サーバーを選択します。**DB2 8.2** 以降または **Oracle 9i 9.2.0.4** 以降を選択できます。「次へ」をクリックして先へ進みます。



図9. データベース選択ウィンドウ

9. データベース情報ウィンドウが表示されます。データベース・サーバーとして DB2 を選択した場合は、この手順の DB2 に固有な指示に従ってください。データベース・サーバーとして Oracle を選択した場合は、この手順の Oracle に固有な指示に従ってください。

### DB2

DB2 を選択した場合は、DB2 データベース情報ウィンドウが表示されます。31 ページの図 10。

現行システムに DB2 がインストールされていない場合は、DB2 を稼働するコンピューターのホスト名を、「localhost」から DB2 を含むシステムの名前に置き換えることによって入力します。

「ポート」フィールドで、DB2 インスタンスが使用するポート番号を入力します。DB2 インスタンスが使用するポートを調べるには、DB2 Control Center (GUI) を使用してプロパティを確認するか、DB2 構成コマンド、`db2 get dbm cfg` をコマンド・プロンプトに入力します。この DB2 構成情報は、Database Loader によって、`system temp/bcgdbloader/logs` ディレクトリーにも保管されています。デフォルトのポートは 50000 です。

「所有者名」、「所有者パスワード」、「データベース名」、および「スキーマ名」の各フィールドに、所有者名、所有者のパスワード、データベース名、およびインスタンス名をそれぞれ入力します。これらは、データベースを定義するために、Database Loader のインストールで使用された名前です。20 ページの『データベースの作成』を参照してください。

「次へ」をクリックして先へ進みます。



図 10. DB2 情報ウィンドウ

### Oracle:

Oracle を選択すると、データベース情報ウィンドウが表示されます。32 ページの図 11 を参照してください。

Oracle データベースに関する必須情報を入力します。デフォルトのポートは 1521 です。

JDBC ドライバーの絶対パスと名前は、このコンピューター上のドライバーの正しいバージョンを指し示している必要があります。ドライバーは、Oracle インストール・ディレクトリーにあります。

ドライバーは、

[http://www.oracle.com/technology/software/tech/java/sqlj\\_jdbc/index.html](http://www.oracle.com/technology/software/tech/java/sqlj_jdbc/index.html) からダウンロードできます。「JDBC Driver Downloads」のセクションで、「Oracle xx Release x drivers」をクリックします。稼働している Oracle xx バージョンに一致するドライバー・バージョンを間違わずに選択してください。

注: ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

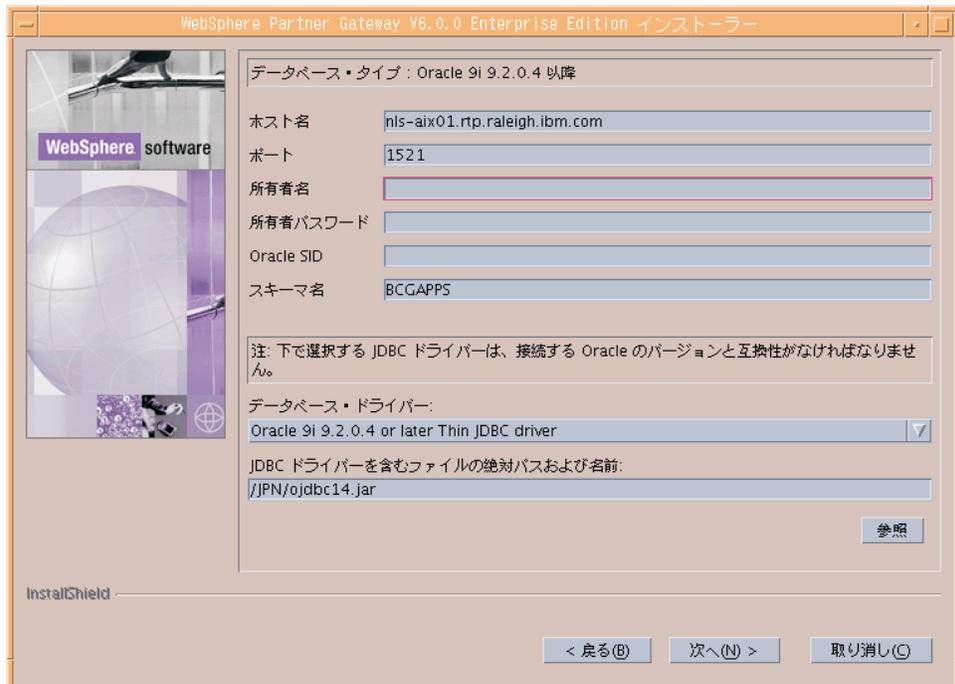


図 11. Oracle データベース情報ウィンドウ

データベース接続確認ウィンドウが表示されます。33 ページの図 12 を参照してください。接続が正常に行われた場合、テーブル、ビュー、関数、およびプロシージャのカウンタ情報に注意し、確認します。接続が失敗した場合は、情報ウィンドウの指示を検討するか、データベース資料を参照してエラー・コードに対応します。

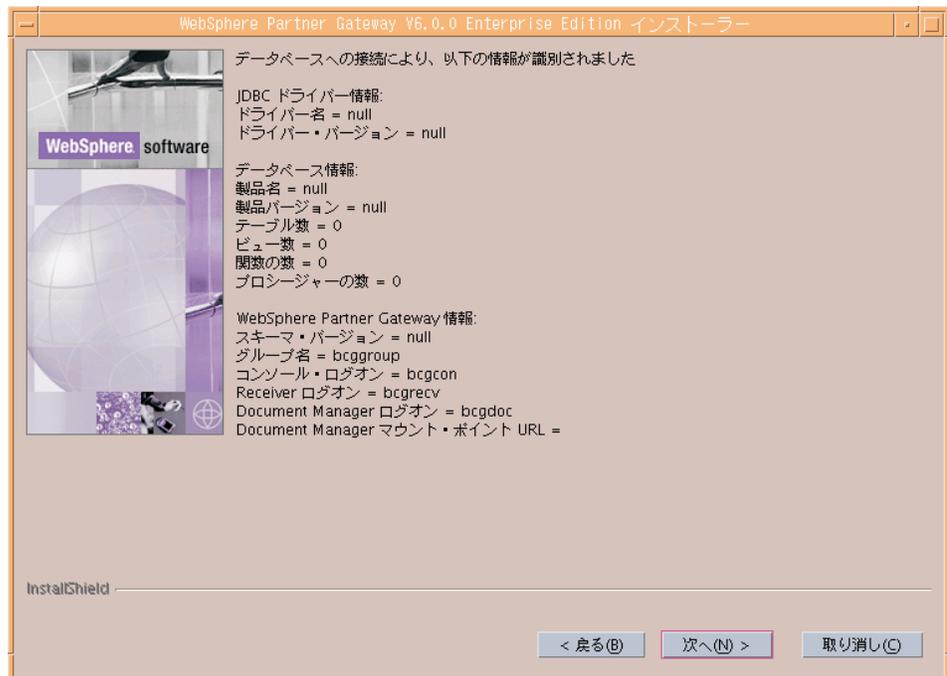


図 12. データベース接続確認ウィンドウ

10. 「ユーザー情報 (User Information)」ウィンドウで、インストールの責任を持つ管理者のユーザー名、パスワード、およびグループ名を入力します。「次へ」をクリックして先へ進みます。

注: この情報は、Database Loader のインストール時に使用した情報と一致する必要があります。

11. 「共通情報ディレクトリー」ウィンドウで、コンポーネントによって共有される共通情報の場所を入力します。「次へ」をクリックして先へ進みます。

注: ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「。」を 1 つ入力してください。「。」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

12. WebSphere MQ が同じコンピューターにインストールされていない場合、「WebSphere MQ Server」ウィンドウ (34 ページの図 13) で、WebSphere MQ が稼働しているコンピューターのホスト名を入力します。デフォルト名を使用しなかった場合は、必ず、キュー・マネージャーの名前を変更してください。

WebSphere MQ が現在のマシンに収容されていない場合は、「ホスト名」フィールドで、「localhost」を WebSphere MQ が収容されているシステム名に置き換えます。

「キュー・マネージャー」フィールドで、デフォルトの名前を、WebSphere MQ を構成するときに使用した名前に置き換えます (15 ページの『WebSphere MQ の構成』のステップ 2 を参照)。

「リスナー・ポート」フィールドには、リスナーが使用するポートを入力します (15 ページの『WebSphere MQ の構成』を参照)。デフォルトのポートは 9999 です。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

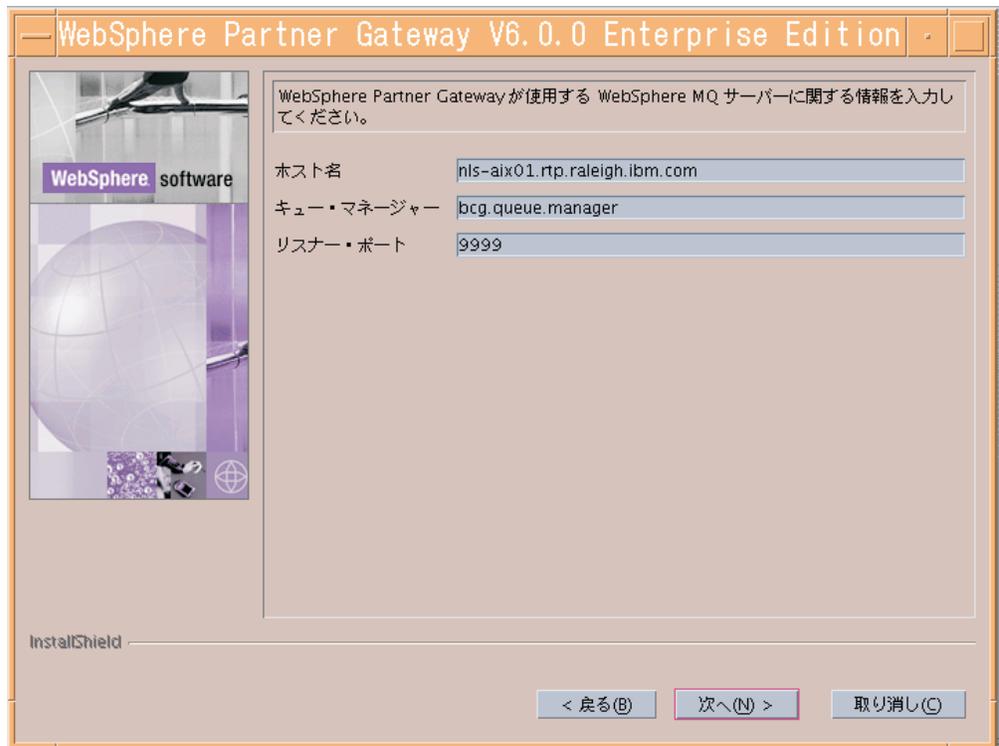


図 13. WebSphere MQ Server ウィンドウ

13. Community Console のインストールを選択した場合は、Community Console の構成ウィンドウを使用して構成します。35 ページの図 14 を参照してください。

「**ユーザー名**」フィールドで、Community Console コンポーネントがデータベースにログインするときに使用するユーザー ID を入力します。

「**パスワード**」フィールドには、ユーザー名に関連したパスワードを入力します。必ず正しいパスワードを入力してください。パスワードが間違っていると、Community Console は動作しません。

「**HTTP ポート**」フィールドで、コンポーネントがメッセージを listen するポートの名前を入力します。Community Console、Receiver、および Document Manager には固有のポート番号が割り当てられ、それらのポートはこのコンピューターで使用可能な状態になっている必要があります。デフォルトのポートは 58080 です。

「**HTTPS ポート**」フィールドで、コンポーネントがメッセージを listen するセキュア・ポートの名前を入力します。Community Console、Receiver、および Document Manager には固有のポート番号が割り当てられ、それらのポートはこのコンピューターで使用可能な状態になっている必要があります。デフォルトのポートは 58443 です。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

注: データベース接続が失敗すると、データベース情報ウィンドウが表示されます。データベース情報ウィンドウの指示を検討するか、データベース資料を参照して、エラー・コードに対応します。

WebSphere Partner Gateway V6.0.0 Enterprise Edition

データベースにアクセスするためにコミュニティ・コンソールが使用する名前およびパスワードを入力してください。

ユーザー名: bcgcon

パスワード:

コミュニティ・コンソールが使用するポートを入力してください:

HTTP ポート: 58080

HTTPS ポート: 58443

ヘルプ・システムのホスト名: nls-aix01.rtp.raleigh.ibm.com

ヘルプ・システムのポート番号: 58888

注: これらのポートは固有で、このコンピュータで使用可能でなければなりません。

InstallShield

< 戻る(B)    次へ(N) >    取り消し(C)

図 14. Community Console の構成ウィンドウ

- Receiver コンポーネントまたは Document Manager コンポーネントを選択した場合は、それぞれの構成ウィンドウを使用して構成します。これらのウィンドウには、Community Console の構成ウィンドウと同じフィールドがあります。3つのコンポーネント (Community Console、Receiver、および Document Manager) すべてで、別々の HTTP ポートと HTTPS ポートを使用する必要があります。36 ページの図 15 および 16 を参照してください。

注: 別々のマシンに Receiver と Document Manager をインストールする場合は、Receiver マシンに Document Manager マシンによって解決可能なホスト名を付ける必要があります。

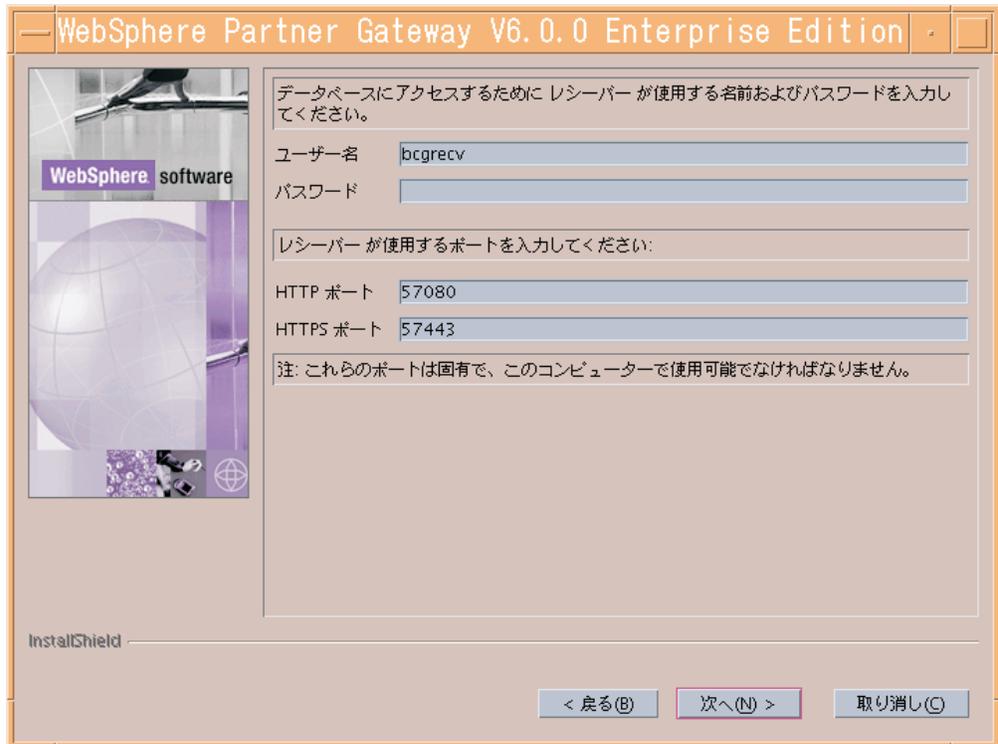


図 15. Receiver の構成ウィンドウ

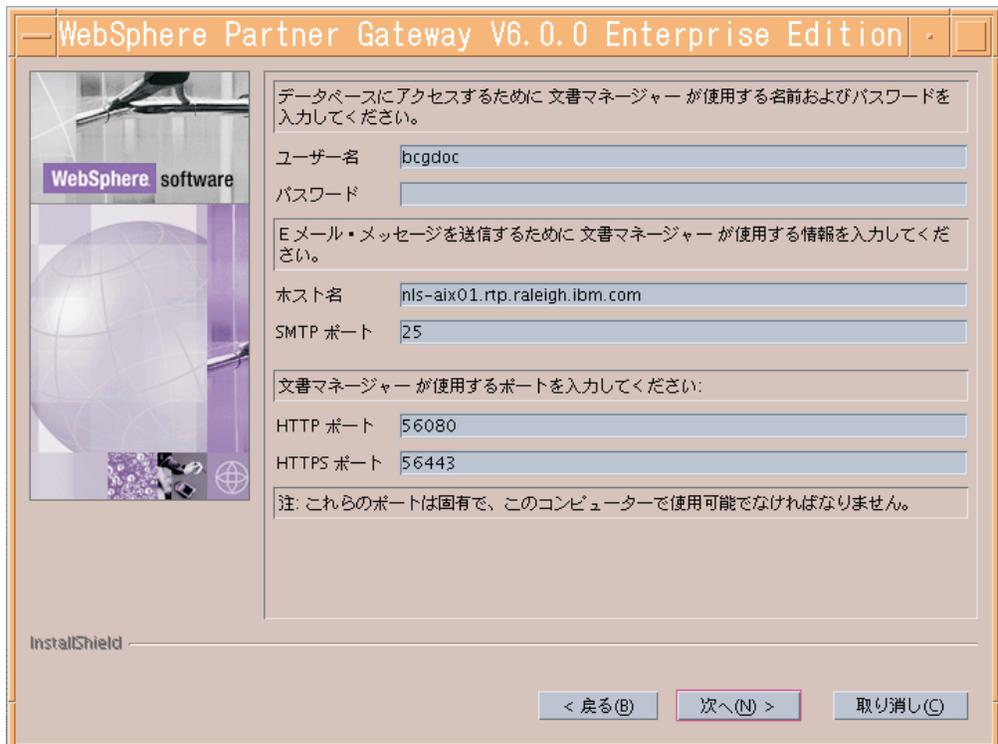


図 16. Document Manager の構成ウィンドウ

15. RosettaNet の構成ウィンドウ (図 17) で、RosettaNet メッセージの連絡先情報を入力します。正しい値がわからない場合は、必須のデフォルト値を使用します。この情報は、RosettaNet を使用する場合に必要であり、すべてのインストールで入力することをお勧めします。

「名前」フィールドで、RosettaNet の問題が発生した場合の連絡先担当者の名前を入力します。

「電話番号」および「FAX 番号」フィールドで、RosettaNet 連絡先の電話番号および FAX 番号を入力します。

「E メール・アドレス」フィールドには、RosettaNet 連絡先担当者の E メール・アドレスを入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

WebSphere Partner Gateway V6.0.0 Enterprise Edition

RosettaNet メッセージの連絡先情報を入力してください。

|            |                     |
|------------|---------------------|
| 名前         | unknown             |
| 電話番号       | unknown             |
| FAX 番号     | unknown             |
| E メール・アドレス | support@example.com |

InstallShield

< 戻る(B)    次へ(N) >    取り消し(C)

図 17. RosettaNet の構成ウィンドウ

16. アラート通知ウィンドウ (38 ページの図 18) で、WebSphere Partner Gateway を構成して、E メールでアラートを送信できるようにします。値が必要です。正しい値が不明の場合はデフォルト値を使用してください。

SMTP がこのコンピューター上で実行されていない場合は、「SMTP リレー」フィールドで、そのホスト名を入力します。

「送信元 E メール・アドレス」フィールドで、E メールを送信するときに WebSphere Partner Gateway が使用する E メール・アドレスを入力します。

「送信先 E メール・アドレス」フィールドで、アラート通知に対応するユーザーが、E メールを送信するとき使用する宛先の E メール・アドレスを入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

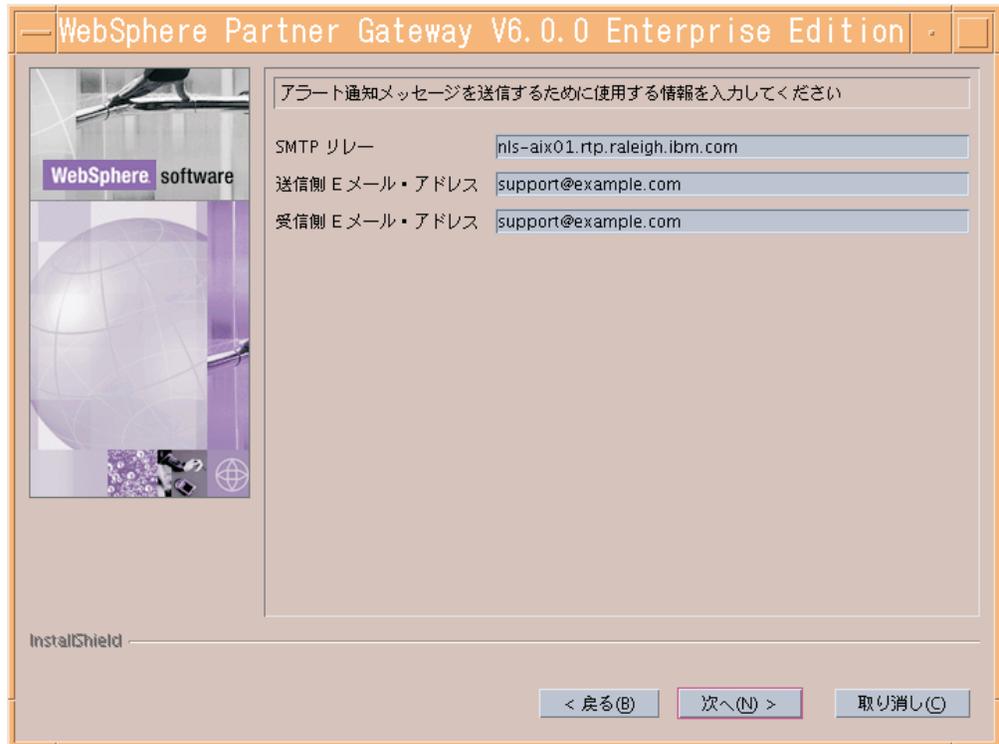


図 18. アラート通知ウィンドウ

17. 「要約」ウィンドウでは、インストールされるコンポーネントを示す情報を確認します。表示された情報のいずれかに誤りがある場合は、「戻る」をクリックして前のウィンドウに戻ります。「要約」ウィンドウの情報がすべて正しい場合は、「次へ」をクリックします。
18. WebSphere Partner Gateway インストーラーにより、選択されたコンポーネントがインストールおよび構成されます。このタスクが完了すると、インストーラーで「完了」ボタンが使用可能になります。「完了」をクリックします。

WebSphere Partner Gateway コンポーネントをインストールする各サーバー上で、この手順を繰り返します。共通コンテンツは、一度しかインストールする必要はありません。ファイル共有システムによって、すべてのコンピューターで使用可能になるためです。

すべての WebSphere Partner Gateway コンポーネントのインストールが完了したら、40 ページの『WebSphere Partner Gateway の開始』を参照してください。

---

## コマンド行によるコンポーネントのインストール

WebSphere Partner Gateway には、コマンド行を使用してコンポーネントをインストールする方法もあります。この機能では、すべてのインストール・オプションの値を提供するオプション・ファイルが必要です。提供されたサンプル ISS ファイルを変更して、カスタム・オプション・ファイルを作成できます。

Database Loader のサンプル・ファイルは、CD の Database Loader ディレクトリーか、アーカイブされていないインストール・イメージ内にあります。これに対して WebSphere Partner Gateway のサンプル・ファイルは、CD のハブ・ディレクトリーか、アーカイブされていないインストール・イメージ内にあります。

ファイルの各オプションは別の行に表示されています。また、それらの前には、設定を説明し、オプション例を示すコメントが付いています。サンプル・ファイルのオプション値は、GUI に示されるデフォルト値です。パスワードやホスト名などのいくつかの設定では、ローカル構成に関する情報が必要です。

コマンド行を使用して Database Loader または WebSphere Partner Gateway をインストールするには、以下のようにします。

1. root 管理者としてログインします。
2. コードをインストールするマシン上で、コマンド行を開きます。
3. インストール実行可能プログラムのロケーションに移動します。例えば、次のように入力します。

```
cd DBLoader
```

または

```
cd hub
```

4. ユーザーのオペレーティング・システムに固有の、下記コマンドを入力します。

Linux の場合は、次のように入力します。

```
./setupLinux -options <options file name>
```

AIX の場合は、次のように入力します。

```
./setupAIX -options <options file name>
```

Solaris の場合は、次のように入力します。

```
./setupSunOS -options <options file name>
```

<options file name> は、インストーラーが使用するオプション値を含むファイルを示します。

このコマンドを使用すると、インストーラーに標準の GUI インストールに表示されるすべてのウィンドウが表示され、それぞれのウィンドウのフィールドすべてには、オプション・ファイルにリストされている値が入力されています。

---

## サイレント・インストールの実行

Database Loader と WebSphere Partner Gateway は、サイレント・インストールというインストールにより、GUI やユーザー対話のいずれも使用せずに、インストールおよびアンインストールを実行できます。サイレント・インストールは、複数システムに同じ設定でコンポーネントをインストールする場合、ソフトウェア配布製品を使用する場合、またはグラフィカル環境が使用できない場合に、特に有効です。

Database Loader または WebSphere Partner Gateway のサイレント・インストールを行うには、以下のステップに従います。

1. root 管理者としてログインします。
2. コードをインストールするマシン上で、コマンド行を開きます。
3. インストール実行可能プログラムのロケーションに移動します。例えば、次のようになります。

```
cd DBLoader
```

または

```
cd hub
```

4. ユーザーのプラットフォームに固有の、下記コマンドを入力します。

Linux の場合は、次のように入力します。

```
./setupLinux -options "<options file name>" -silent
```

AIX の場合は、次のように入力します。

```
./setupAIX -options "<options file name>" -silent
```

Solaris の場合は、次のように入力します。

```
./setup -options "<options file name>" -silent
```

<options file name> は、インストーラーが使用するオプション値を含むファイルを示します。

インストーラーは、ユーザー対話または GUI なしに動作します。インストールが完了すると、インストーラーは、コマンド・プロンプトに戻ります。

---

## WebSphere Partner Gateway の開始

WebSphere Partner Gateway のインストールが完了したら、以下の手順に従って、それを開始できます。

WebSphere Partner Gateway を開始するには、以下のようになります。

1. 次のように入力して、一般の WebSphere Partner Gateway ユーザーに変更します。

```
su - bcguser
```

2. 次のようにして、スクリプト・ディレクトリーに移動します。

```
cd {INSTALL DIR}/bin
```

3. 次のコマンドを入力して、Community Console を開始します。

```
./bcgStartServer.sh bcgconsole
```

4. 次のコマンドを入力して、Receiver を開始します。  
`./bcgStartServer.sh bcgreceiver`
5. 次のコマンドを入力して Document Manager を開始します。  
`./bcgStartServer.sh bcgdocmgr`
6. ヘルプ・システムを開始します。42 ページの『ヘルプ・システムの開始』を参照してください。
7. Web ブラウザーを開いて以下の URL のいずれかを入力し、コンソールを表示します。

非セキュアの場合は、次のようにします。

`http://<hostname>.<domain>:58080/console`

セキュアの場合は、次のようにします。

`https://<hostname>.<domain>:58443/console`

<hostname> および <domain> は、Community Console コンポーネントをホスティングするコンピューターの名前およびロケーションです。

注:

- a. これらの URL では、デフォルトのポート番号が使用されていることを想定しています。デフォルトのポート番号を変更した場合は、デフォルト番号を指定した値で置き換えてください。
  - b. Community Console では、セッション情報を保守するために Cookie サポートをオンにする必要があります。Cookie に個人情報が保管されることはなく、ブラウザが閉じられると Cookie も有効期限切れになります。
8. Web ブラウザーにウェルカム・ページが表示されます。次の情報を使用して、WebSphere Partner Gateway にログインします。
    - 「**ユーザー名**」フィールドには次のように入力します。  
`hubadmin`
    - 「**パスワード**」フィールドには次のように入力します。  
`Pa55word`
    - 「**会社ログイン名**」フィールドで、次のように入力します。  
`Operator`
- 「**ログイン**」をクリックします。
9. 初回にログインする場合は、新規パスワードを作成する必要があります。新規パスワードを入力してから、「**検証**」フィールドにもう一度新規パスワードを入力します。
  10. 「**保管**」をクリックします。システムは、Community Console の初期入力ウィンドウを表示します。

これで、WebSphere Partner Gateway へのログインが完了しました。インストールをテストする方法については、42 ページの『インストール・システムのテスト』のセクションを参照してください。次の操作については、「*Getting Started*」ガイドも参照してください。

## ヘルプ・システムの開始

ヘルプ・システムが機能するには、ヘルプ・システム・サーバーが稼働している必要があります。デフォルトでは、ヘルプ・システムは Console と同じサーバーにインストールされています。ただし、Console のインストール時にヘルプ・システムに別のサーバーを指定することができます。

{INSTALL DIR}/console/lib/config/ に置かれている `bcg_console.properties` ファイルの `ibm.bcg.help.host` プロパティの値を調べることによって、ヘルプ・システムのロケーションを確認することができます。

ヘルプ・システムを開始するには、以下のようにします。

1. 次のように入力して、一般の WebSphere Partner Gateway ユーザーに変更します。

```
su - bcguser
```

2. 以下のスクリプトを実行します。

```
{INSTALL DIR}/bin/bcgStartHelp.sh
```

ヘルプ・システムを停止するには、以下のようにします。

1. 次のように入力して、一般の WebSphere Partner Gateway ユーザーに変更します。

```
su - bcguser
```

2. 以下のスクリプトを実行します。

```
{INSTALL DIR}/bin/bcgStopHelp.sh
```

---

## インストール・システムのテスト

次の手順に従って、WebSphere Partner Gateway の稼働中にインストール・システムをテストしてください。

1. ユーザーのログイン・イベントに基づいたアラートを作成し、アラートの連絡先としてユーザー自身を設定します。
  - a. 「アラート所有者」リストで、「ハブ・オペレーター (Hub Operator)」を選択します。
  - b. 「参加者」リストで、「ハブ・オペレーター (Hub Operator)」を選択します。
  - c. 「イベント・タイプ」リストで、「情報」を選択します。
  - d. 「イベント名」リストで、「102002 ユーザーが正常にログイン」を選択します。
2. ログアウトし、ハブ管理ユーザーとしてもう一度ログインします。
3. E メールでアラート・メッセージをチェックします。

WebSphere Partner Gateway のインストールで問題が発生した場合は、44 ページの『トラブルシューティング』を参照してください。

注: 文書フローをテストする場合は、「管理者ガイド」の『実動トラフィックのシミュレーション』の章を参照してください。

## WebSphere Partner Gateway のアンインストール

この手順を使用して、WebSphere Partner Gateway または Database Loader をアンインストールします。

**注:** オプション・ファイルを保管した後、コンポーネントを再度インストールする予定のある場合は、共通ディレクトリー・ツリーだけでなく、Console、Receiver、Document manager の各ディレクトリーもバックアップしてください。また、Database Loader アンインストーラーを使用する前に、データベースをバックアップする必要もあります。

1. 以下のディレクトリーにナビゲートします。

```
{INSTALL DIR}/bin
```

2. 次のコマンドを入力して、サーバーをシャットダウンします。

```
./bcgStopServer.sh bcgconsole
```

3. 次のコマンドを入力して、Receiver をシャットダウンします。

```
./bcgStopServer.sh bcgreceiver
```

4. 次のコマンドを入力して、ルーターをシャットダウンします。

```
./bcgStopServer.sh bcgdocmgr
```

5. 次のコマンドを入力して、ヘルプ・サーバーを停止します。

```
./bcgStopHelp.sh
```

6. `_unist` ディレクトリーで、次のコマンドを入力することにより、実行可能なアンインストーラーを実行します。

```
cd _unist
./uninstaller
```

アンインストーラー・ウィザードが始動し、「ようこそ」ウィンドウが表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

7. WebSphere Partner Gateway をアンインストールする場合は、コンポーネント選択ウィンドウでこのシステムから取り外すコンポーネントを選択します。複数のコンポーネントを選択できます。

**注:** WebSphere Partner Gateway は、各コンポーネントの 1 つ以上のインスタンスを必要とします。コンポーネントの唯一のインスタンスを除去する場合は、別のシステムにコンポーネントをインストールすることが必要になります。例えば、ネットワークを構成する Document Manager の唯一のインスタンスを削除する場合は、別のシステムに Document Manager をインストールし、同じデータベースとキュー・マネージャーを使用するように構成する必要があります。

「次へ」をクリックして先へ進みます。アンインストーラーの画面に「要約」ウィンドウが表示されます。

8. 「要約」ウィンドウには、アンインストーラーによって除去されるコンポーネントがリストされます。この情報を確認します。表示された情報のいずれかに誤りがある場合は、「戻る」をクリックして前のウィンドウに戻り、誤りを訂正します。「要約」ウィンドウの情報がすべて正しい場合は、「次へ」をクリックします。

注: アンインストーラーは、インストール時に作成されたファイルのみ除去します。インストール後に作成されたファイルやフォルダーは一切除去しません。アンインストールの完了後に残りのファイルまたはフォルダーを手動で除去します。

9. アンインストーラーにより、選択されたコンポーネントが除去されます。すべてのコンポーネントが除去されると、アンインストーラーの「完了」ボタンが使用可能になります。「完了」をクリックします。
10. ディレクトリー構造に残っているファイルを確認してからディレクトリー・ツリーを除去します。
11. データベースをアンインストールするには、bcgdbloader/\_uninst ディレクトリーにあるアンインストール実行可能ファイルを実行します。

---

## トラブルシューティング

以下の手順では、WebSphere Partner Gateway のインストールで発生する問題をトラブルシューティングする方法を説明しています。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『Database Loader のエラーの特定』
- 45 ページの『誤ったバージョンの検出問題からの回復』

### Database Loader のエラーの特定

Database Loader のインストール中に問題が発生した場合は、system temp/bcgdbloader/logs ディレクトリーの Database Loader ログで問題に関する情報を参照してください。問題が解決したら、次の手順を実行し、作成されたデータベースを削除します。

1. Database Loader アンインストーラーを実行して、データベースを除去します。
2. データベースの削除が完了したら、Database Loader ウィザードを再実行します。

WebSphere Partner Gateway コンポーネントのインストール中に問題が発生する場合は、以下のコンポーネント・インストール・ログを検討してください。

{INSTALL DIR}/logs/bcgconsole

{INSTALL DIR}/logs/bcgreceiver

{INSTALL DIR}/logs/bcgdocmgr

以下のランタイム・ログも調べる必要があります。

#### 組み込みの WebSphere Application Server

{INSTALL DIR}was/profiles/bcgconsole/logs

{INSTALL DIR}was/profiles/bcgreceiver/logs

{INSTALL DIR}was/profiles/bcgdocmgr/logs

## WebSphere Application Server v6.0

{INSTALL DIR}\profiles\bcgconsole/logs

{INSTALL DIR}\profiles\bcgreceiver/logs

{INSTALL DIR}\profiles\bcgdocmgr/logs

## 誤ったバージョンの検出問題からの回復

InstallShield ウィザードは、vpd.properties という名前のファイルに製品データを保管します。同等の情報は、該当すればオペレーティング・システムのソフトウェア・レジストリーにも保管されます。例えば、Linux の RPM、AIX の lslpp、および Solaris の pkginfo が該当します。

保管される情報には、固有 ID キー (UID)、バージョンとリリース情報、各製品およびコンポーネントのインストール・ディレクトリーが含まれます。これら 3 種類の情報は、それぞれのエントリーの固有論理キーとなります。

vpd.properties ファイル、オペレーティング・システムのソフトウェア・レジストリー、またはその両方に保管される情報は、すでにインストール済みの状態を解決するためなどに使用されます。vpd.properties ファイル、ネイティブ・オペレーティング・システムのソフトウェア・レジストリー、またはその両方にある情報は、不正確になることがあり、システムの状態を表していない場合が時折生じます。この状態は、2 つ以上のインストール・ウィザードまたはアンインストール・ウィザードが同時に実行されているときに発生する可能性があります。この情報を破壊するシナリオは、他にもたくさん考えられます。

vpd.properties ファイルの場所は、作動プラットフォームによって異なります。

- AIX プラットフォーム: ルート・ディレクトリーまたは usr/lib/objrepos ディレクトリー
- Linux プラットフォーム: /root ディレクトリー
- Windows プラットフォーム: オペレーティング・システムのインストール・ディレクトリー (C:\WINNT ディレクトリーや C:\windows ディレクトリーなど)

次に、すでにインストールされていない製品またはコンポーネントのデータを手動で除去するプロセスについて説明します。プロセスは、それぞれのオペレーティング・システムで同じです。

1. 処理を開始する前に、vpd.properties のバックアップ・コピーを作成します。  
InstallShield MultiPlatform ウィザードまたは InstallShield Universal Install ウィザードを使用するすべての製品が vpd.properties を更新します。vpd.properties の内容を破壊すると、将来行うアップグレード、保守インストール、またはアンインストールで障害が起きる可能性があります。
2. 任意のエディターを使用して vpd.properties を開きます。可能な場合は、行の折り返しをオフにするか、行を折り返さないエディターを使用します。
3. vpd.properties の各行は、製品または製品コンポーネントを表します。行の最初の項目は、固有 ID (UID) です。行 (「レコード」) の各フィールドは、垂直バー (|) によって区切られています。およそ次の 4 つのフィールドは、バージョン、

リリース、修正、および更新のフィールドです。行内を目視でチェックし、インストール・ロケーションのパスを見つけます。

4. 上のステップ 3 で説明されている情報を使用して、すでにインストールされていない製品/コンポーネントを指すすべてのエントリーを手動で確認します。
  - WBI Connect v4.2.2 およびそれ以前の場合は、「wbic」(大/小文字を区別しない) で検出されるファイルを検索します。「wbic」は、それらのバージョンの一般的な省略形で、デフォルトのインストール・ロケーション・ディレクトリ名の一部に使用されています。
  - WebSphere Partner Gateway V6.0 以降の場合は、「bcg」(大/小文字を区別しない) で検出されるファイルを検索します。
  - すでにインストールされていない製品またはコンポーネントを表すそれぞれの行全体を削除します。
5. vpd.properties ファイルを保管して閉じます。

## AIX

1. 上の説明に従って vpd.properties をクリーンアップします。
2. smit または lslpp を使用して、すでにインストールされていないエントリーを検索します。例えば、コマンド行から次のコマンドを使用して、WebSphere Business Integration Connect v4.2.2 およびそれ以前のすべてのエントリーを検出します。戻される名前をメモします。

```
lslpp -l | grep -i wbic
```
3. geninstall -u コマンドを使用して、ステップ 2 で戻された各パッケージ名を削除します。
4. geninstall -u コマンドが正常に実行されない場合は、オブジェクト・データ・マネージャー (ODM) を手動でクリーニングする方法について、AIX サポートにお問い合わせください。

## Linux

1. 上の説明に従って、vpd.properties をクリーンアップします。
2. 任意のツールを使用して、すでにインストールされていないエントリーの rpm を検索します。例えば、コマンド行から次のコマンドを使用して、WebSphere Business Integration Connect v4.2.2 およびそれ以前のすべてのエントリーを検出します。戻されるパッケージ名をメモします。

```
rpm -qa |grep -i wbic
```
3. 任意のツールを使用して、ステップ 2 で戻された各パッケージ名を削除し、rpm から削除します。例えば、コマンド行から rpm -e コマンドを使用します。
4. リストに削除しようとするパッケージが含まれており、他のパッケージが含まれていない場合は、次のコマンドを使用してパッケージすべてを削除します。

```
rpm -qa | grep -i wbic | xargs rpm -e
```

## Solaris

1. 上の説明に従って、vpd.properties をクリーンアップします。

2. `pkginfo` コマンドを使用して、すでにインストールされていないエントリーを検索します。例えば、コマンド行から次のコマンドを使用して、**WebSphere Business Integration Connect v4.2.2** およびそれ以前のすべてのエントリーを検出します。戻される名前をメモします。

```
pkginfo | grep -i wbic
```

3. `geninstall -u` コマンドを使用して、ステップ 2 で戻された各パッケージ名を削除します。

- a. パッケージ情報が登録されているディレクトリーに変更します。

```
cd /var/sadm/pkg
```

- b. 除去するそれぞれのパッケージ名で、`pkgrm -n` コマンドを実行します。例えば、次のようになります。

```
ls |grep -i wbic | xargs -i pkgrm -n {}
```

- c. `pkgrm -n` コマンドを実行しようとして問題が発生した場合は、関連するパッケージのディレクトリーを除去してから、`pkgrm -n` コマンドを再実行してください。例えば、次のようになります。

```
- rm -rf /var/sadm/pkg/WBICpackageName1/
```

## Windows

1. 上の説明に従って、`vpd.properties` をクリーンアップします。
2. 予防措置として、**Windows Resource Kit** から `regback.exe` プログラムを使用して **Windows Registry** をバックアップしておきます。
3. `regedit.exe` を使用して、すでにインストールされていないバージョンのキーを検索し、除去します。
  - a. `HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\IBM`
  - b. `HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Uninstall\`



---

## 第 3 章 Windows での WebSphere Partner Gateway のインストール

以下の手順では、Windows システム上で、WebSphere Partner Gateway のインストールとアンインストール、アップグレード、始動、テスト、およびトラブルシューティングを行う方法を説明します。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『インストールの概要』
- 『インストール済み前提条件の検証および構成』
- 55 ページの『WebSphere Partner Gateway のインストール』
- 75 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』
- 76 ページの『サイレント・インストールの実行』
- 76 ページの『WebSphere Partner Gateway の開始』
- 78 ページの『インストール・システムのテスト』
- 78 ページの『WebSphere Partner Gateway のアンインストール』
- 80 ページの『トラブルシューティング』

---

### インストールの概要

このセクションでは、WebSphere Partner Gateway のインストール・プロセスのハイレベルな概要について説明します。

この章では、以下の作業を詳細に説明します。

1. システムが、最低限のハードウェアおよびソフトウェアのインストール前提条件を満たしていることを確認します。
2. WebSphere Partner Gateway のデータベース表を作成して構成します。
3. WebSphere Partner Gateway ソフトウェアをインストールします。

---

### インストール済み前提条件の検証および構成

WebSphere Partner Gateway をインストールする前に、必要な前提条件がすべて整っていることを確認してください。このセクションのトピックでは、システムのハードウェアおよびソフトウェア要件、サポートされるデータベース、WebSphere Partner Gateway ソフトウェアの実行に必要なユーザー・アカウントの概要を説明します。

インストールの準備に活用できるように、このセクションの最後にプリインストール・チェックリスト (54 ページの表 11) が用意されています。プリインストール・チェックリストは、WebSphere Partner Gateway のインストール前に実行しておく必要のある作業をリストしています。このチェックリストは、インストール・システムに対して以下を計画している場合にも使用できます。

- 例えば、データベースのインスタンス名や表スペースの情報など、必要なインストール情報を記録します。
- WebSphere MQ サーバーのホスト名や、Community Console、Receiver、および Document Manager 用のポート番号などの必要なインストール情報を記録します。

このセクションでは、以下のトピックについて説明します。

- 『ユーザー・アカウントの追加』
- 51 ページの『WebSphere MQ の構成』
- 52 ページの『DB2 のインストールおよび構成』
- 53 ページの『Oracle のインストールおよび構成』
- 53 ページの『プリインストールのチェックリスト』

## ユーザー・アカウントの追加

データベースと接続する場合、WebSphere Partner Gateway には一組のオペレーティング・システムのユーザーが必要です。次の手順を実行し、オペレーティング・システムのユーザーをセットアップします。この手順ではデフォルト名を使用していますが、実際に使用するユーザー名やグループ名に置き換えることができます。グループ名とユーザー名は、8 文字以内にします。

**注:** 1 ユーザーのみを設定する場合は、グループを作成する必要はありません。

ユーザー・アカウントを作成するには、以下のようになります。

1. 「スタート」 > 「設定」 > 「コントロール パネル」をクリックし、「管理ツール」 > 「コンピューターの管理」 > 「ローカル ユーザーとグループ」をダブルクリックします。

「ローカル ユーザーとグループ」ダイアログ・ボックスが表示されます。「ユーザー」を右マウス・ボタンでクリックして「新しいユーザー」を選択します。

「新しいユーザー」ダイアログ・ボックスが表示されます。次のユーザーを追加します。bcguser、bcgcon、bcgdoc、および bcgrecev。さらに、「パスワードを無期限にする」オプションを選択します。

**注:** Oracle ユーザーの場合は、bcguser ユーザーを作成することのみが必要です。

2. Business Integration は、このグループのユーザーを使用して WebSphere Partner Gateway のコンポーネントを管理します。
3. 「ローカル ユーザーとグループ」ダイアログ・ボックスで「グループ」を右マウス・ボタンでクリックし、「新しいグループ」を選択します。
4. 「新しいグループ」ダイアログ・ボックスが表示されます。bcggroup グループを追加します。
5. 次のユーザーを bcggroup に追加します。bcguser、bcgcon、bcgdoc、および bcgrecev。

**注:** Oracle ユーザーの場合は、bcguser ユーザーを bcggroup に追加することのみが必要です。

6. 「コンピューターの管理」ウィンドウを終了します。
7. ユーザー名とパスワードを 53 ページの『プリインストールのチェックリスト』の表に記録します。

## WebSphere MQ の構成

以下の手順では、インストール後に WebSphere MQ を構成する方法について説明します。適用する必要がある SupportPac およびアップデートのリストについては、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』を参照してください。この手順で使用する特定のコマンドについては、WebSphere MQ の資料を参照してください。

**注:** デフォルトのキュー・マネージャー名は `bcg.queue.manager`、デフォルトのリッスナー・ポートは `9999` です。これらのデフォルト値を変更する場合は、それらの値が使用されているすべての場所で確実に変更する必要があります。

WebSphere MQ を構成するには、以下のようにします。

1. 管理者または管理者グループのメンバーであるユーザーとして、オペレーティング・システムにログインしていることを確認します。
2. 次のように入力して、キュー・マネージャーを作成します。

```
crtmqm -q bcg.queue.manager
```

IBM では、以下のデフォルト・ログ・パラメーターを変更して、プロセス・トランザクションのロールバック・エラーが発生する可能性をなくすようお勧めします。これらの属性について詳しくは、WebSphere MQ の資料を参照してください。これらの属性は、MQ Services にあるキュー・マネージャーの「プロパティ」ウィンドウの「ログ」タブで表示することができます。

- `LogPrimaryFiles=62`
- `LogSecondaryFiles=2`
- `LogFilePages=2048`
- `LogBufferPages=128`

3. 以下の手順でチャンネル・パラメーターをアップデートします。
  - a. MQServices で、キュー・マネージャーを右マウス・ボタンでクリックし、「プロパティ」を選択して、「チャンネル」タブを選択します。
  - b. 次の値を使用してチャンネルのプロパティをアップデートします。

```
MaxChannels=1000
```

```
MaxActiveChannels=1000
```

4. コンピューターに複数の CPU が存在する場合は、次のコマンドを入力します。

```
setmqcap <number of CPUs>
```

5. 次のコマンドでキュー・マネージャーを開始します。

```
strmqm bcg.queue.manager
```

6. 次のコマンドでリッスナーを開始します。

```
runmqtsr -t tcp -p 9999 -m bcg.queue.manager
```

7. リッスナーはこのウィンドウで実行されるので、開いたままにしておきます。

8. 新しいウィンドウを開き、次のコマンドを使用して JMS Broker (パブリッシュおよびサブスクライブ・ブローカー) を始動します。

```
strmqbrk -m bcg.queue.manager
```

9. 次のコマンドで MQ コマンド・サービスを開始します。

```
strmqcsv bcg.queue.manager
```

10. Tools¥MQSeries¥BCGCreate\_Queues.mqsc ファイルを使用して、キュー・マネージャーのキューおよびチャネルを定義します。

```
runmqsc bcg.queue.manager <
<CD image>¥Tools¥MQSeries¥BCGCreate_Queues.mqsc
```

<CD image> は、WebSphere Partner Gateway CD のロケーション、またはアーカイブされていない WebSphere Partner Gateway のインストール・ファイルのロケーションです。

11. MQHomeInstallDir¥Java¥bin¥MQJMS\_PSQ.mqsc ファイルを使用して、JMS のパブリッシュ・キューとサブスクライブ・キューを構成します。

```
runmqsc bcg.queue.manager <
MQHomeInstallDir¥mqm¥Java¥bin¥MQJMS_PSQ.mqsc
```

12. MQ ホスト名、キュー・マネージャー名、およびリスナー・ポートを 53 ページの『プリインストールのチェックリスト』に記録します。

## DB2 のインストールおよび構成

実稼働環境で最高のパフォーマンスを引き出すには、WebSphere Partner Gateway データベースを専用サーバー上に置いてください。

データベースは、DB2 UDB がマルチプロセッサ・マシン上で稼働していることを前提にして構成されます。特に、DFT\_DEGREE パラメーターは 4 に設定されます。これは、SQL 照会が並列動作の 4 個のサブプロセスとして実行されることを示します。DB2 UDB がシングル・プロセッサ・マシンで稼働している場合はこれが最適の構成ではなく、システム・メモリーと CPU の間で競合が発生する可能性があります。お客様のデータベース管理担当者と共にデータベースの構成を検討し、必要であれば変更を加えて個別のデータベース環境に適合させる必要があります。

**注:** WebSphere Partner Gateway では分離ユーザー・オプションを使用しません。

WebSphere Partner Gateway のインストールのときに、分離ユーザー ID を使用しないでください。

以下の手順に従って DB2 のインストールと構成を行います。

1. 提供されるインストールの指示に従い、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 をインストールします。ウィザードで、次の手順を実行します。

**注:** 既存のインストールを使用することもできます。

- インストール・タイプを選択するウィンドウで、「**カスタム**」インストールを選択します。次のウィンドウで、「**Application Development Toolkit**」をデフォルトの選択に追加します。
- 以後のウィンドウでは、デフォルト値を使用するか、ユーザー独自の値を使用します。インスタンス名、インスタンス所有者ユーザー ID、およびパスワードを調べ、このセクションの後半にある **Database Loader** インストール・ウ

ィザードで必要とされる情報の表に記録します。これらのオプションの情報については、DB2 のインストール・ガイドを参照してください。

2. DB2 が稼働していない場合は、次のコマンドを入力して始動させます。

```
db2start
```

ユーザー名とパスワードを 53 ページの『プリインストールのチェックリスト』に記録します。

## Oracle のインストールおよび構成

本書には Oracle のインストール手順の説明はありません。インストール手順については、適切な Oracle の資料を参照してください。

WebSphere Partner Gateway は Unicode アプリケーションです。ご使用のデータベースのデータベース文字セットおよび国別文字セットが Unicode に設定されていることを確認してください。

IBM は、お客様が Oracle データベースをインストールする際には、次の指針に従うようお勧めします。

1. Oracle インストール資料の説明に従って、Oracle システム環境変数 (ORACLE\_HOME、ORACLE\_SID、ORACLE\_BASE など) をエクスポートします。この操作は、WebSphere Partner Gateway のインストール・プロセス中に Database Loader が SQL を自動的に実行する場合に、管理者ユーザーが実行する必要があります。
2. ハブ・コンポーネントを実行するそれぞれのマシンで、Oracle JDBC ドライバーを使用可能にする必要があります。JDBC ドライバーは、インストール済みの Oracle バージョンと同じレベルでなければなりません。

次のセクションのプリインストールのチェックリストで、名前とパスワードを記録します。変更された場合は特に、デフォルト値も記録します。

## プリインストールのチェックリスト

以下の作業は、WebSphere Partner Gateway のインストール前に実行しておく必要があります。

**注:** 以下の作業は、単一マシンに対するインストールを前提にしています。

1. オペレーティング・システムに、bcggroup ユーザー・グループが存在することを確認します。bcguser ユーザーが存在することと、このユーザーが bcggroup のメンバーであることも確認します。DB2 を使用している場合は、オペレーティング・システムのユーザー bcgcon、bcgdoc、および bcgrevc が、bcggroup のメンバーとしてすべて存在する必要があります。Oracle を使用する場合は、オペレーティング・システム・ユーザー bcgcon、bcgdoc、および bcgrevc は不要です。
2. DB2 または Oracle をサーバーにインストールし、構成します。
3. WebSphere MQ をサーバーにインストールし、構成します。
4. SMTP サーバーが存在します。(これはオプション)

5. 複数のコンピューターが使用されている場合は、各コンピューターでネットワーク・ファイルの共有を作成する必要があります。これにより、コンピューターすべてが、ネットワーク全体の共有ファイルにアクセスして共用できます。

表 11 に、Database Loader および WebSphere Partner Gateway インストール・ウィザードを開始する前に用意しておく必要のある情報を示します。インストール・ウィザードを実行するときに、この表を参照してください。

表 11. 必須情報のチェックリスト

| 必須情報                                  | 値                                                                  |
|---------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|
| WebSphere Partner Gateway のユーザー名      | (デフォルトは bcguser)                                                   |
| WebSphere Partner Gateway のユーザー・パスワード |                                                                    |
| WebSphere Partner Gateway のグループ名      | (デフォルトは bcgroup)                                                   |
| Community Console のユーザー名              | (デフォルトは bcgcon)                                                    |
| Community Console のユーザー・パスワード         |                                                                    |
| Community Console のポート番号              | (HTTP - デフォルトは 58080)<br>(HTTPS - デフォルトは 58443)                    |
| Document Manager のユーザー名               | (デフォルトは bcgdoc)                                                    |
| ヘルプ・システム                              | (デフォルトは 58888)                                                     |
| Document Manager のユーザー・パスワード          |                                                                    |
| Document Manager のポート番号               | (HTTP - デフォルトは 56080)<br>(HTTPS - デフォルトは 56443)                    |
| Receiver のユーザー名                       | (デフォルトは bcgrecev)                                                  |
| Receiver のユーザー・パスワード                  |                                                                    |
| Receiver のポート番号                       | (HTTP - デフォルトは 57080)<br>(HTTPS - デフォルトは 57443)                    |
| WebSphere MQ ホスト名                     |                                                                    |
| WebSphere MQ キュー・マネージャー               | (デフォルトは bcg.queue.manager)                                         |
| リスナー用の WebSphere MQ ポート               | 9999                                                               |
| 共用ロケーションのマウント・ポイント                    |                                                                    |
| データベース・ホスト名                           |                                                                    |
| データベース・ポート                            | デフォルトのインスタンスを使用している場合、DB2=50000 はデフォルトです。<br>Oracle=1521 はデフォルトです。 |
| データベース所有者 (DB2)                       |                                                                    |
| 所有者のパスワード (DB2)                       |                                                                    |
| データベース名 (DB2)                         |                                                                    |
| インスタンス名 (DB2)                         |                                                                    |

表 11. 必須情報のチェックリスト (続き)

| 必須情報                  | 値           |
|-----------------------|-------------|
| 管理者ログイン ID (Oracle)   |             |
| 管理者パスワード (Oracle)     |             |
| Oracle SID (Oracle)   |             |
| スキーマ所有者ログイン (Oracle)  |             |
| スキーマ所有者パスワード (Oracle) |             |
| SMTP ホスト名             |             |
| SMTP ポート番号            | (デフォルトは 25) |

## WebSphere Partner Gateway のインストール

前のセクションで記述された前提条件をすべて満たしていると、Database Loader および WebSphere Partner Gateway の各インストール・ウィザードを実行することができます。

### LaunchPad

WebSphere Partner Gateway には、製品概要、README ファイル、製品資料、Database Loader、および WebSphere Partner Gateway Installer にワンストップでアクセスできるランチパッド・プログラムが用意されています。別の方法として、提供されている setup\*. \* プログラムを使用して、データベース・ローダーおよびインストール・プログラムを始動することもできます。『データベースの作成』 および 61 ページの『インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール』を参照してください。

注: ランチパッドのオプションの中には、ブラウザがインストールされ、システム・パスで使用可能になっていることを必要とするものがあります。

ランチパッド実行可能ファイルは、以下のディレクトリーに配置されています。

{CD\_ROM/MEDIA DIR}/LaunchPad.\*

### データベースの作成

WebSphere Partner Gateway には、データベース表をセットアップするインストール・ウィザードが含まれています。Database Loader ウィザードは、情報を収集して、表を作成し、表にデータを取り込んでくれます。あるいは、表の作成時に使用する SQL ファイルを保管できます。この SQL ファイルを使用することにより、手動で表を作成してデータを取り込むことができます。SQL ファイルを手動で実行することにより、データを取り込む前にデータベース表を検討できます。

始める前に、ご使用のデータベース・サーバーがインストールされ、正しく構成され、稼働しているかどうかを検証します。

以下の手順では、Database Loader GUI を使用してデータベースを構成する方法について説明します。GUI を使用せずに Database Loader をインストールすることもできます。

注: データベース・サーバーとして DB2 を使用することを計画している場合は、DB2ADMIN Windows ユーザーとして SQL を (手動または自動で) 実行する必要があります。

データベース表をセットアップするには、以下のようにします。

1. データベースとして DB2 を使用している場合は、DB2ADMIN としてログインします。
2. WebSphere Partner Gateway システム・プロダクト CD にある Database Loader CD-MediaDir¥DBLoader¥setup.exe ファイルを実行します。

Database Loader ウィザードが始動し、「ようこそ」ウィンドウが表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

3. 「ソフトウェア・ライセンス契約 (Software License Agreement)」ウィンドウで、ソフトウェア・ライセンス契約を読みます。契約条件に同意する場合は、「**ライセンス契約の条件に同意します。(I accept the terms of the license agreement)**」を選択します。「次へ」をクリックして先へ進みます。
4. 「ディレクトリー名」ウィンドウで、データベースをセットアップするときに Database Loader が使用するディレクトリーのパスおよびディレクトリー名を入力します。IBM では、新規のディレクトリー・ロケーションを作成するか、または空のディレクトリーを選択することをお勧めします。

データベースおよびデータベースに格納されるすべてのアプリケーション・データのために十分なスペースがあるロケーションを選択します。

注: ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「**ファイル名を入力 (Enter file name)**」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「**ディレクトリーを選択 (Select a directory)**」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

5. データベース・タイプの選択ウィンドウで、WebSphere Partner Gateway に使用するデータベース・サーバーを選択します。DB2 8.2 または Oracle 9i 9.2.0.4 以降を選択できます。「次へ」をクリックして先へ進みます。
6. データベース情報ウィンドウで、次のデータベース情報を入力し、入力を終わったら「次へ」をクリックします。

## DB2

DB2 を選択した場合は、DB2 データベース情報ウィンドウが表示されます。以下の DB2 データベース情報を入力します。

- データベース名
- インスタンス名
- グループ名
- 所有者名
- 所有者のパスワード

注: これらの値のいずれかを変更した場合、SQL ファイルを実行する前に、それらの値がなければなりません。それらの値がない場合は、それらを手動で作成する必要があります。

## Oracle

- a. Oracle を選択すると、Oracle データベース情報ウィンドウが表示されます。以下の Oracle データベース情報を入力します。
  - 管理者ログイン ID
  - 管理者パスワード
  - Oracle SID
  - スキーマ所有者ログイン
  - スキーマ所有者パスワード
- b. Oracle ホーム・ロケーション・ウィンドウが表示されます。Oracle ホーム・ディレクトリー・ロケーションを入力するか、「参照」をクリックして入力します。(図 19)

注: これらの値のいずれかを変更した場合、SQL ファイルを実行する前に、それらの値がなければなりません。それらの値がない場合は、それらを手動で作成する必要があります。



図 19. Oracle ホーム・ディレクトリー・ロケーション・ウィンドウ

7. データベース・ロケーション・ウィンドウで、データベースとすべてのアプリケーション・データを保持するのに十分なスペースのあるファイル・システム・ロケーションを選択します。データベースのサイズは、WebSphere Partner Gateway の稼働中に大きくなります。

## DB2

RDBMS サーバー上のデータベースおよびデータベースの各表スペースのロケーションを入力します。フィールドには絶対パスが入力されている必要があります。「次へ」をクリックして先へ進みます。22 ページの図 2 を参照してください。

注: ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

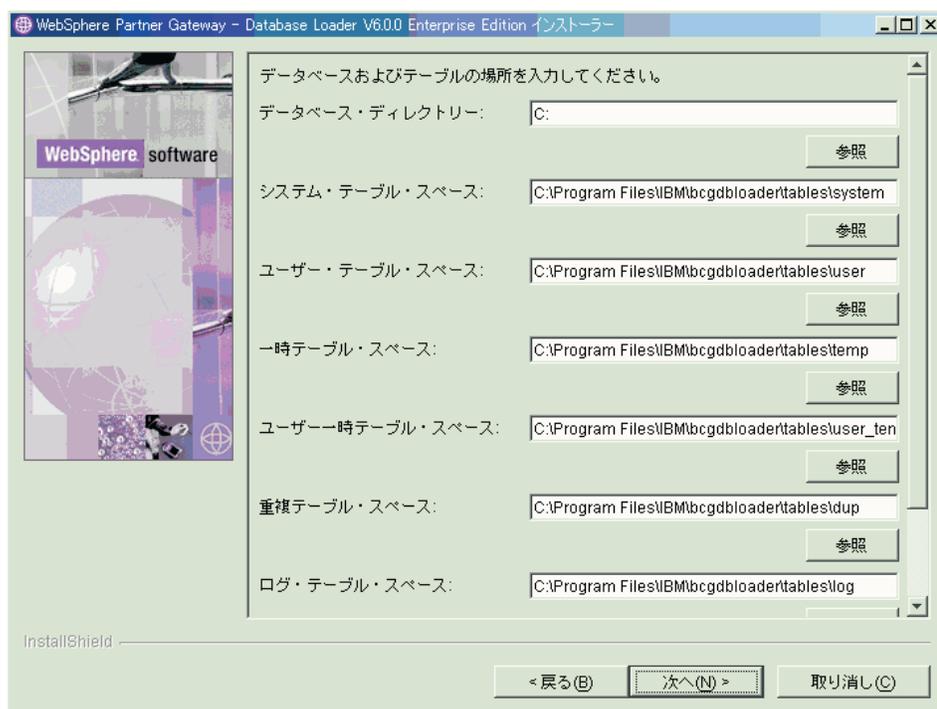


図 20. DB2 のデータベース・ロケーション・ウィンドウ

## Oracle

RDBMS サーバー上のデータベースおよびデータベースの各表スペースのロケーションを入力します。フィールドには絶対パスが入力されている必要があります。「次へ」をクリックして先へ進みます。59 ページの図 21 を参照してください。

注: ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

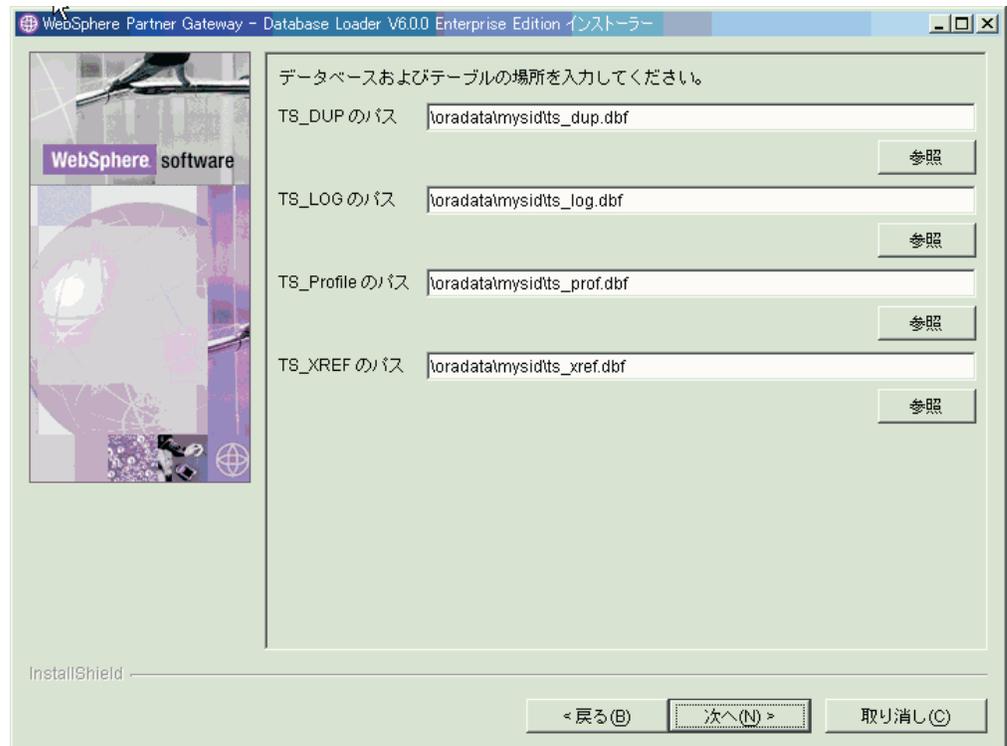


図 21. Oracle のデータベース・ロケーション・ウィンドウ

8. コンポーネントの構成ウィンドウ (60 ページの図 22) で、WebSphere Partner Gateway コンポーネントのログイン情報、および共通の共用ファイルのロケーションを入力します。

Community Console、Document Manager、および Receiver の「ユーザー名」と「パスワード」の各フィールドで、各コンポーネントについて、ユーザーの名前とパスワードを入力します。DB2 を使用している場合、これらのユーザーは、サーバーを構成したときに作成されました。

「グループ名」フィールドには、WebSphere Partner Gateway ユーザーを含むグループの名前を入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

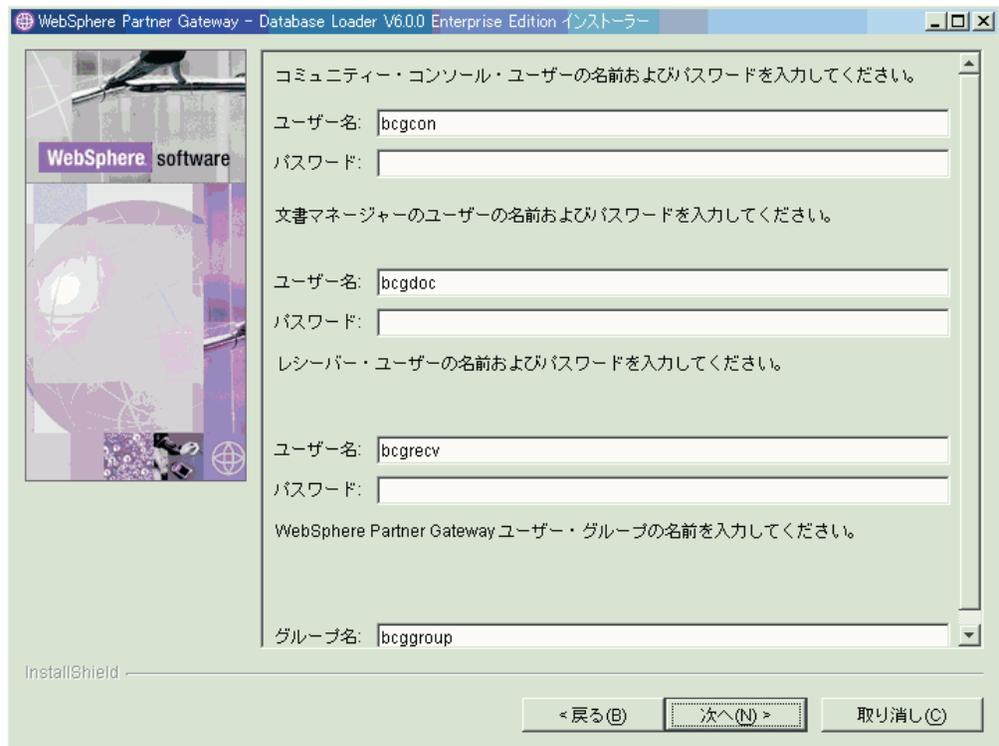


図 22. コンポーネントの構成ウィンドウ

9. システムが、共有情報ウィンドウのマウント・ポイントを表示します。  
WebSphere Partner Gateway の主要コンポーネントが使用する共通の共有ファイルのロケーションを入力します。「次へ」をクリックして先へ進みます。

**注:**

- a. 複数のマシンに WebSphere Partner Gateway をインストールする場合は、すべてのマシンの共用 common フォルダで、同じマウント・ポイントとディレクトリー構造を使用する必要があります。
  - b. ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。
10. ウィザードが表示するウィンドウ (61 ページの図 23) で、ユーザーは、Database Loader が SQL ファイルを作成するのみか、または作成した後、自動的に実行するかどうかを選択することができます。

Database Loader が SQL ファイルを実行する場合は、以下の動作を行います。

- 表スペースの作成
- スキーマの作成
- 表、ビュー、シーケンス、プロシージャ、および関数を作成し、それらにメタデータを取り込む
- 表への許可の割り当て
- ストアード・プロシージャの作成

Database Loader はルーチンの一部として DB2 インスタンスを再始動します。このため、WebSphere Partner Gateway データベースをセットアップする DB2 インスタンスを使用しているすべてのアプリケーションを切断する必要があります。

ユーザーに代わって Database Loader にファイルを実行させる場合は、「SQL ファイルの実行」チェック・ボックスを選択します。「次へ」をクリックして先へ進みます。

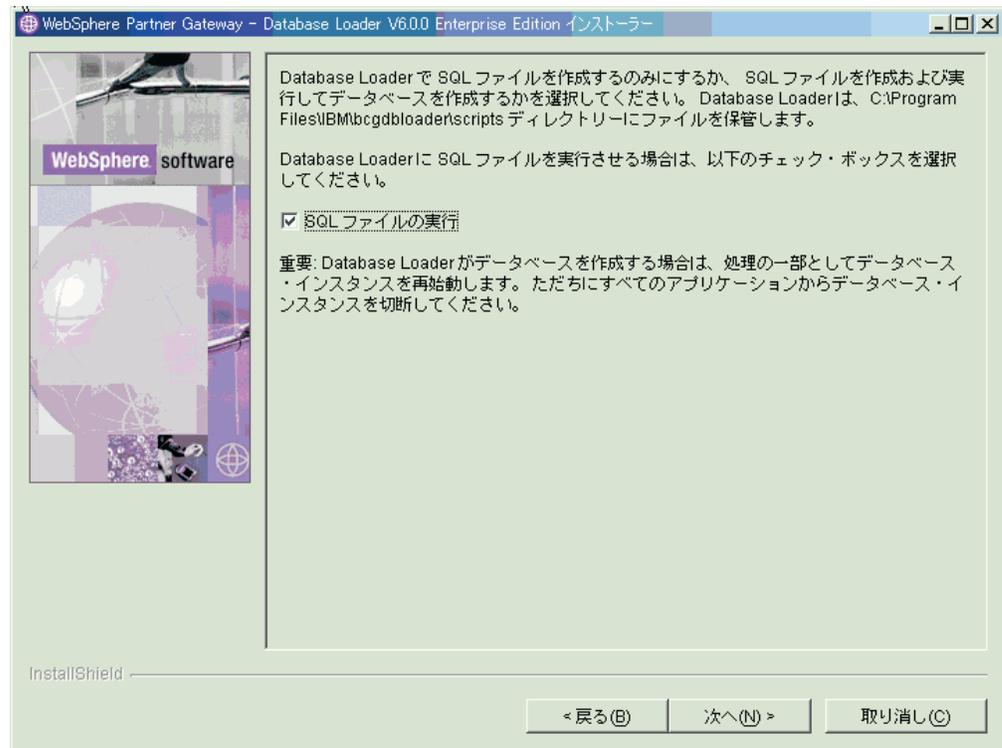


図 23. SQL ファイルの実行ウィンドウ

11. Database Loader のインストール・ロケーションを確認します。「次へ」をクリックして先へ進みます。
12. 「完了」ボタンが使用可能になったら、このボタンをクリックします。
13. SQL を手動で実行する場合の詳細については、bcgdbloader/scripts サブディレクトリ (Database Loader によってインストールされる) にある Instructions.txt ファイルを参照してください。

WebSphere Partner Gateway データベースのセットアップが完了すると、WebSphere Partner Gateway のコンポーネントをインストールすることができます。

## インストール・ウィザードによるコンポーネントのインストール

WebSphere Partner Gateway には、Community Console、Receiver、および Document Manager の 3 つの主要なコンポーネントがあります。3 つのコンポーネントはすべて、共通のコンテンツを共有します。コンポーネントおよび共通のコンテンツを単一のサーバーにインストールするか、各コンポーネントを別々のサーバーにインス

インストールすることができます。最低でも 1 つのサーバーに、各コンポーネントの 1 つのインスタンスをインストールする必要があります。さまざまなコンポーネントを別々のサーバーに配置する計画の立て方については、4 ページの『環境の計画』および 8 ページの『接続形態』を参照してください。

**注:** 複数のマシンに WebSphere Partner Gateway をインストールする場合は、すべてのマシンの共用 common フォルダーで、同じドライブ名とディレクトリー構造を使用する必要があります。

開始する前に、前提条件ソフトウェアのインストールと構成が正しく行われていることを確認してください。ソフトウェアの前提条件については、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』の、すべての WebSphere Partner Gateway サーバーの要件についての表を参照してください。また、ソフトウェアの構成方法については、49 ページの『インストール済み前提条件の検証および構成』を参照してください。

また、WebSphere Partner Gateway データベースのセットアップも完了している必要があります。詳しくは、55 ページの『データベースの作成』を参照してください。最後に、キュー・マネージャーとリスナーを含め、ご使用のデータベース・サーバーと WebSphere MQ が稼働している必要があります。

以下の手順では、InstallShield ウィザード GUI を使用してコンポーネントをインストールする方法について説明しています。

**注:** コンポーネントは、コマンド行を使用してもインストールできます。詳しくは、75 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』を参照してください。

WebSphere Partner Gateway をインストールするには、次のステップ手順を実行します。

1. 管理者特権のユーザーとしてログインします。

ハブ・インストーラーでは、Windows サービスを正しく作成するために管理者特権が必要です。

2. WebSphere Partner Gateway システム・プロダクト CD にある CD-MediaDir\hub\setup.exe ファイルを実行します。

ウィザードが始動し、「ようこそ」ウィンドウが表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

3. 「ソフトウェア・ライセンス契約 (Software License Agreement)」ウィンドウで、ライセンス契約を読みます。契約条件に同意する場合は、「**ライセンス契約の条件に同意します。(I accept the terms of the license agreement)**」をクリックします。「次へ」をクリックして先へ進みます。
4. 「ディレクトリー名」ウィンドウで、WebSphere Partner Gateway がインストールされているディレクトリーのパスとディレクトリー名を入力します。IBM では、新規のディレクトリー・ロケーションを作成するか、または空のディレクトリーを選択することをお勧めします。「次へ」をクリックして先へ進みます。

注: ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

5. コンポーネント選択ウィンドウ (図 24) で、サーバーにインストールするコンポーネントを選択します。複数のコンポーネントを選択できます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

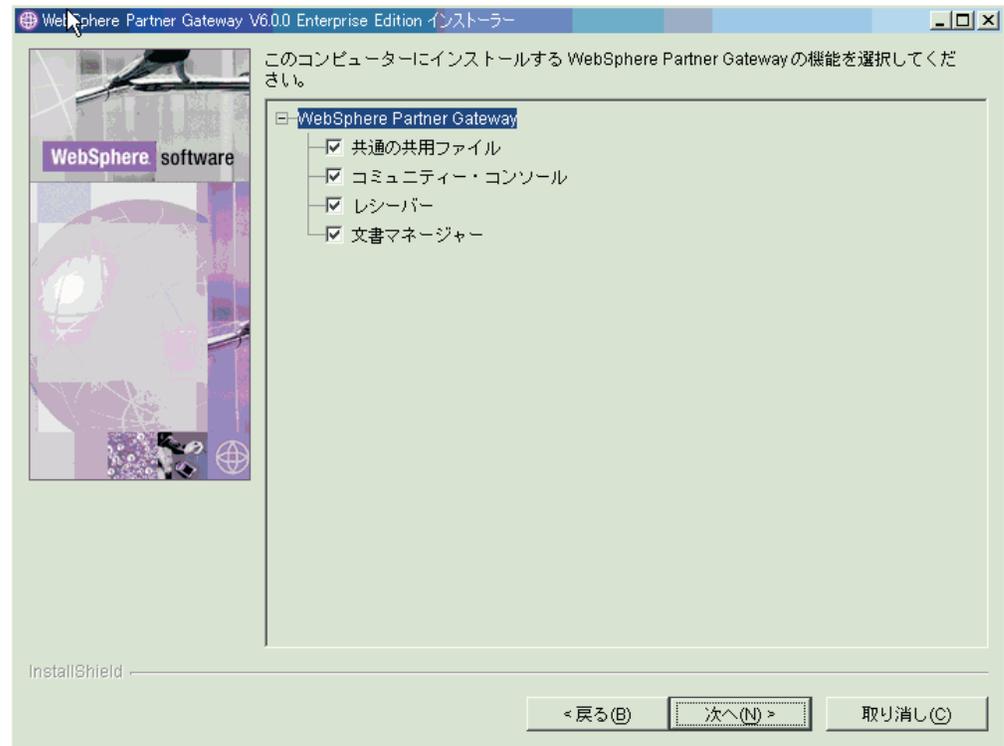


図 24. コンポーネント選択ウィンドウ

残りの手順では、すべてのコンポーネントをインストールすることを前提に説明します。すべてのコンポーネントをインストールしない場合、残りの手順で説明する一部のウィンドウは表示されません。

6. インストール先のマシンの完全修飾ホスト名を指定します。「次へ」をクリックして先へ進みます。
7. WebSphere Partner Gateway をホストするときに使用される以下の WebSphere Application Server のうちいずれかを選択し、「次へ」をクリックします。28 ページの図 7 を参照してください。
  - IBM WebSphere Application Server Express の組み込み版を自動的にインストールします。
  - このコンピューターにすでにインストールされている WebSphere Application Server V6.0 を使用します。

このオプションを選択すると別のウィンドウが表示されるため、WebSphere Application Server がインストールされているディレクトリーを入力する必要があります。

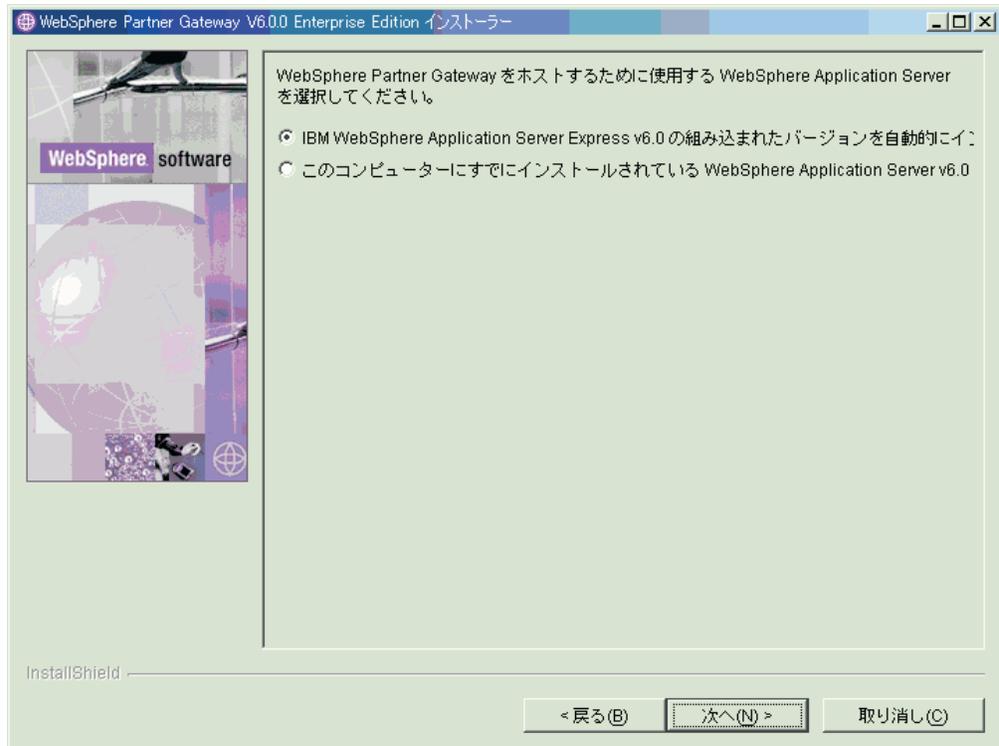


図 25. サーバー選択ウィンドウ

8. データベース・サーバーの選択ウィンドウ（65 ページの図 26）で、使用するデータベース・サーバーを選択します。**DB2 8.2 以降** または **Oracle 9i.9.2.0.4 以降** を選択できます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

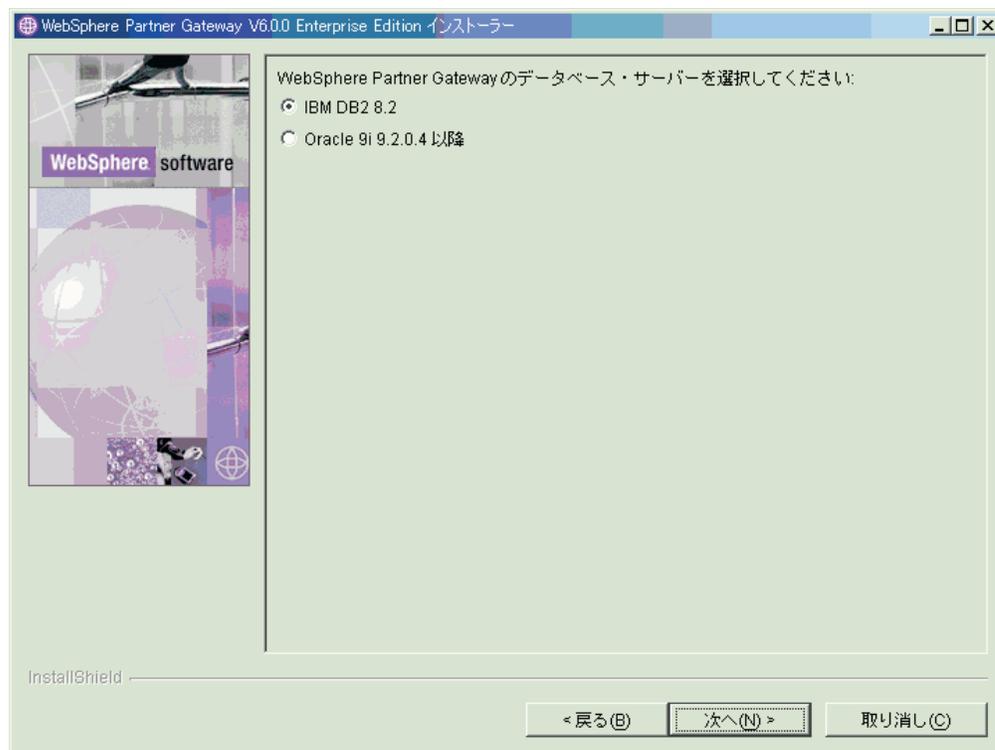


図 26. データベース選択ウィンドウ

9. データベース情報ウィンドウが表示されます。使用するデータベースとして DB2 を選択した場合は、この手順の DB2 に固有の指示に従って操作します。使用するデータベースとして Oracle を選択した場合は、この手順の Oracle に固有の指示に従って操作します。

## DB2

DB2 を選択した場合は、DB2 データベース情報ウィンドウが表示されます。66 ページの図 27 を参照してください。

DB2 が現在のシステムに収容されていない場合は、「**ホスト名**」フィールドで、「localhost」を DB2 が収容されているシステム名に置き換えます。

「**ポート**」フィールドには、DB2 インスタンスが使用しているポートを入力します。DB2 インスタンスが使用しているポートを調べるには、DB2 Control Center (GUI) を使用してプロパティを判別するか、コマンド行 `db2 get dbm cfg` を入力します。この情報 (DB2 構成) は、Database Loader によって "system temp"/bcgdbloader/logs ディレクトリーにも保管されます。デフォルトのポートは 50000 です。

「**所有者名**」、「**所有者パスワード**」、「**データベース名**」、および「**スキーマ名**」の各テキスト・フィールドに、要求情報を入力します。これらの情報は、Database Loader のインストール時にデータベースを定義するために使用された名前です。55 ページの『データベースの作成』を参照してください。

「**次へ**」をクリックして先へ進みます。

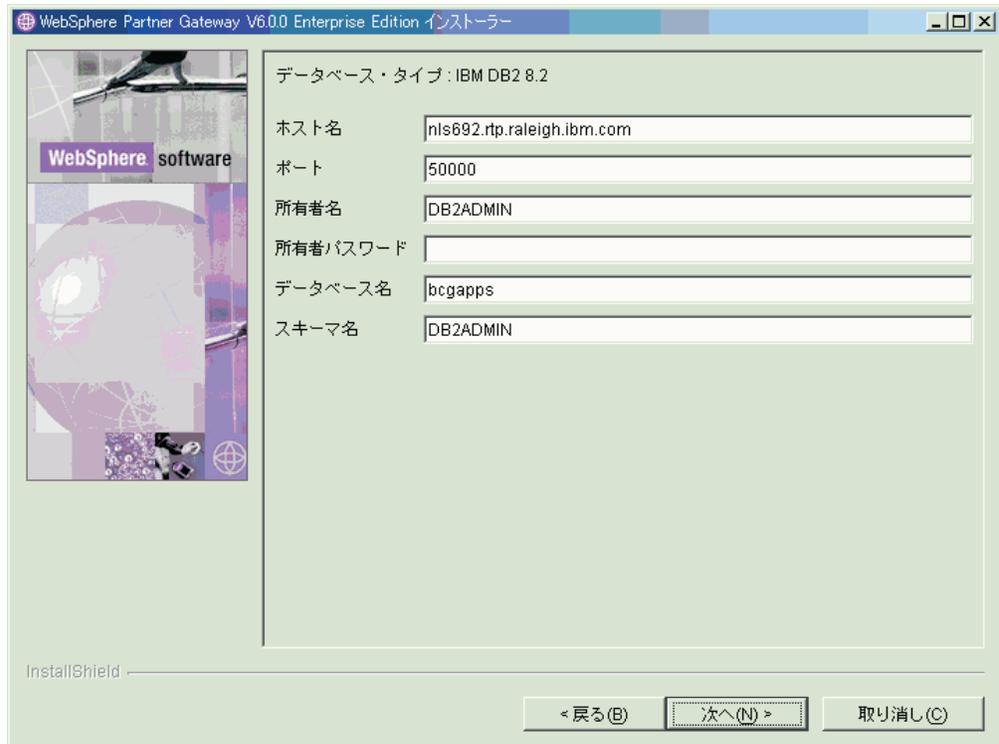


図 27. DB2 情報ウィンドウ

### Oracle

Oracle を選択すると、Oracle データベース情報ウィンドウ (67 ページの図 28) が表示されます。

Oracle データベースに関する必須情報を入力します。デフォルトのポートは 1521 です。

**注:** JDBC ドライバーの絶対パスと名前は、このコンピューター上のドライバーの正しいバージョンを指し示している必要があります。ドライバーは、Oracle がインストールされたディレクトリー・ツリーにあります。ドライバーは次の Web サイトからダウンロードすることもできます。

[http://www.oracle.com/technology/software/tech/java/sqlj\\_jdbc/index.html](http://www.oracle.com/technology/software/tech/java/sqlj_jdbc/index.html) 「JDBC Driver Downloads」のセクションで、「**Oracle xx Release x drivers**」をクリックします。稼働している Oracle バージョンに一致するドライバー・バージョンを間違わずに選択してください。

**注:** ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「**ファイル名を入力 (Enter file name)**」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「**ディレクトリーを選択 (Select a directory)**」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

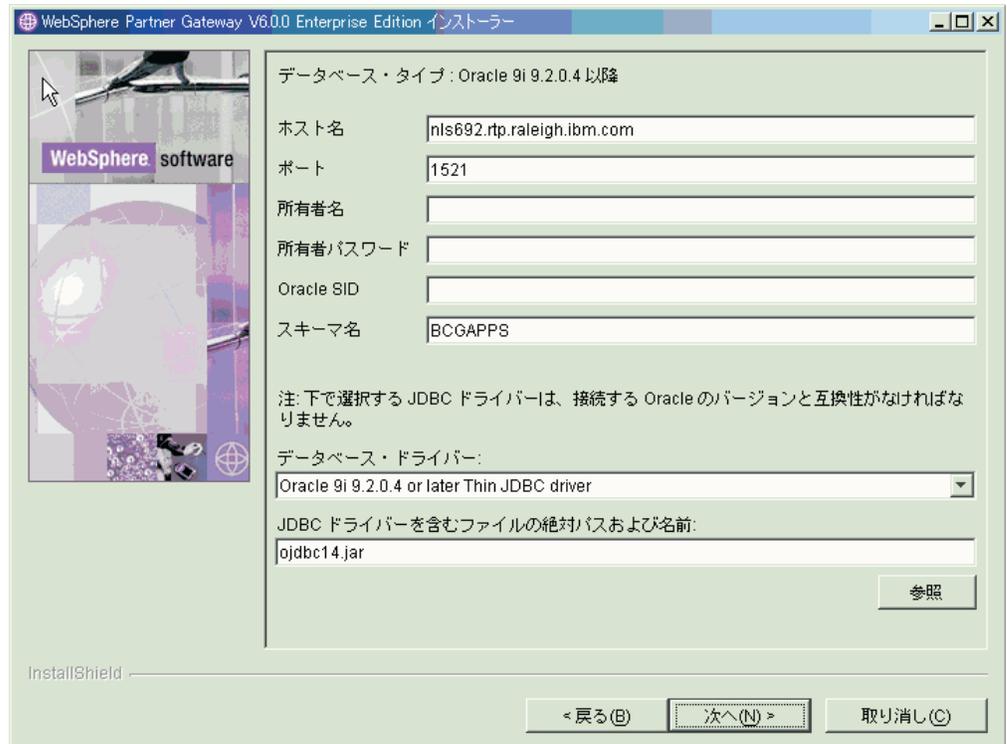


図 28. Oracle 情報ウィンドウ

データベース接続確認ウィンドウが表示されます。68 ページの図 29 を参照してください。接続が正常に行われた場合、テーブル、ビュー、関数、およびプロシージャのカウンタ情報に注意し、確認します。接続が失敗した場合は、情報ウィンドウの指示を検討するか、データベース資料を参照してエラー・コードに対応します。

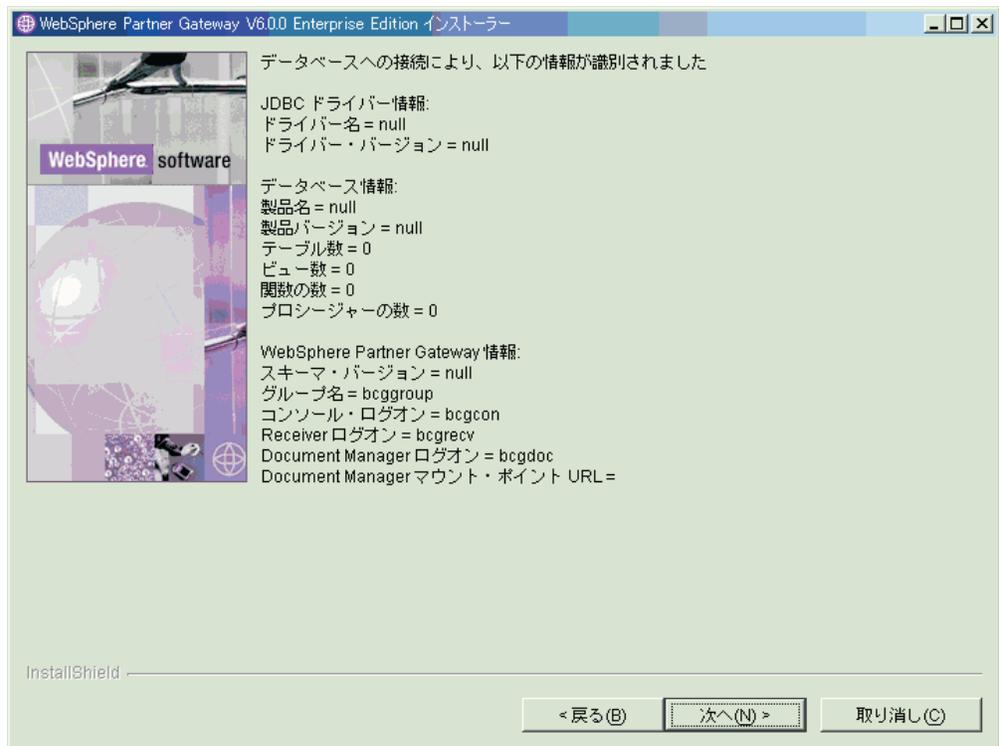


図 29. データベース接続確認ウィンドウ

10. 「共通情報ディレクトリー」ウィンドウで、共通の共用コンポーネントのロケーションを入力します。この値は、Database Loader のインストールの際に使用されたディレクトリー・ロケーションと一致しなければなりません。

注: ディレクトリーを選択するためにブラウズする場合は、インストール・パスを選択した後で、「ファイル名を入力 (Enter file name)」フィールドに「.」を 1 つ入力してください。「.」を入力しないと、「ディレクトリーを選択 (Select a directory)」ウィンドウから、このウィンドウを起動したウィンドウに戻りません。

11. WebSphere MQ Server ウィンドウで、ご使用の WebSphere MQ サーバーに関する必要な情報を入力します。69 ページの図 30 を参照してください。

WebSphere MQ が現在のマシンに収容されていない場合は、「ホスト名」フィールドで、「localhost」を WebSphere MQ が収容されているシステム名に置き換えます。

「キュー・マネージャー」フィールドで、デフォルト名を WebSphere MQ を構成するときに使用した名前に置き換えます (51 ページの『WebSphere MQ の構成』を参照)。

「リスナー・ポート」フィールドには、リスナーが使用しているポート番号を入力します (51 ページの『WebSphere MQ の構成』を参照)。デフォルトのポートは 9999 です。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

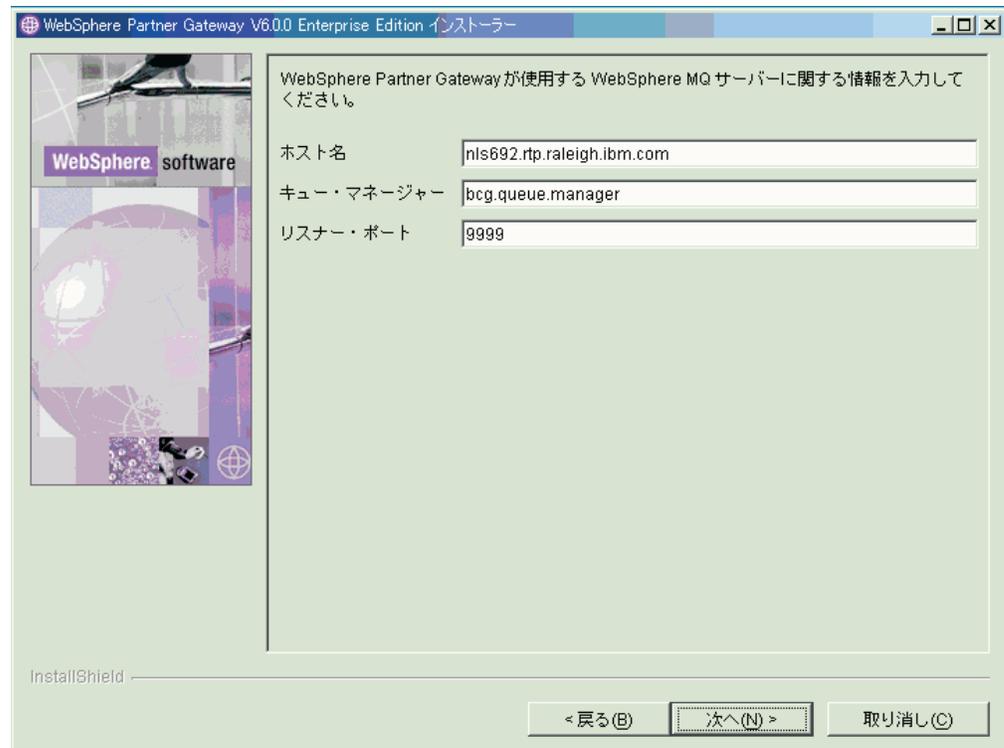


図 30. WebSphere MQ Server ウィンドウ

- Windows Service のインストール・ウィンドウが表示されます。WebSphere Partner Gateway の機能を Windows サービスとして登録する場合は、「**Windows Service としてインストール**」チェック・ボックスを選択します。70 ページの図 31 を参照してください。

「次へ」をクリックして先へ進みます。



図 31. Windows Service のインストール・ウィンドウ

13. Community Console のインストールを選択した場合は、Community Console の構成ウィンドウを使用して構成します。71 ページの図 32を参照してください。

「ユーザー名」フィールドには、Community Console コンポーネントがデータベースにログインするために使用するユーザー ID を入力します。

「パスワード」フィールドには、ユーザー名に関連したパスワードを入力します。入力したパスワードが正しいことを確認してください。パスワードに誤りがあると、Community Console は機能しません。

「HTTP ポート」フィールドには、コンポーネントがメッセージを listen するポート番号を入力します。Community Console、Receiver、および Document Manager には固有のポート番号が割り当てられ、それらのポートはこのコンピューターで使用可能な状態になっている必要があります。デフォルトのポートは 58080 です。

「HTTPS ポート」フィールドには、コンポーネントがメッセージを listen するセキュア・ポートの番号を入力します。Community Console、Receiver、および Document Manager には固有のポート番号が割り当てられ、それらのポートはこのコンピューターで使用可能な状態になっている必要があります。デフォルトのポートは 58443 です。

「ヘルプ・システムのホスト名」フィールドで、ヘルプ・システムが存在するサーバー・アドレスを入力します。

「ヘルプ・システムのポート番号」フィールドで、ヘルプ・システムにアクセスするためのポート番号を入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

**注:** データベース接続が失敗すると、データベース情報ウィンドウが表示されます。データベース情報ウィンドウの指示を検討するか、データベース資料を参照して、エラー・コードに対応します。

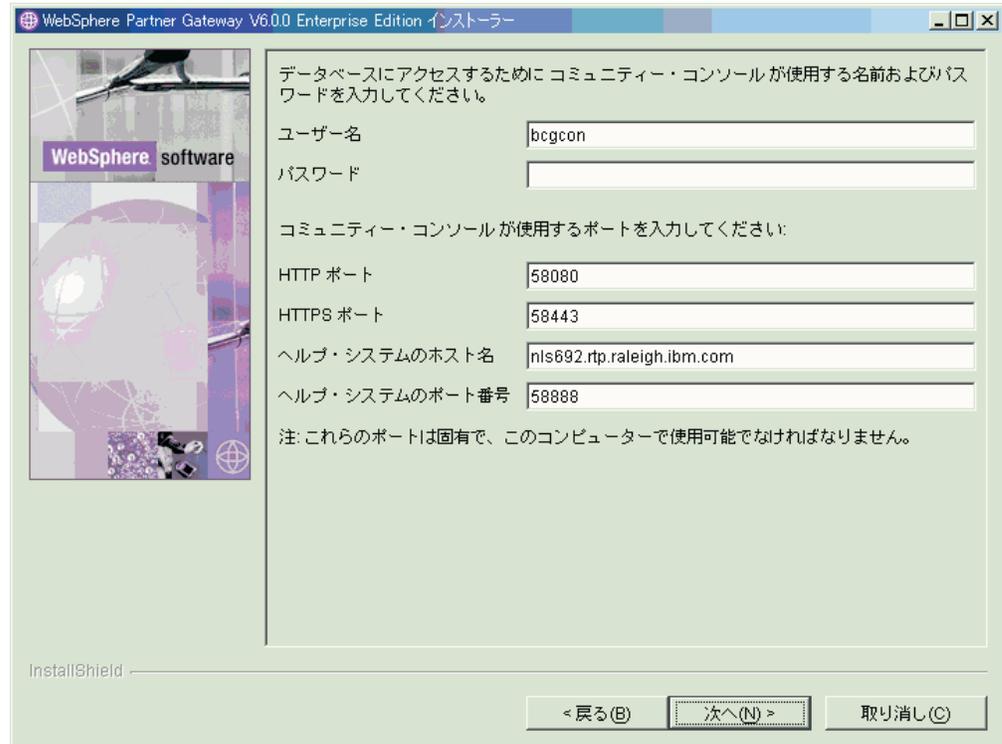


図 32. Community Console ウィンドウ

14. Receiver コンポーネントまたは Document Manager コンポーネントを選択した場合は、それぞれの構成ウィンドウを使用して構成します。これらのウィンドウには、Community Console の構成ウィンドウと同じフィールドがあります。3つのコンポーネント (Community Console、Receiver、および Document Manager) すべてで、別々の HTTP ポートと HTTPS ポートを使用する必要があります。72 ページの図 33 および 72 ページの図 34 を参照してください。

**注:** 別々のマシンに Receiver と Document Manager をインストールする場合は、Receiver マシンに Document Manager マシンによって解決可能なホスト名を付ける必要があります。

完了したら「次へ」をクリックします。

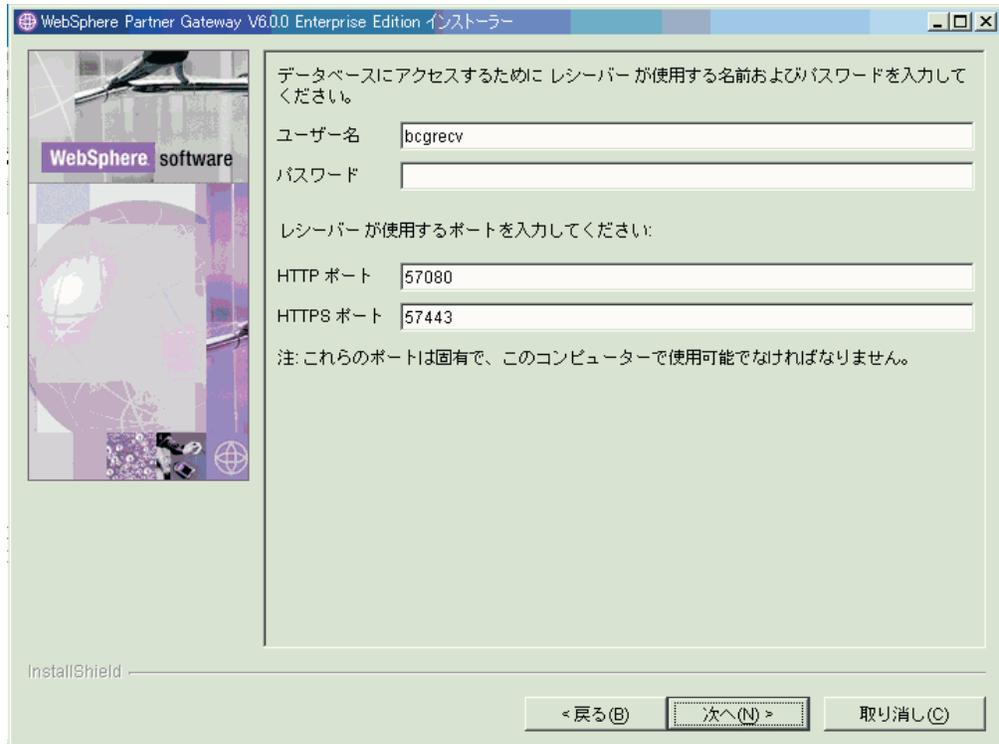


図 33. Receiver の構成ウィンドウ

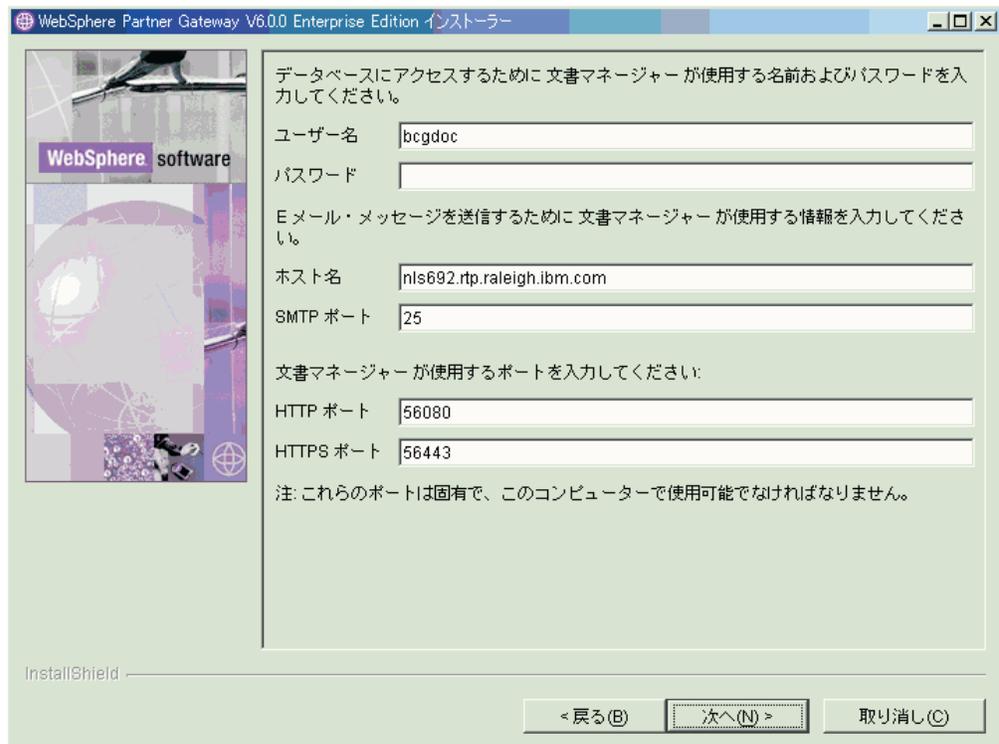


図 34. Document Manager の構成ウィンドウ

15. RosettaNet の構成ウィンドウ (図 35) で、RosettaNet メッセージの連絡先情報を入力します。これらのテキスト・フィールドには値が必要です。正しい値が不明の場合はデフォルト値を使用してください。この情報は、RosettaNet を使用する場合に必要であり、すべてのインストールで入力することをお勧めします。

「名前」フィールドで、RosettaNet の問題が発生した場合の連絡先担当者の名前を入力します。

「電話番号」および「FAX 番号」フィールドには、RosettaNet 担当者の電話番号と FAX 番号を入力します。

「E メール・アドレス」フィールドには、RosettaNet の連絡先 E メール・アドレスを入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

|            |                     |
|------------|---------------------|
| 名前         | unknown             |
| 電話番号       | unknown             |
| FAX 番号     | unknown             |
| E メール・アドレス | support@example.com |

図 35. RosettaNet の構成ウィンドウ

16. アラート通知ウィンドウ (74 ページの図 36) で、WebSphere Partner Gateway を構成して、E メールでアラートを送信できるようにします。値が必要です。正しい値が不明の場合はデフォルト値を使用してください。

「SMTP リレー」フィールドには、SMTP サーバーのロケーションを入力します。

「送信元 E メール・アドレス」フィールドで、E メールを送信するときに WebSphere Partner Gateway が使用する E メール・アドレスを入力します。

「送信先 E メール・アドレス」フィールドで、アラート通知に対応するユーザーが、E メールを送信するとき使用する宛先の E メール・アドレスを入力します。

「次へ」をクリックして先へ進みます。

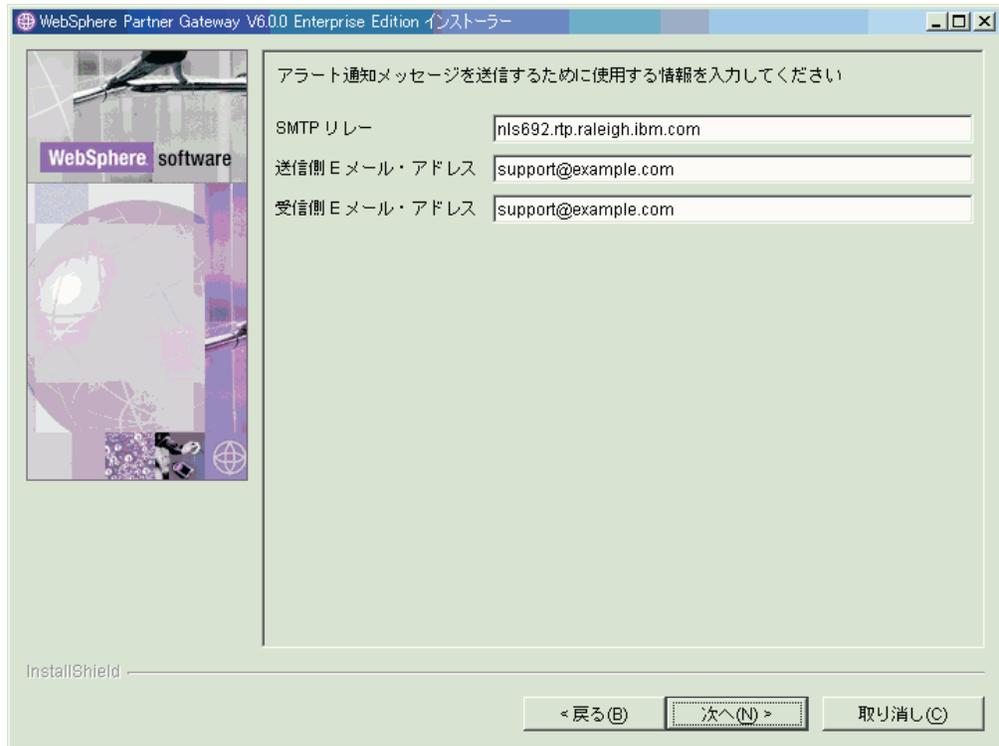


図 36. アラート通知ウィンドウ

17. 「要約」ウィンドウでは、インストールされるコンポーネントを示す情報を確認します。表示された情報のいずれかに誤りがある場合は、「戻る」をクリックして前のウィンドウに戻ります。「要約」ウィンドウの情報がすべて正しい場合は、「次へ」をクリックします。
18. WebSphere Partner Gateway インストーラーにより、選択されたコンポーネントがインストールおよび構成されます。このタスクが完了すると、インストーラーで「完了」ボタンが使用可能になります。「完了」をクリックします。
19. 以下の値が設定されていることを確認します。

**DB2:**

- a. `console¥lib¥config¥bcg_console.properties` ファイルを開きます。値として、`bcg.co.db.schema=DB2ADMIN` が設定されているかどうかを検証します。
- b. `receiver¥lib¥config¥bcg_receiver.properties` ファイルを開きます。値として、`bcg.co.db.schema=DB2ADMIN` が設定されているかどうかを検証します。
- c. `router¥lib¥config¥bcg.properties` ファイルを開きます。値として、`bcg.co.db.schema=DB2ADMIN` が設定されているかどうかを検証します。

### Oracle:

- a. `console¥lib¥config¥bcg_console.properties` ファイルを開きます。値として、`bcg.co.db.schema=BCGAPPS` が設定されているかどうかを検証します。
  - b. `receiver¥lib¥config¥bcg_receiver.properties` ファイルを開きます。値として、`bcg.co.db.schema=BCGAPPS` が設定されているかどうかを検証します。
  - c. `router¥lib¥config¥bcg.properties` ファイルを開きます。値として、`bcg.co.db.schema=BCGAPPS` が設定されているかどうかを検証します。
20. WebSphere Partner Gateway コンポーネントをインストールする各サーバー上で、この手順を繰り返します。共通コンテンツは、一度しかインストールする必要はありません。ファイル共有システムによって、すべてのコンピューターで使用可能になるためです。

すべての WebSphere Partner Gateway コンポーネントのインストールが完了したら、75 ページの『コマンド行によるコンポーネントのインストール』を参照してください。

---

## コマンド行によるコンポーネントのインストール

WebSphere Partner Gateway には、コマンド行からコンポーネントをインストールする方法もあります。この機能では、すべてのインストール・オプションの値を提供するオプション・ファイルが必要です。提供されたサンプル ISS ファイルを変更して、カスタム・オプション・ファイルを作成できます。

Database Loader のサンプル・ファイルは、CD の Database Loader ディレクトリーおよびアーカイブされていないインストール・イメージにあります。WebSphere Partner Gateway サンプル・ファイルは、CD のハブ・ディレクトリーと、アーカイブされていないインストール・イメージ内にあります。

ファイルの各オプションは別の行に表示されています。また、それらの前には、設定を説明し、オプション例を示すコメントが付いています。サンプル・ファイルのオプション値は、GUI に示されるデフォルト値です。パスワードやホスト名などのいくつかの設定では、ローカル構成に関する情報が必要です。

コマンド行を使用して Database Loader または WebSphere Partner Gateway をインストールするには、以下のようにします。

1. Database Loader をインストールする場合は、DB2ADMIN としてログインします。
2. WebSphere Partner Gateway をインストールする場合は、管理者としてログインします。
3. コードをインストールするマシン上で、コマンド行を開きます。
4. インストール実行可能プログラムのロケーションに移動します。例えば、次のようになります。

```
cd DBLoader
```

または

```
cd hub
```

5. コマンドを以下のように入力してください。

```
setupWindows -options "<options file name>"
```

<options file name> は、インストーラーが使用するオプション値を含むファイルを示します。

このコマンドを使用すると、インストーラーに標準の GUI インストールに表示されるすべてのウィンドウが表示され、それぞれのウィンドウのフィールドすべてには、オプション・ファイルにリストされている値が入力されています。

---

## サイレント・インストールの実行

Database Loader および WebSphere Partner Gateway は、GUI やユーザー対話のいずれも使用せずに、インストールおよびアンインストールを行うことができます。サイレント・インストールは、複数システムに同じ設定でコンポーネントをインストールする場合、ソフトウェア配布製品を使用する場合、またはグラフィカル環境が使用できない場合に、特に有効です。

Database Loader または WebSphere Partner Gateway のサイレント・インストールを行うには、以下のステップに従います。

1. Database Loader をインストールする場合は、DB2ADMIN としてログインします。
2. WebSphere Partner Gateway をインストールする場合は、管理者として、または管理者グループに属するユーザーとしてログインします。
3. コードをインストールするマシン上で、コマンド行を開きます。
4. インストール実行可能プログラムのロケーションに移動します。例えば、次のように入力します。

```
cd DBLoader
```

または

```
cd hub
```

5. 以下のコマンドを入力します。

```
setup -options "<options file name>" -silent
```

<options file name> は、インストーラーが使用するオプション値を含むファイルを示します。

インストーラーは、ユーザー対話または GUI なしに動作します。インストーラーはコマンド・プロンプトに戻ります。

---

## WebSphere Partner Gateway の開始

WebSphere Partner Gateway のインストールが完了すれば、製品を稼働させる準備ができています。

WebSphere Partner Gateway をコマンド・プロンプトから始動するには、次の手順を実行します。

1. 以下のディレクトリーにナビゲートします。

```
{INSTALL DIR}¥IBM¥bcghub¥bin
```

2. 次のコマンドを入力して、Community Console を開始します。

```
bcgStartServer.bat bcgconsole
```

3. 次のコマンドを入力して、Receiver を開始します。

```
bcgStartServer.bat bcgreceiver
```

4. 次のコマンドを入力して Document Manager を開始します。

```
bcgStartServer.bat bcgdocmgr
```

**注:** コンポーネントを Windows サービスとしてインストールした場合は、「管理ツール」の「サービス」の設定値を変更することにより、始動時にそれらのサービスが自動的に開始されるように選択することもできます。

5. ヘルプ・システムを開始します。78 ページの『ヘルプ・システムの開始』を参照してください。

6. Web ブラウザーを開いて次の URL を入力します。

非セキュアの場合は、次のようにします。

```
http://<hostname>.<domain>:58080/console
```

セキュアの場合は、次のようにします。

```
https://<hostname>.<domain>:58443/console
```

<hostname> および <domain> は、Community Console コンポーネントをホスティングするコンピューターの名前およびロケーションです。

**注:** Community Console では、セッション情報を保守するために Cookie サポートをオンにする必要があります。Cookie に個人情報が保管されることはなく、ブラウザが閉じられると Cookie も有効期限切れになります。

7. Web ブラウザーにウェルカム・ページが表示されます。次の情報を使用して、WebSphere Partner Gateway にログインします。

- 「**ユーザー名**」フィールドには次のように入力します。

```
hubadmin
```

- 「**パスワード**」フィールドには次のように入力します。

```
Pa55word
```

- 「**会社ログイン名**」フィールドで、次のように入力します。

```
Operator
```

「**ログイン**」をクリックします。

8. 初回にログインする場合は、新規パスワードを作成する必要があります。新規パスワードを入力してから、「**検証**」フィールドにもう一度新規パスワードを入力します。

9. 「**保管**」をクリックします。システムは、Console の初期入力ウィンドウを表示します。

これで、WebSphere Partner Gateway へのログインが完了しました。インストールをテストする方法については、78 ページの『インストール・システムのテスト』のセクションを参照してください。次の操作については、「*Getting Started*」ガイドも参照してください。

## ヘルプ・システムの開始

ヘルプ・システムが機能するには、ヘルプ・システム・サーバーが稼働している必要があります。デフォルトでは、ヘルプ・システムは Console と同じサーバーにインストールされています。ただし、Console のインストール時にヘルプ・システムに別のサーバーを指定することができます。

{INSTALL DIR}/console/lib/config/ に置かれている `bcg_console.properties` ファイルの `ibm.bcg.help.host` プロパティの値を調べることによって、ヘルプ・システムのロケーションを確認することができます。

ヘルプ・システムを開始するには、以下のスクリプトを実行します。

```
{INSTALL DIR}/bin/bcgStartHelp.bat
```

**注:** Windows システムの場合、`bcgStartHelp` スクリプトを実行するために使用したウィンドウは、ヘルプ・サーバーを引き続き稼働するために開いたままにしておく必要があります。

ヘルプ・システムを停止するには、以下のスクリプトを実行します。

```
{INSTALL DIR}/bin/bcgStopHelp.bat
```

---

## インストール・システムのテスト

次の手順に従って、WebSphere Partner Gateway の稼働中にインストール・システムをテストしてください。

1. ユーザーのログイン・イベントに基づいたアラートを作成し、アラートの連絡先としてユーザー自身を設定します。
  - 「アラート所有者」リストで、「ハブ・オペレーター (Hub Operator)」を選択します。
  - 「参加者」リストで、「ハブ・オペレーター (Hub Operator)」を選択します。
  - 「イベント・タイプ」リストで、「情報」を選択します。
  - 「イベント名」リストで、「102002 ユーザーが正常にログイン」を選択します。
2. ログアウトし、ハブ管理ユーザーとしてもう一度ログインします。
3. E メールでアラート・メッセージをチェックします。

WebSphere Partner Gateway のインストールで問題が発生した場合は、80 ページの『トラブルシューティング』を参照してください。

**注:** 文書フローをテストする場合は、「管理者ガイド」の『実動トラフィックのシミュレーション』の章を参照してください。

---

## WebSphere Partner Gateway のアンインストール

この手順を使用して、WebSphere Partner Gateway または Database Loader をアンインストールします。

1. 現在アンインストールしているコンポーネントを後でインストールする場合は、コンポーネントのインストールに使用したオプション・ファイルを保管します。

**注:** コンポーネントをもう一度インストールする計画がある場合は、共通ディレクトリー・ツリーと共に、Console、Receiver ディレクトリーと Document Manager ディレクトリーもバックアップしてください。また、Database Loader アンインストーラーを使用する前に、データベースをバックアップする必要もあります。

2. 以下の順序で WebSphere Partner Gateway サーバーをシャットダウンします。

- a. 以下のディレクトリーにナビゲートします。

```
{INSTALL DIR}\IBM\bcghub\bin
```

- b. 次のコマンドを入力して、サーバーをシャットダウンします。

```
bcgStopServer.bat bcgconsole
```

- c. 次のコマンドを入力して、Receiver をシャットダウンします。

```
bcgStopServer.bat bcgreceiver
```

- d. 次のコマンドを入力して、ルーターをシャットダウンします。

```
bcgStopServer.bat bcgdocmgr
```

- e. 次のコマンドを入力して、ヘルプ・サーバーを停止します。

```
bcgStopHelp.bat
```

3. bcghub\\*\_uninst ディレクトリーで、アンインストール実行可能ファイルを実行します。

アンインストーラー・ウィザードが始動し、「ようこそ」ウィンドウが表示されます。「次へ」をクリックして先へ進みます。

4. WebSphere Partner Gateway をアンインストールする場合は、コンポーネント選択ウィンドウでこのシステムから取り外すコンポーネントを選択します。複数のコンポーネントを選択できます。

**注:** WebSphere Partner Gateway は、各コンポーネントの 1 つ以上のインスタンスを必要とします。コンポーネントの唯一のインスタンスを除去する場合は、別のシステムにコンポーネントをインストールすることが必要になります。例えば、ネットワークを構成する Document Manager の唯一のインスタンスを削除する場合は、別のシステムに Document Manager をインストールし、同じデータベースとキュー・マネージャーを使用するように構成する必要があります。

「次へ」をクリックして先へ進みます。アンインストーラーの画面に「要約」ウィンドウが表示されます。

5. 「要約」ウィンドウには、アンインストーラーによって除去されるコンポーネントがリストされます。この情報を確認します。表示された情報のいずれかに誤りがある場合は、「戻る」をクリックして前のウィンドウに戻り、誤りを訂正します。「要約」ウィンドウの情報がすべて正しい場合は、「次へ」をクリックします。

注: アンインストーラーは、インストール時に作成されたファイルのみ除去します。インストール後に作成されたファイルやフォルダーは一切除去しません。アンインストールの完了後に残りのファイルまたはフォルダーを手動で除去します。

6. アンインストーラーにより、選択されたコンポーネントが除去されます。すべてのコンポーネントが除去されると、アンインストーラーの「完了」ボタンが使用可能になります。「完了」をクリックします。
7. ディレクトリー構造に残っているファイルを確認してからディレクトリー・ツリーを除去します。
8. データベースをアンインストールするには、bcgdbloader¥\_uninst ディレクトリーにあるアンインストール実行ファイルを実行します。

---

## トラブルシューティング

以下の手順では、WebSphere Partner Gateway のインストールで発生する問題をトラブルシューティングする方法を説明しています。

この章の内容は以下のとおりです。

- 44 ページの『Database Loader のエラーの特定』
- 45 ページの『誤ったバージョンの検出問題からの回復』

### Database Loader のエラーの特定

Database Loader のインストール中に問題が発生した場合は、system temp¥bcgdbloader¥logs ディレクトリーの Database Loader ログで問題に関する情報を参照してください。問題が解決したら、次の手順を実行し、作成されたデータベースを削除します。

1. Database Loader アンインストーラーを実行して、データベースを除去します。
2. データベースの削除が完了したら、Database Loader ウィザードを再実行します。

WebSphere Partner Gateway コンポーネントのインストール中に問題が発生する場合は、以下のコンポーネント・インストール・ログを検討してください。

```
{INSTALL DIR}¥logs¥bcgconsole
```

```
{INSTALL DIR}¥logs¥bcgreceiver
```

```
{INSTALL DIR}¥logs¥bcgdocmgr
```

以下のランタイム・ログも調べる必要があります。

#### 組み込みの WebSphere Application Server

```
{INSTALL DIR}was¥profiles¥bcgconsole¥logs
```

```
{INSTALL DIR}was¥profiles¥bcgreceiver¥logs
```

```
{INSTALL DIR}was¥profiles¥bcgdocmgr¥logs
```

## WebSphere Application Server v6.0

{INSTALL DIR}\profiles\bcgconsole\logs

{INSTALL DIR}\profiles\bcgreceiver\logs

{INSTALL DIR}\profiles\bcgdocmgr\logs

### 誤ったバージョンの検出問題からの回復

詳細については、45 ページの『誤ったバージョンの検出問題からの回復』を参照してください。



---

## 第 4 章 WebSphere Partner Gateway のアップグレード

以下の手順では、WebSphere Partner Gateway をアップグレードする方法について説明します。これらのアップグレード手順では、新規のバージョンに対して、同一バージョンの MQSeries キュー・マネージャー構成を含め、同一環境を使用することを前提にしています。また、WebSphere Partner Gateway の同じエディション (例えば、エンタープライズ・バージョン 4.2.x からエンタープライズ・バージョン 4.2.x へ) についてアップグレードを行うものとします。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『WebSphere Partner Gateway のシャットダウン』
- 84 ページの『以前のバージョンのバックアップ』
- 85 ページの『オペレーティング・システムのアップグレード』
- 85 ページの『データベースのアップグレード』
- 88 ページの『照合シーケンスの更新』
- 88 ページの『MQSeries と JMS のキュー構成の更新』
- 89 ページの『以前のバージョンのアンインストール』
- 89 ページの『WebSphere Partner Gateway のインストール』
- 90 ページの『カスタム構成の復元』
- 90 ページの『WebSphere Partner Gateway の開始』
- 90 ページの『Oracle JDBC ドライバーの更新』

---

### WebSphere Partner Gateway のシャットダウン

アップグレードするには、その前に以前のバージョンをシャットダウンしておく必要があります。Receiver をシャットダウンして新規文書の受け入れを停止し、進行中の文書の処理を完了する必要があります。以下の手順に従って、システムを適切にシャットダウンします。

1. ご使用のオペレーティング・システムに対応する shutdown\_bcg.\* スクリプトを使用して、Receiver を停止します。shutdown\_bcg.\* スクリプトは、以下のディレクトリーに配置されています。

```
{INSTALL DIR}/receiver/was/bin
```

Console の文書ビューアーを検査して、進行中の文書が処理を終了していることを確認します。

2. ご使用のオペレーティング・システムに対応する shutdown\_bcg.\* スクリプトを使用して、Document Manager を停止します。shutdown\_bcg.\* スクリプトは、以下のディレクトリーに配置されています。

```
{INSTALL DIR}/router/was/bin
```

3. ご使用のオペレーティング・システムに対応する stopServer.\* スクリプトを使用して、Community Console を停止します。stopServer.\* スクリプトは、以下のディレクトリーに配置されています。

```
{INSTALL DIR}/console/was/bin
```

4. MQ メッセージ・キューを空にします。WebSphere Partner Gateway のアップグレード・バージョンでは、以前のバージョンで作成されたメッセージを処理できないため、このキューを空にすることは重要です。キューを空にするには、WebSphere MQ Explorer を使用して、以下のように操作します。

**Windows:**

- a. Queue Managers フォルダを展開します。
- b. キュー・マネージャーを右マウス・ボタンでクリックして、「すべてのタスク (All Tasks)」 > 「メッセージのクリア (Clear Messages)」を選択します。

**UNIX:**

- a. 次のコマンドを入力して、ユーザーを mqm に変更します。

```
su - mqm
```
  - b. display コマンドを実行してキューをリストします。
  - c. すべてのキューをクリアします。
  - d. display コマンドによって戻されたすべてのキューに対してこの操作を繰り返します。
5. 次のコマンドを使用して、MQ キュー・マネージャーとリスナーをシャットダウンします。

**注:** UNIX システムの場合は、mqm ユーザーが実行する必要があります。

```
endmqm bcg.queue.manager
endmqlsr -m bcg.queue.manager
```

---

## 以前のバージョンのバックアップ

以前のバージョンの WebSphere Partner Gateway をバックアップしてからアップグレードに進む必要があります。以下の手順では、既存のシステムを正常にバックアップするために必要な作業について説明します。

1. データベースをバックアップします。これを実行する方法については、データベース管理者に問い合わせるか、データベースの資料を参照してください。このステップは、再作成が困難な WebSphere Partner Gateway データをデータベースが格納しているため重要です。
2. {INSTALL DIR}/common に配置されている共用の共通ディレクトリー・ツリーをバックアップします。このステップは、否認防止ディレクトリーやメッセージ格納ディレクトリーなどの再作成が困難な WebSphere Partner Gateway データを共用の共通ツリーが含んでいるため重要です。
3. 直前の WebSphere Partner Gateway インストール・ディレクトリーをバックアップします。例: {INSTALL DIR}/console、{INSTALL DIR}/receiver、および

{INSTALL DIR}/router。

代替方法として、以下のステップを繰り返して、指定された構成データのみをバックアップすることもできます。

- a. ご使用のオペレーティング・システムに対応する was/bin/backupConfig.\* スクリプトを呼び出して、埋め込み WebSphere Application Server 構成をバックアップします。WebSphereConfig\*.zip バックアップ・ファイルをバックアップ・ロケーションにコピーします。
- b. was/jndi/WBIC サブディレクトリー・ツリーをバックアップします。
- c. was/config サブディレクトリー・ツリーをバックアップします。

---

## オペレーティング・システムのアップグレード

ご使用のオペレーティング・システムが、WebSphere Partner Gateway の新規リリースに必要な最低限のサポート・レベルを満足していることを確認する必要があります。アップグレード処理を続ける前に、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』を参照してください。

**注:** RedHat Linux の場合は、オペレーティング・システムのアップグレードを開始する前に、DB2、Oracle、WebSphere MQ などの既存のインストールをバックアップするようお勧めします。RedHat Linux は、2.1 から 3 へのアップグレードをサポートしていません。2.1 をアンインストールしてから 3 をインストールしてください。RedHat Linux 3.0 のアップグレード資料を参照してください。

---

## データベースのアップグレード

以下の手順では、DBLoader を使用して、アップグレード済みバージョンのデータベース表を更新する方法について説明します。

1. 以下のコマンドを (Windows では管理者ユーザー、UNIX では root ユーザーの立場で) 入力して、Database Loader をアンインストールします。

```
{INSTALL DIR}/DBLoader/_uninst/uninstall
```

**重要:** アンインストールの間は、「データベースを除去します」を選択しないでください。バックアップされていない場合は、データベースを除去するとデータを損失します。既存のデータベースは、以下のステップでアップグレードされます。

2. データベースがこのリリースのサポート要件を満たしていることを確認するには、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』を参照してください。先に進む前に、必要に応じて更新します。
3. ご使用のオペレーティング・システムに特定の setup\* ランチャーを使用して、メディア・ロケーションから upgraded Database Loader を実行します。例えば、次のように入力します。

```
{CD_ROM/MEDIA DIR}/DBLoader/setup*
```

**注:** Windows の場合は、データベースの所有ユーザーとしてログインしていることを確認してください。所有ユーザーは通常 DB2ADMIN です。

以下のガイドラインに従ってください。

- a. アップグレードする前のバージョンで使用されている入力値と同じものを指定します。例: ユーザー ID、パスワード、データベース・ベンダーなど。バージョン 4.2.2 以上では、ユーザーが入力した情報が `install_cfg.properties` という名前のファイルに保存されます。このファイルを利用すると、以前に入力した内容をもう一度参照できます。
- b. 構成デフォルトを検査し、必要に応じてオーバーライドします。
- c. 「SQL ファイルを自動的に実行 (Run the SQL Files automatically)」を選択しないでください。

注: データベースがすでに存在していることを示す警告を受け取ります。この警告は無視しても構いません。

4. `{WBIC_INSTALL_DIR}/DBLoader/scripts/DB2` ディレクトリーまたは `{WBIC_INSTALL_DIR}/DBLoader/scripts/Oracle` ディレクトリーに存在する `BCGUpgrade*.sql` スクリプトを実行します。

注: 各 `BCGUpgrade_from-ver_to-ver.sql` スクリプトは、ご使用のシステムに適用される最も古いバージョンから始め、次のバージョンへと順番に実行する必要があります。

## DB2

以下のコマンドを実行します。

- a. **UNIX:** `su - db2inst1`  
**Windows:** DB2CLP を開始します。

注: Windows の場合は、データベースの所有ユーザーとしてログインしていることを確認してください。所有ユーザーは通常 DB2ADMIN です。

- b. `db2start` (データベースが開始しない場合)
- c. `db2 connect to bcgapps`(`bcgapps` はデータベース名)
- d. `cd {INSTALL DIR}/DBLoader/scripts/DB2`
- e. 既存のバージョンに従って、以下のスクリプトのいずれかを実行して、データベースをアップグレードします。

4.2.0 から 4.2.1 まで:

```
db2 -td! -f BCGUpgrade_420_421.sql -z
/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_420_421.log
```

4.2.1.0 から 4.2.1 まで (Fix Pack 1 は未インストール):

```
db2 -td! -f BCGUpgrade_421_421FP1.sql -z
/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_421_421FP1.log
```

4.2.1.1 から 4.2.2 まで:

```
db2 -td! -f BCGUpgrade_421FP1_422.sql -z
/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_421FP1_422.log
```

4.2.2 から 4.2.2.2 まで (Fix Pack 2 は未インストール):

```
db2 -td! -f BCGUpgrade_422_422FP2.sql -z
/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_422_422FP2.log
```

4.2.2.2 から 4.2.2.3 まで (Fix Pack 3 は未インストール):

```
db2 -td! -f BCGUpgrade_422FP2_422FP3.sql -z
/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_422FP2_422FP3.log
```

4.2.2.3 から 4.2.2.4 まで (Fix Pack 4 は未インストール):

```
db2 -td! -f BCGUpgrade_422FP3_422FP4.sql -z
/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_422FP3_422FP4.log
```

4.2.2.4 から 6.0 まで:

```
db2 -td! -f BCGUpgrade_422FP4_600.sql -z
/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_422FP4_600.log
```

- f. save\_inputs スクリプトを実行して、DBLoader ユーザー入力をデータベースに読み込みます。例えば、次のようになります。

```
db2 -td! -f save_inputs.sql -z
/tmp/bcgdbloader/logs/save_inputs.log
```

- g. Set\_Grants.sql スクリプトを実行して、データベースでの必要な許可を設定します。例えば、次のようになります。

```
db2 -td! -vf Set_Grants.sql >/tmp/bcgdbloader/logs/Set_Grants.log
```

## Oracle

以下のコマンドを実行します。

**注:** Windows の場合は、管理者ユーザーとしてログインする必要があります。

- a. cd {INSTALL DIR}/DBLoader/scripts/Oracle  
b. 既存のバージョンに従って、以下のスクリプトのいずれかを実行して、データベースをアップグレードします。

4.2.1.0 から 4.2.1 まで (Fix Pack 1 は未インストール):

```
sqlplus -L bcgapps/password @BCGUpgrade_421_421FP1.sql
>/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_421_421FP1.log
```

4.2.1.1 から 4.2.2 まで:

```
sqlplus -L bcgapps/password @BCGUpgrade_421FP1_422.sql
>/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_421FP1_422.log
```

4.2.2 から 4.2.2 まで (Fix Pack 2 は未インストール):

```
sqlplus -L bcgapps/password @BCGUpgrade_422_422FP2.sql
>/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_422_422FP2.log
```

4.2.2.2 から 4.2.2.3 まで (Fix Pack 3 は未インストール):

```
sqlplus -L bcgapps/password @BCGUpgrade_422FP2_422FP3.sql
>/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_422FP2_422FP3.log
```

4.2.2.3 から 4.2.2.4 まで (Fix Pack 4 は未インストール):

```
sqlplus -L bcgapps/password @BCGUpgrade_422FP3_422FP4.sql
>/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_422FP3_422FP4.log
```

4.2.2.4 から 6.0 まで:

```
sqlplus -L bcgapps/password @BCGUpgrade_422FP4_600.sql
>/tmp/bcgdbloader/logs/BCGUpgrade_422FP4_600.log
```

- c. save\_inputs.sql スクリプトを実行して、DBLoader ユーザー入力をデータベースに読み込みます。例えば、次のようになります。

```
sqlplus -L bcgapps/password @save_inputs.sql
>/tmp/bcgdbloader/logs/save_inputs.log
```

- d. Grants\_Syns.sql スクリプトを実行して、データベースでの必要な許可を設定します。例えば、次のようになります。

```
sqlplus -L bcgapps/password @Grants_Syns.sql >/tmp/bcgdbloader/logs/
Grants_Syns.log
```

---

## 照合シーケンスの更新

以下の情報では、DB2 と Oracle の照合シーケンスを変更する方法について説明します。

### DB2

DB2 上の WebSphere Partner Gateway 6.0 では、ユニコード・データのソート処理能力を改善する UCA400\_NO 照合シーケンスを使用します。DB2 では、既存のデータベースの照合シーケンスを変更できません。WebSphere Partner Gateway は、既存のデータベースをバージョン 6.0 にマイグレーションする場合、照合シーケンスの設定を変更しません。ご使用のインストール・システムで UCA400\_NO 照合シーケンスを使用するには、以下の手順に従います。

1. DB2 UDB Control Center で、現行の WebSphere Partner Gateway データベース (つまり BCGAPPS) のバックアップを作成します。
2. 現行の WebSphere Partner Gateway データベース (BCGAPPS) を除去します。
3. WebSphere Partner Gateway 6.0 に付属の DBLoader ツールによって作成された Create\_db2.sql ファイルを使用して、新規のデータベースを作成します。

```
db2 -td! -f Create_db2.sql -z Create_db2.log
```

4. DB2 UDB Control Center で、以前の WebSphere Partner Gateway データベースのバックアップを、作成したばかりのデータベースに復元します。必ず「既存のデータベースに復元 (Restore to Existing Database)」オプションを選択してください。

### Oracle

Oracle データベースでは、照合シーケンスを動的に変更できます。この機能を使用するために、WebSphere Partner Gateway は、BCGUpgrade\_422FP4\_600.sql スクリプトが実行されると、NLS\_SORT セッション変数の値を変更します。

照合シーケンスについて詳しくは、「管理者ガイド」の『トラブルシューティング』の章を参照してください。

---

## MQSeries と JMS のキュー構成の更新

以下の手順では、MQSeries と JMS のキュー構成を更新する方法について説明します。この手順は、バージョン 4.2.2 以上では必要ありません。

1. MQSeries がこのリリースのサポート要件を満たしていることを確認するには、1 ページの『プラットフォーム、ハードウェア、およびソフトウェアの要件』を参照してください。先に進む前に、必要に応じて更新します。

2. UNIX: `su -mqm`  
Windows: 管理者ユーザーとしてログインします。
3. 以下のコマンドを実行します。

```
runmqsc bcg.queue.manager < {CD_ROM/MEDIA DIR}
/Tools/MQSeries/BCGUpgrade_Queues_v421.mqsc
```

`bcg.queue.manager` が MQSeries キュー・マネージャー名である場合。

---

## 以前のバージョンのアンインストール

以下の手順では、WebSphere Partner Gateway の以前のバージョンをアンインストールする方法について説明します。

1. Windows の管理者ユーザーまたは UNIX の root ユーザーとして、以下のコマンドを入力して、旧バージョンをアンインストールします。

```
{INSTALL DIR}/_uninst/uninstall
```

アンインストールの対象として、すべての機能を選択します。「このシステム上にファイルが存在し、インストール後に変更されました。このファイルを除去しますか。(a file exists on this system and it has been modified since installation. Do you want to remove this file?)」というメッセージのプロンプトが出されたら、「いいえ」をクリックします。

2. 残りのディレクトリー・ツリーを削除します。

**重要:** {INSTALL DIR}/ 共通ツリーは削除しないでください。ここには、多くのランタイム文書およびデータが保管されています。バックアップされていない場合は、共通ツリーを削除するとデータを損失します。また、ウィザードでインストールされなかったファイルも残ります。マイグレーションが正常に完了し、ファイルがなくなっただけを確認するまで、ファイルは削除しないでください。このロケーションに DBLoader ディレクトリーが存在している場合は、ディレクトリーを削除しないでください。

---

## WebSphere Partner Gateway のインストール

Windows の管理者ユーザーまたは UNIX の root ユーザーとして、ご使用のオペレーティング・システムに対応する `setup*` ランチャーを使用して、WebSphere Partner Gateway をインストールします。例: `CD_ROM/MEDIA DIR}/hub/setup*`

1. 以前のバージョンで使用したのと同じ入力値 (ユーザー ID、パスワードなど) を指定します。

**注:** 以前のバージョンと同じディレクトリー・ロケーションを指定すると、インストーラーは以前の構成情報を保持します。

2. 構成デフォルトを検査し、必要に応じてオーバーライドします。
3. 共通の共用ディレクトリー・ツリーが正しいことを確認します。

---

## カスタム構成の復元

アップグレード前のバージョンでカスタマイズした構成を復元します。バージョン 6.0 の Receiver と Document Manager の構成ファイルには変更点があります。新しい 6.0 構成ファイルを使用する必要があります。構成ファイルの 6.0 バージョンを、バックアップ・ディレクトリーの古いバージョンと置き換えないでください。

ご使用の 4.2.2 バージョンに加えられた可能性のある構成ファイルの変更点を確認するには、4.2.2 バックアップ・ディレクトリーと 6.0 インストール・ディレクトリーにあるそれぞれの構成ファイルの内容を比較します。変更点がある場合は、手動で 6.0 ファイルにマージしてください。

**注:** これらのディレクトリーにある `version.properties` ファイルは、変更しないでください。

以下のディレクトリーに配置されているファイルの内容を比較します。

`console/lib/config`

`receiver/lib/config`

`router/lib/config`

`router/lib/config/bcg.properties` ファイルには、`bcg.alertNotifications.mail*` プロパティー、および `bcg.A01.from*` プロパティーに配置される RosettaNet 連絡先情報が記述されています。6.0 ハブのインストール時にこれらの値が正しく入力されなかった場合は、4.2.2 の `bcg.properties` ファイルから新しい 6.0 の `router/lib/config/bcg.properties` ファイルに値をコピーできます。

**注:** ベースの RosettaNet V02.00 パッケージに対する変更では、以前に変更内容がインストールされている場合は、コンソールを使用してそれを再ロードする必要があります。

---

## WebSphere Partner Gateway の開始

UNIX の場合は、40 ページの『WebSphere Partner Gateway の開始』を参照してください。

Windows の場合は、76 ページの『WebSphere Partner Gateway の開始』を参照してください。

**重要:** WebSphere MQ キュー・マネージャー、リスナー、および JMS ブローカーは、WebSphere Partner Gateway の再始動を試みる前に再始動する必要があります。

---

## Oracle JDBC ドライバーの更新

何らかの理由で、Oracle のサービス・レベルを変更した場合、例えば、フィックスパックを適用した場合などは、Oracle JDBC ドライバーの互換性を確認する必要があります。必要であれば、このセクションの手順に従って、Oracle JDBC ドライバーを更新してください。

Oracle JDBC ドライバーを置き換えるには、以下のようにします。

Oracle JDBC ドライバーを変更するけれども、ドライバー・ファイルまでのディレクトリーおよび絶対パス名は元のままにする場合は、以下のようにします。

1. WebSphere Partner Gateway の Console、Receiver、および Document Manager を停止します。
2. Oracle JDBC ドライバー・ファイルを置き換えます。
3. WebSphere Partner Gateway の Console、Receiver、および Document Manager を開始します。

Oracle JDBC ドライバーを置き換えると、ドライバー・ファイルの絶対パス名が変更される場合は、次の手順を実行します。

1. WebSphere Partner Gateway の Console、Receiver、および Document Manager を停止します。
2. Console、Receiver、および Document Manager の各コンポーネントごとに、bcgdatabase.jacl を使用して既存の JDBC データ・ソースを除去します。

JDBC データ・ソースを除去します。bcgdatabase.jacl から情報を呼び出すには、次のコマンドを入力します。

注: Windows の場合は、ファイル拡張子 .sh を .bat に置き換えます。

```
./bcgwsadmin.sh -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE uninstall
[db2 | oracle] <nodeName> <serverName>
```

次の値を使用してください :

```
./bcgwsadmin.sh -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE uninstall
oracle DefaultNode <bcgconsole, bcgreceiver, or bcgdocmgr>
```

3. bcgdatabase.jacl を呼び出して、コンポーネント (Console、Receiver、Document Manager) ごとに JDBC データ・ソースを作成します。

```
./bcgwsadmin.sh -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE
install <dbType> <dbName> <dbHostname> <dbPort> <dbUserId>
<dbPassword> <nodeName> <serverName> <dbZipFile> <jndiName>
```

<> 内の値を、インストール時に指定した値と置き換えることを忘れないようにしてください。

4. Oracle オプションによって作成されたファイルを使用してインストールする場合は、dbZipFile が、データベースに接続するときに使用する必要のある Oracle JDBC ドライバーの絶対パス名です。以下を入力します。

```
./bcgwsadmin.sh -f bcgdatabase.jacl -conntype NONE install oracle
<dbName> <dbHostname> <dbPort> <dbUserId> <dbPassword>
DefaultNode server1 <dbZipFile> datasources/OracleDS
```

5. Console、Receiver、および Document Manager を開始します。



---

## 索引

日本語、数字、英字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

### [ア行]

アップグレード 83  
アップグレード、オペレーティング・システムの 85  
アップグレード、データベースの 85  
アンインストール、以前のバージョンの 89  
アンインストール、WebSphere Partner Gateway の 43  
インストール、コンポーネントの 27  
インストール、AIX での 13  
インストール、Linux での 13  
インストール、Solaris での 13  
インストール、WebSphere Partner Gateway の 19  
インストール、Windows での 49  
インストールおよび構成、DB2 の 16  
インストールおよび構成、Oracle の 17

### [カ行]

開始、ヘルプ・システムの 42  
開始、WebSphere Partner Gateway の 40  
環境の計画 4  
検査、UNIX プラットフォームのインストール前提条件の 13  
更新、照合シーケンスの 88  
更新、MQSeries と JMS の 88  
更新、Oracle JDBC ドライバーの 90  
構成、WebSphere MQ の 15  
コマンド行インストール 39

### [サ行]

サーバーの考慮事項 11  
サイレント・インストール 40  
作成、データベースの 20  
シャットダウン 83  
スケーラビリティ計画 5  
セキュリティ計画 6  
接続形態 8  
設定、DISPLAY 環境変数の 19  
ソフトウェア要件 1

### [タ行]

追加、ユーザー・アカウントの 14  
データ・ストレージ計画 5  
テスト、インストール・システムの 42

統合接続形態 9  
トラブルシューティング 44

### [ハ行]

バージョン検出の問題 45  
ハードウェア要件 1  
バックアップ、以前のバージョンの 84  
復元、カスタム構成の 90  
プラットフォーム要件 1  
プリインストールのチェックリスト 17  
分割接続形態 9  
分散接続形態 9  
ポートの計画 7  
ポッドに基づいた設計 10

### D

Database Loader のエラー 44

### L

launchpad 19



---

## 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032  
東京都港区六本木 3-2-31  
IBM World Trade Asia Corporation  
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Burlingame Laboratory Director  
IBM Burlingame Laboratory  
577 Airport Blvd., Suite 800  
Burlingame, CA 94010  
U.S.A

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

#### 著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

WebSphere Partner Gateway には、ICU4J というコードが含まれています。ICU4J のコードは、IBM の「プログラムのご使用条件」に基づきその「適用除外コンポー

ネット」の条項に従うことを条件に使用許諾されます。ただし、IBM は以下の条項を明示することを義務付けられています。

#### 著作権および許可に関する注意事項

本「プログラム」は、IBM 社およびその他の著作権により保護されています。

Copyright (c) 1995-2003

All rights reserved.

このソフトウェアおよびその関連文書ファイル (以下「ソフトウェア」といいます) を取得する人には、この「ソフトウェア」の、使用、複製、変更、結合、出版、配布またはソフトウェアの複製を販売する権利を含め、制約なく取引する権利を無償で許可し、また、「ソフトウェア」を与えられた人にも、この権利が与えられます。ただし、上記の著作権表示およびこの許可通知が、すべてのこの「ソフトウェア」の複製に記載され、また上記の著作権表示およびこの許可通知が、関連文書に記載されている場合に限りです。

ソフトウェアは、特定物として現存するままの状態を提供され、第三者の権利の不侵害の保証、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含む、すべての明示もしくは黙示の保証責任または保証条件を負わないものとします。さらに、著作権者またはこの注意事項に含まれている権利の所有者は、このソフトウェアの使用または実行に起因するものであれ、関連するものであれ、契約、過失、不法行為のいずれによるものであれ、使用、データまたは利益の喪失から発生する請求、あるいは特別、直接的、間接的、結果的損害、または他の一切の損害について、何等の責任も負いません。

この通知に記されているもの、および事前の書面による承認がある場合を除き、著作権者の名前を、このソフトウェアの広告、または販売、使用、取引の促進のためにご使用になることはできません。

---

## プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

**警告:** 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

---

## 商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

i5/OS

IBM

IBM ロゴ

AIX  
CICS  
CrossWorlds  
DB2  
DB2 Universal Database  
IMS  
Informix  
iSeries  
Lotus  
Lotus Domino  
Lotus Notes  
MQIntegrator  
MQSeries  
MVS  
OS/400  
Passport Advantage  
SupportPac  
WebSphere  
z/OS

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

MMX および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。



WebSphere Partner Gateway Enterprise and Advanced Editions バージョン 6.0。





Printed in Japan